
天上の恋歌 光の楔

崎浦和希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天上の恋歌 光の楔

【Nコード】

N7259H

【作者名】

崎浦和希

【あらすじ】

魔法大国の隠し姫シルヴィアは、いままで小さな、でもあたたかい籠の中でだいじにだいじに護られてきた。導くものたちに従って籠から出るとき、彼女の前に広がるは――。箱入り王女だったシルヴィアの、触れる世界と幼い恋の物語。

現在、序章修正中です。改稿したものをから順に再掲載していきます。序章の更新は割り込み投稿になるので日付がありません。

序章は飛ばしても支障のない部分です。本編続きの更新も同時に行っていきます。よろしく願います。

P r o l o g u e (前書き)

創作世界による恋愛ファンタジー小説です。
恋愛色もファンタジー色も濃い目になっています。

Prologue

叩きつける雨と風が、窓ガラスを何度も揺らす。それなのに、部屋の中は奇妙なほど静まり返っていた。

蒼く薄暗い室内に人影は二つ。闇に融ける影のような青年と、わずかな灯りにさえ淡く輝く白銀の髪を持つ少女。

青年は柔らかな寝台の枕もとに腰掛けて、眠る少女を見つめていた。整った面差しには憂いを滲ませ、もう随分と長い間、身じろぎもせずにそうしている。けれどふと、彼は思いついたようにその腕を彼女へと伸ばし、柔らかなミルク色の頬に指先をあてた。

髪と同じ透けるような銀の睫毛を穏やかに伏せ、口元に淡い笑みを浮かべる少女は、ただ眠っているようにしか見えない。

けれど、触れた頬は氷のように冷たく、閉ざされた瞼はわずかも動きはしなかった。

「……………」

世界から隔てられたような静寂のなかで彼が呟いた少女の名は、誰にも届くことなく薄闇に消える。当然、応えるものはなにもない。それでも青年は、返事がないことを痛いほど承知しながらも、艶やかな髪をそつと撫で、包み込む闇にもう一つだけ、彼女に向けた言葉をとかした。

「おやすみ……………どうか、良い夢を」

Section・1

「外はだいぶ寒いみたいだね。もうすぐ雪が降りはじめよ、イヴ」
セシルは窓ガラスについた細かい水滴を見つけて部屋の中を振り返る。すっかり真つ暗になった外と対照的に明るいオレンジ色の光に溢れる室内では、暖炉のそばのソファに腰かけて一人の少女が熱心に膝に置いた本へと目を落としていた。その彼女が、名を呼ばれて顔を上げる。動きに合わせて、腰よりも長い白銀の髪がさらりと零れ落ちるさまが美しい。やや緩慢な動作でセシルを捉える瞳の色は、海よりも深く空よりも透き通った青。

ほっそりと華奢な体つきは、それでも年頃の娘らしい曲線を描いていた。

「……ゆき？ つめたいの？」

「そう。冷たくて白いの。前に見たことがあるよね？」

「……うーん？」

外見よりもずっととどけない口調で応えた少女——イヴは、本を閉じるとソファを降りて窓際に立つセシルのもとへ歩み寄った。服の長い裾からのぞく小さなつまさきが、やわらかな絨毯をなぞる。部屋の外と中を隔てている窓の近くはひんやりと冷たかった。

「そと、見えない……」

「こうすると見えるようになるよ」

セシルが手で窓を拭くと、半透明になったガラスにぼっかりと黒い穴があく。

「どうして？」

不思議そうにイヴは窓に触れた。細い指が、セシルの作った穴から透明な軌跡を描いていく。そのことにも興味津々でガラスに顔を近づけて、そこに映る自分自身に彼女はぱちくりと瞬いた。

「？」

「面白い？」

自らの指先についた水滴を眺めて首を傾げるイヴを、セシルは後ろからそっと抱え込む。男性としては華奢な部類に入るであろうセシルでも、女性のうちでも輪をかけて頼りない身体をしているイヴを相手にすればすっぽりとその腕で包み込めてしまふ。背中に伝わる慣れ親しんだあたたかさに、イヴはほっと息を吐くと目を閉じて身を任せた。

「寒くない？ 大丈夫？」

「うーん、ここちよつとさむい、かも……」

ひやりとした窓辺の冷気が身に染みて、身体が冷えてしまったことに気づいたセシルは腕の中のイヴを抱き上げ、火の爆ぜる暖炉のそばへと戻った。ソファに掛けて膝の上に少女を乗せ、彼は先ほどまでイヴが開いていた豪奢な装丁の本に手を伸ばす。

「本の続きを読もうか？」

「……いや」

セシルが開いた本を見て、イヴは少し拗ねたような顔をする。部屋の熱気だろうか、ほんのりと薄紅に染まるその頬をつつきながら、セシルは優しい笑みを浮かべてみせた。

「どうして？」

「だって、あんまり読めないもの。……字、読むの、たいへんなのに」

「僕が読んであげるよ。この話、好き？」

読み書きを勉強中のイヴのためにこの日セシルが選んだ本は、とても美しい挿絵の描かれた有名な神話の絵本だった。

「んと、セシルが前に話してくれた、神さまのおはなしだね？」

「うん。どこまで読んだの？」

「ここまで」

「じゃあ、続きから読もうか」

ほどよく暖められた部屋に響く、薪の爆ぜる小さな音と、耳に心地よい穏やかな声。物語に耳を傾けながら、イヴはそつと彼の胸に頬を寄せた。やがて聞こえてくるのは、規則正しく鼓動を刻む心

臓の音。居心地がよくて暖かなその場所で、気がつけばイヴは無意識に瞼を伏せ、くたりと身体の力を抜いて彼に寄りかかっていた。「——というわけで、この世界は七人の神様が力を合わせて護ってゆくことになったのです。……イヴ？」

「……ん……？」

最後の一行を読み終えて、セシルはイヴが反応しないことに気づいて呼びかける。ぼんやりした声でかろうじて返事をするイヴは、子守唄代わりのセシルの声と掛布代わりの腕に抱かれて、夢うつつの間に落っこちていた。

「聞いてた？」

「……うん」

「ほんとうに？」

「……う……ん」

「うそつき」

「……ん、うひゃ!？」

不意に、頬をむにと引つ張られて驚いたイヴが目を開けると、目の前には上から覗き込むようにしているセシルの顔があった。綺麗な濃紫の瞳の中に、イヴの姿が円く映りこんでいる。

「イヴ、寝てたでしょう」

「寝て……ない」

「そんな眠たそうな顔で言われても、全然信じられないね」

「寝……てない……も……ん……」

そう言い張りながらもイヴの声は不明瞭になっていき、語尾もだんだんと小さくなって、しまいにはセシルの膝の上でまるくなったまま動かなくなった。

「イヴ？」

軽く揺すってみても反応はない。セシルは諦めて、本を机に置いた。

この話は、この国で一番有名なものだ。学校に入れば最初の年から必ず学ばされるもののだが、たいていの子供は皆、初等部に上

がる前に親や祖父母から聞かされる。

そうしてこれがただの『神話』——伝説では収まらないこともまた、この国の者、さらには同じ大陸にあるどこの人間でも当たり前前に知っていた。

テーブルの上に広げられた最後のページ、華やかに彩色された子ども向けの挿絵には、人と同じ姿をした七人の“神”が仲良く笑いう様子が描かれている。それに目を落としたセシルの、濃紫の瞳がかすかに翳る。彼は片腕でイヴを支えながら、手を伸ばして開いていた本を静かに閉じた。

「ん……」

「あ、イヴ起きた？」

明るい陽光の差し込む部屋の寝台の上で、イヴが僅かに身じろぎした。彼女の意識が浮上した気配を察して、枕元に手を付いたセシルが覗き込むと、白銀の睫毛がふるりと震えて真っ青な瞳がぼんやり覗く。

「……せしる？」

「お目覚めですか、おひめさま」

寝ぼけてふにやふにやした様子がおかしいのとかわいいのとでセシルがくすりと笑いをもらせば、ようやく頭のはつきりしてきたらしいイヴは数度瞬いて、どうして笑われたんだろう？ とその頭を傾けた。

なんでもないよ、そう言いながらセシルは彼女を寝台から降ろす。
「イヴ、顔を洗っておいで」

「んー……」

未だ眠そうに目を擦る彼女の背中を促すように、ぽんぽんと背中を押す。覚束ない足取りで部屋の隅に据え付けられた洗面台へと歩いてゆく後姿を見送りながら、セシルは寝台を整えて着替えを用意し、戻ってきてぼたぼたとしずくを垂らしっぱなしのイヴの顔を拭いてやりつつ手渡した。とはいえ、彼女が一人で着替えられるかというところではないので、夜着を脱ぐ段から時々手を出して手伝ってやらねばならない。さすがに、肌着までは自分でなんとかさせるようにしているのだが。

イヴが夜着を脱ぎ去ると、真っ白な肌が陽の光にさらされて、冷えた外気に頼りない肩が小さく震える。

平素見ているだけでも分かる、触れることで余計に顕著に感じられる彼女の華奢な体つきは、まるで繊細な硝子細工を思わせた。だが同時に、その身体は言動の幼さとは裏腹の、女性らしい柔らかな曲線を持ち合わせている。

その精神と身体のアンバランスさに、年月のあいだに慣れたこととはいえセシルはいつも複雑な思いを抱かされた。彼女の前で、表に出すことはしないけれども。

「ほら、袖も通さない」と

「……んう」

セシルがそう指摘すると、イヴは襟ぐりからようやく出した頭をふるふる振って、ちよつと不満そうに今度は袖と格闘しはじめる。セシルは相変わらずの不器用さに苦笑しながら、通しやすいよう袖の先を引いてやった。やっと出てきた小さな手を軽く掴んで袖口を整えてやると、縫い付けられたレースがふわりと揺れる。

もう片方も同じように通させて、仕上げに胸元のリボンを結ぶ。これで、着替えは終わり。

最後にセシルがりボンを器用に形作るのをぼうつと見下ろしていたイヴは、綺麗に出来上がったちようちよ結びの輪をつまんでちよんと引っ張った。

「イヴ、ほどけてしまっよ」

「……ほどけても自分で」

「イヴは自分では結べないでしょう」

これまでに彼女が積み上げてきた数々の失敗を思い出して淡く笑うセシルに、イヴはむっと頬をふくらませた。

「がんばれば、できるもの」

「そうなの？　じゃあ、今まであんまり頑張ってなかったんだ」

「……………」

少し意地悪くそう返せば、イヴはちょっと困ったように目を泳がせる。そんな素直さが可愛いらしい、と思いつつも口にも顔にも出さず、セシルはイヴの長い髪を撫でた。頬に落ちかかるこぼれ毛を耳にかけてやり、乗り上げていた寝台から降りて彼女の手をそっと引く。

「お腹空いたでしょう？　朝ごはん……もう昼だけど、用意したから一緒に食べよう？」

「ん、今日のごはんはなあに？」

「蜂蜜のトーストとバターオムレツとサラダ。蜂蜜が好きだったよね」

「あの、甘くておいしいの？」

聞き返しながらイヴは嬉しそうに笑って、セシルが手を引くのに従ってベッドからぴょんと飛び降りた。着地に失敗してよろけるのを抱きとめられ、彼を見上げて無邪気に顔を綻ばせる。

「あのね、セシル」

「なあに？」

「それでもね、いつかは、ちゃんとできるようになるからね」

そう言って胸元のリボンを指し示すイヴに苦笑して、セシルはよしと頭を撫でてやった。

「じゃあ、うまくできるように練習しないとね」

「セシルが教えてくれる？」

「もちろん。でもまずは朝ごはんを食べよう。おいで、イヴ」

差し出されるまま手のひらを重ねたイヴと歩調を合わせて、セシ
ルはゆっくり廊下を歩いていく。

それがこの二人きりの暮らしでいつも変わらない、一日のはじま
りの風景だった。

Section・2

「じゃあ行ってくるね」

セシルがそう言って頭を撫でると、イヴはセシルが纏うロープの端をきゅつと握って、何も言わずに彼を見上げた。青い瞳はゆらゆらと揺れている。

一人で残されるというのは、彼女にとっても怖いことなのだ。今にも泣き出しそうな瞳にできるならそばにいてやりたいと思うのだけれど、用事があればそうはいかない。せめて眠っているうちに外かけて帰ってこられたら良かったのだが、急なことなのでそうもいかなかった。

「すぐ帰ってくる？」

「うん、できるだけ早く帰ってくるから。お屋敷から出ないで、いい子にしているね」

屋敷から出ないと言っても、どうせ彼女はこの屋敷の敷地内から出られない。そのこと自体は知らないが、いやだと言っても仕方のないことは彼女にも分かっているのだろう。イヴは涙をこらえる顔をして、こくとひとつ頷いた。

イヴを部屋に残して身支度を整えたセシルは、玄関ホールへ向かう階段を足早に降りていく。足元まで覆う黒い外套の裾がひらめいて階段を摺る、けれどそれが彼の動きを阻むことは一切ない。見る人が見れば分かるような、彼はそういう隙のない身のこなしをして

いた。

その彼が階段の中ほどまで降りたところで、ふと足を止めた。一度目を伏せて何かを考えるようにしたあと、静かに視線を滑らせる。その先に、淡い紅色の髪をした少年が一人。まだあどけない顔立ちをした子どもは、セシルが通り過ぎたばかりの踊り場の手すりに腰かけて、床に付かない両足をぶらぶらと宙に遊ばせていた。外側に身体を向けているためセシルから見えるのは後姿だが、その薄紅の色合いには見覚えがある。

「……ハル？」

名を呼ぶと、少年は首だけ回して振り返り、快活そうな笑顔を見せてひらひらとその手を振ってみせた。

「久しぶり」

「久しぶり、って言うほどでもないと思うけれど」

彼に会ったのはつい半月前だ。その時はイヴを寝かしつけてから家を出て、起きだしてくる前に戻った。彼女は半日くらいひたすら眠っているから、自分の睡眠時間を考えなければ慌しいことでもない。とはいえあまり長く家を空けているのは心配で、どちらにせよ可能な限り早く帰ってくるのだが。

セシルが苦笑しながら訂正すると、少年——ハルはわざとだったのかそうでないのか、読みづらい顔で首を傾げた。

「そう？」

「そうだよ。ところでお前がここにくるなんて珍しいね。どうしたの？」

セシルが一度は下りた段をもう一度上がって近寄れば、ハルも器用に手すりの上でその身体を反転させる。普段、ハルの身長はセシルの胸ほどしかないが、今は目線が同じくらいの高さにあった。覗き込んで感情を見るには丁度いい。

とは言っても、見た目よりかなり大人びたこの少年は自身を隠すことに随分長けていて、瞳を覗き込んだところで隠されてしまえば滅多なことでは分らない。

「んー、別に。なんとなく」

その答えはおそらく嘘だ。この屋敷は来てはいけない場所ではなくとも、彼が好んで寄り付く場所ではないから。

でもやっぱり、セシルが探ってみても彼の髪と同じ色の瞳からは何も読み取ることができなかった。セシルのそんな視線に気づいてか、ハルは気まずそうに目を逸らし、今しがたセシルが下りてきた上の階へと顔を向ける。

「……彼女は？」

「部屋に居るよ」

「そっか」

ハルはわずかにその瞳を曇らせて上階を見つめたまま動きを止める。複雑そうにしている心中は、表に出さなだけでセシルがいつも感じているものと同じだろう。

彼女はなにも知らない。何も気づいていない。けれど、周囲には——セシルも含め——いくつもの思惑が絡んで彼女を幾重にも取り囲んでいる。逃れるすべなどどこにもない、その分、知らないほうが幸せといえるのだろうか。

「……………帰る」

しばらくして、ハルはぽつりと呟いた。どこか寂しそうにも見受けられる表情に、セシルはふと、そういえばいつも彼と一緒にいる片割れがないことに気がついた。そうして、ハルがひとりでここに来た理由にもなんとなく察しをつける。だがあえてそれをつつくことはしない。

けれども、そういう理由ならなんでここに来たんだか。落ち込んだなら落ち込んだで別のところに行けばいいものを、この屋敷に来ると余計に拍車がかかるだけだろうに。

セシルは呆れて何か言っただろうかとも思ったが、結局聞きかけた唇をつぐんだ。思ったことを、何と言えいいのか分からなかったのだ。

「あ、そういえば今から出かけるところでしょ？ セシルもぼくと

「一緒のほう？」

そんなセシルの内心を知ってか知らずか、ハルは少し明るさを取り戻した声で訊く。たぶん今ごろ彼の頭の中は、帰って片割れと仲直りすることではないのだろうか。そんな顔をしていた。

「うん、ちよつと王城に。ここからだとは直接は行けないから、うちを経由して向かうよ。それで」

セシルが視線で指したのは玄関ホールの床、そこには直径が二人分ほどある円陣が刻み込まれている。内部に複雑な紋様を描くその陣の一番外側を閉じる円は一部が欠けて、環が不自然に途切れた形だ。

「じゃあ一緒に行く」

ハルはちらりとそれを一瞥し手すりから身軽に飛び降りると、セシルが懷から出したものを受け取って先に階段を下りていった。

Section . 3

セシルがハルと別れて城に上がると、心得ていたらしい側近に案内されて待たされることなく居室に通された。だが、部屋はセシルを呼び出した相手が本来昼間に居るべき執務室ではなく、その私室だ。彼はセシルが来たときにはすでに部屋に居て、昼食を兼ねた休憩時間としていたようだった。

「やあ、よく来てくれたね。突然呼び出してしまつて済まない」

セシルを見て柔和に微笑むその面差しはかつて國中、否大陸を越えて評判だった母君譲りで美しく気高い。彼が軽く手を振ると案内してきた者も給仕をしていた女官も退出し、部屋には彼とセシル二人きりで残された。

大きく取られた窓から差し込む光を受けて神々しいほど輝いて見えるその人はアルフレッド——この国の若き王だ。美しい金系の髪に同色の瞳という、一族が『太陽の王家』と呼ばれる理由となった特長を間違いなく受け継いで、誰が見ても王族だと一目で分かる。

アルフレッドはセシルに長椅子に腰かけるよう促して、自身もその向かいへと落ち着いた。

「君のほうからは特に何の連絡もなかったから、次回まで待つても良かったのかもしれないけれど、少し気になつてね」

「なにか、あつたのですか？」

前置きなくそう切り出したアルフレッドに、セシルはわずか瞳を翳らせる。自分が今ここに呼ばれる理由など彼女を巡つてのことしかないはずだが、思い当たる節はない。アルフレッドはそんなセシルに対して「そう重大なことではないかもしれないが」と断つたあと、ふと視線を窓の外へと逸らした。セシルが追えば、その先には石造りの真つ白な離宮がある。

「昨夜遅くのことだ。少し、おかしい反応をしてね」

「……どちらが」

アルフレッドは、無言で答えを指し示した。彼の瞳は離宮に置かれたまま、つまりはそれが答えだ。セシルが続きを促すと、彼は軽く息をついてセシルのほうに向き直った。

「あれが揺らいだんだ。私も血族の者だから小さな揺らぎでも感知してしまう部分はあるけれど、それでもあれはそう『小さい』ものではなかった。昨晚、何かあった？」

「これといって思い当たるものは……。すぐそばに居れば気がついたかもしれませんが、さすがに寝室は別ですから」

「あれ、そうなの？」

「……。なぜ意外そうになさるのです。確かに、初めの頃は色々心配でしたから共にしていましたよ。でも最近は安定してきて大丈夫だろうと思ったので」

寝室が別だということに意外そうな顔をされ、セシルはほんの少しばかり不貞腐れるように眉を寄せた。さすがにそこまで危ういことはしていないしそういう趣味も持ち合わせていない。というのに、この人は一体自分を何だと思っているのだろう。

言いたいことはいくらもあったが、とはいえ話が話だけにいつまでもそんなことに構ってられず、セシルは表情を引き締めると少しでも引つかかることはないか昨夜からのことを思い出していった。

「昨日の夜は……普段とそう変わりありませんでした。いつもどおり、午前の遅い時間に起きてきて朝食と兼ねた昼食を取り、昼間の間は庭を散歩したりうたた寝をしたり。夕食もいつもの時間に済ませて……。そういえば寝る前に神話の本を読んでいたね」

本を読むのは日課となっではいるものの、内容はそれぞれに違う。変わりばえのない日々の生活の中で、何か特異な点があるとすればそのくらいしか浮かばない。尤も、セシルには彼女が何を見、何を感じてどう思っているのか知りようがないのだから、もしかしたら日常の中でも彼女にとって普通でないことはあるのかもしれないが。「神話か。何かのきっかけになったりすると思う？」

「分かりません。彼女の精神構造がそもそも不明ですから、何とも

言えないところです」

「不明、か……」

アルフレッドは呟くように言った。憂いを湛えて金の瞳がその色合いを濃く落とす。セシルはせめて予想のつく限りのことを告げようとして——だが、薄く開いた唇で次の瞬間はつと息を呑んだ。

「……………!？」

何か、背筋にぞくりとしたものを感じたのだ。その悪寒は何かの予感か、それとも——。乱れた神経を集中させて辿ろうとするも、それはすぐに実際の感覚と結びつく。今度こそ明確に、感じたのは第六感の警告などではなく、体内を巡る力に対する干渉。

「セシル君？　どうか……」

したのか、そう続けようとしたアルフレッドは、セシルの表情を見て言葉を切った。セシルはすぐ自分の失態に気づいたが、取り繕うほどの時間も惜しい。

「申し訳ありません、すぐ戻らなければ」

「『あれ』がどうかした？」

「おそらく……。はつきりとは分かりませんが、結界に大きな異常を感じます」

言うが早いか、礼を失した行為だと分かっているにも返事を聞くまえに踵を返して外套を羽織る。アルフレッドもそれを咎めたりはしなかった。何事もないように守るのは与えられた任務だけれど、セシルがどれほど『彼女』を大切に思っているか、彼はよく知っている。

「頼んだよ」というアルフレッドの声を背に、セシルはほとんど駆け出しそうになりながら回廊を抜け、行き交う人々に驚かれつつ城を出た。

決して傷つけないようにと守ってきたつもりだったのに、一体何があったのだろう。募る焦燥に応えるように、鼓動が早くなっている。自分の家へと戻る時間さえもどかしい。本当ならば今すぐにも飛んでいきたいところだが、この都とイヴを置いてきた田舎の屋

敷はどちらも防護の結界で護られているので簡単にはいかないのだ。転送が可能なのは、都にある屋敷だけだった。

せめてと状況を探ろうとしても集中が途切れてうまくいかない。セシルは苛立ち紛れに強く奥歯を噛み締めたあと、ふっと瞳を閉じて肺の底から深く息を吐きだした。

次に瞼を上げたとき、彼の双眸は奥底に魔力を宿して煌いていた。精神を安定状態に置いてもう一度。自身が織り成した結界を通じて、イヴの状態を引き寄せる。

「あまり大事で、なければいいけど……」
それは半ば祈るような思いだった。

気配は庭のほうにあった。セシルは自身の転送が完了するや否や、未だ魔法陣が輝きを残しているのにも関わらずそのまま玄関の扉をぶち破る勢いで外に飛び出し、真っ直ぐに彼女のもとまで駆け出した。不完全な魔法に焼かれて服の裾が焦げても一顧だにしない。その程度焙られたことよりも、暴発しそうなほど膨れ上がった魔力の気配に、肌を灼かれるほうが痛かった。まるで、風船に限界まで詰め込まれ続ける空気のように。空気が魔力だとしたら、風船は屋敷を囲む結界、あるいは辛うじて働いている、彼女自身の制御力だ。ギリギリまで引き伸ばされた薄い膜が破れてしまえば——それは小爆発と変わらない。

破れなくとも風船の中身は暴れまわる魔力でいっぱい、気を抜くとすぐにでも吞まれてしまう。セシルは不安定になる自身の魔力をとにかく必死で制しながら、生垣を抜けて屋敷の正門前に出た。

そこには。

「イヴ！」

透きとおるほど真つ白な姿が、力をなくしてふらりと傾ぐ。――
息が止まるかと、思った。

「……っ！ イヴ、しっかりして！」

倒れこむ彼女の身体を間一髪抱きとめて、セシルはその顔を覗きこむ。血の気をなくして青ざめた冷たい肌、くたりと力の入らない体。その中で、暴れ出そうとする魔力だけが強烈にのたうち回る。呼吸だけはなんとか保っているようだが、それも途切れがちで弱く、イヴは苦しそうに空気の塊を吐き出していた。

「……、っ、けほっ、……あ」

「！」

「あ、は……セ、シル……？」

小さな声で呼ばれた名前を、ごうごうと鳴る魔力の中でもセシルは聞き逃さなかった。

「そつだよ。ごめんね、そばについてやれなくて」

地面に投げ出された手を握り、自らの頬にあてがうと、イヴは苦しそうにしながらもわずか、ほっとしたように口元を緩める。

「クロフォード……？」

「は？」

「お前、クロフォードだろ？」

イヴのことばかりに気を取られていたセシルは、門の外から呼ばれた名前にはつと顔を上げた。セシルをクロフォードと呼んだ男は、呆然としたように門のすぐそばに立ち尽くしている。その顔に見覚えがあったような気はするが、今のセシルにとって彼のことなど構っているような暇はない。

誰だったか思い出す手間もなぜここにいるのか考える時間も省いて、セシルはイヴを抱き上げるとまっすぐにそのつま先を屋敷へ向けた。

「悪いけれど、用事があるならまた別の日にして」

「え、あ、……？」

どうせ、後日彼については調べをつけなければならないだろう。だが今はどうでもいい。戸惑う彼を無視して屋敷に戻り、真っ直ぐイヴの寝室に向かう。彼女の部屋にはまた一段強い防護結界が織られているから、多少でもそこが一番あらゆる意味で安全だ。

苦しそうにしているイヴを柔らかな寝台に下ろすと、彼女はうつすらと目を開けた。

「セシル……」

「うん。もう少し頑張つてね。すぐ楽にしてあげる」

青い瞳は滲んだ涙で潤んでいる。それでもセシルに絶対の信頼を寄せるイヴは、その一言で安心したようにほほ笑んだ。

「そのまま動かないで」

告げて、セシルは取り出したナイフで自らの手のひらを傷つけると口元に寄せ、そこからあふれ出した血液を口に含んだ。それからそつと、小さなイヴの唇に自分のそれを重ね口づける。背に腕を回しながら反対の手で少し仰け反るように顎を持ち上げると、イヴは生理的な反応で注ぎ込んだ血を嚥下した。

「ふ、あ、は……」

「もうちよつとだから」

それだけでイヴの頬に朱が差し、顔色は劇的に変化した。これで終わりではない。飲ませた血はあくまでも媒介で、セシルは彼女に入れた彼の魔力を使って内側から収束を試みるつもりだった。

「……………」

一つ、二つ、セシルが小さく言葉を落とすたびに、イヴの体を中心とした魔法陣が織り上げられていく。セシルの瞳と同じ濃紫色をした光が、陣に複雑な紋様を描いていった。

「な、に……？」

「大丈夫、怖がらなくていいよ。怖かったら目を瞑っていてもいい。つらいのをなくすだけだから」

「ん……」

「もう少し、ね」

セシルがゆっくり頭を撫でてやれば、イヴは一瞬身を強張らせたあとふっと体の力を抜いて目を閉じた。その直後、紡がれていた魔法陣の外環が繋がり、全体が淡く光りだす。

セシルは慎重に力を制御しながら、ゆっくりとイヴの内に織り成した術を染みこませていった。魔法陣が輝いていたのは長くても数秒、イヴの身体を包み込んだそれは次第に薄れ、やがては溶けるように消えてしまう。

「はい、終わったよ。イヴ、よく頑張ったね」

「んーん？ わたし、なにもしてないよ……？」

そうではない、と言おうとして、やめた。事実でも彼女は何も知らないし、それよりも今はただ休ませてやりたい。

言葉を飲み込んだセシルがふっと笑って吐息をもらせば、目を閉じたままのイヴもまた、ゆるい笑みを浮かべてその口元に弧を描いた。そのまましばらく黙って彼女を見ていると、荒かった呼吸が鎮まって、それからゆるゆると眠りに落ちたようだ。穏やかで、規則正しい寝息が聞こえる。

荒れ狂っていた魔力もおさまり戻ってきた静寂に、セシルはようやく、詰めていた息を吐き出した。

Section . 4

「セシル、セシル！　ねえ、あのね……」

ぱたぱた軽やかな足音とともにイヴが書棚の影から駆けてくる。

分厚い本を棚の上のほうへと仕舞いこもうとしていたセシルがそちらに顔を向けるのとほぼ同時に、彼女はふわりと風を孕みながら飛びついた。

「セシル！」

「おっと」

軽い衝撃ごとイヴの体を受け止め、セシルは優しく微笑みかける。見上げてくる青い瞳がきらきらしていて、頬は興奮にか少し赤い。今日は午後からずっと書庫の整理をしていてあまり構ってあげられなかったから、与えた絵本を相手に退屈そうにしていたのだけれど、どうしたのだろう。

セシルが首を傾げて問いかけると、イヴはくいくいとセシルの服を引っ張って、窓の向こうを指差した。

「ね、みてセシル。にじがでてるの！」

「虹？」

「うん、あれ！　“にじ”って言うのでしょ？」

窓があるのは書庫の北側にだけだ。セシルが今居るところからでは見えないので、服を掴んだ少女に引っ張られるまま、書棚の間から通路に出る。イヴの指差す先を見遣れば、山間に、ちょうどその頂上を結ぶようにして七色の橋が架かっていた。

「あ、ほんとだ。久しぶりに見たなあ」

「わたしははじめてみた！」

イヴは嬉しそうにくつきりと虹のうかんだ空を眺めている。その無邪気な横顔をちらりと見下ろして、セシルもまた窓の外に視線を戻した。虹は久しぶりに見たというだけで、セシルにとってそう大した感慨のわくものではない。けれどもそんなことが、この少女に

とつては頬を上気させるほど胸を打つのだ。

「すごい、きれいね、セシル」

「良かったねえ」

しかしまあ、見事に山と山を繋ぐように弧を描いたものだ。そう感心しつつふと思うところがあって、セシルは虹の根元あたりに目を凝らした。木々の黒々とした影のなかで、それとは別の、なにか黒いものが動いている。

「竜か……珍しい」

「りゅう？ ……あつ、それ、このあいだ本で読んだよ。虹が出るのは、竜がまほうを使ったときだって」

「あー、魔法を使わなくても、実は飛んだ跡があんなふうになって見えることもあるんだよ。ほらイヴ、見える？ あそこ、右の山の天辺」

「？」

「色が黒いから見えにくいかな。あ、ほら」

「うごいた！」

「うん、そう。あれ、竜だよイヴ。左の山から右の山に飛んだんだろっね」

セシルの言う隣で、イヴはじいつと目を凝らして遠い山の天辺を見ていた。姿を現すことはまれとはいえ、あまり動きもしない竜がそんなに面白いだろうか——まあそうだろうな、とセシルは思った。この屋敷から出ることのないイヴが知る世界といえば、屋敷の中と、それこそ窓から見える景色か、せいぜい庭に出たときに門の格子の隙間から見える変わり映えのない街道くらいだ。本人がそれに退屈している様子はなくとも、普段ならばまず目にしないようなものは興味を抱くのに十分だろう。

だがそうやって興味津々に見入っていても、セシルが「しばらく見ていていいよ」と言い置いて書棚の整理に戻ろうとすると、なぜか彼女は後ろをひよこひよこついて来た。

「イヴ、どうしたの？ 向こうに居ていいんだよ」

「んーん」

イヴはふるふると首を振る。先ほどの興奮はどこへやら、少し機嫌の悪そうな顔。眠たくなったのだろうか。セシルは腕の本を抱えなおして、軽く身を屈めた。

「お姫さまはお疲れかな？ お昼寝する？」

「んー」

それにもむずがるようにまた首を振ったイヴは、はたりと大きな目を瞬かせて、セシルの抱える本たちにその手を伸ばして触れようとした。意外な行動で制止が間に合わず、ほんのわずか、指先がかすってしまう。途端びくりと驚いたように手を止めた彼女の小さなそれを握って、セシルは本から遠ざけた。

「イヴ。これは、だめ」

一瞬襲った立ちくらみを、セシルは目を眇めることでやり過ごす。

「だめ？」

「そう。これはね、イヴがいつも読む本とは違うの。あぶないから、だめ」

イヴは、セシルが掴んですぐに解放した彼女の右手とセシルを不思議そうな顔をして交互に見遣り、最後にこくと顎を引いた。危ないというその意味を、彼女は本当に理解しているわけでないのに違いない。けれどもセシルが本気でだめと言えば決して否やを唱えないのもイヴだ。

よく言えば素直、含みのある言い方をすれば従順。イヴには、彼女自身の意志というものがいくらか乏しい。外見と精神の年齢が乖離している一端も、どうやらそこにあるようだった。

「それで、イヴはどうしたのかな。どうしたいの？」

抱えていた本を棚に仕舞ってから、セシルは改めてイヴと向き合った。眼差しを和らげて、幼げな、ぼんやりした表情を浮べる彼女を覗き込みながらゆったりとした口調で尋ねる。さらさらの白銀色を流す頭を撫でてやれば、イヴはきゅ、とその目を細めたあと、ぱふっとセシルの胸に飛び込んできた。そのままぎゅうぎゅう抱きし

められて、セシルはようやく理解する。

「ああ、ごめんね。ひとりにされて寂しかったんだね」

「……………」

イヴは応えない。でも、セシルの体に回された細い腕の力がささやかに、けれど彼女にとっては力いっぱいのもに変わったことで、イヴの思いは十分伝わってくるのだった。

昨日留守にしまったばかりだというのに、つい本を探すのに夢中になってしまふあまり、同じ書庫の中とはいえ彼女のことを放置してしまった。さみしいのにそれを我慢して、ひとり渡された本のページをめくっていたのである。イヴ。ふと顔を上げたときに虹を見つけて、それを真っ先にセシルに知らせてくれたのは純粋に綺麗なそれを教えてあげたかったのもうひとつ、きつと構ってもらいたかったのだ。

セシルがうつかり自分のことに没頭したせいで、イヴは随分孤独だっただろう。彼女にとつてなにをするにも、相手は自分しかないというのに。

「ねえ、じゃあお茶の時間にしようか。それとも、ちょっと眠そうだから先にお昼寝する？」

セシルはできる限りやさしく微笑^{わら}つてくつつくイヴを抱き上げると、そのまま出口へ歩きはじめた。ここにはまた夜にでも、イヴが寝てしまつてから来ればいい。

イヴはお茶の時間、という言葉に心惹かれたようだが、直後にくあつと小さくあくびをして、涙の滲んだ目元を擦った。そんな彼女に苦笑をうかべ、セシルは行き先をまつすぐ彼女の寝室に決める。

「ちよつと休んでからお茶にしよう。ね？」

「うん……セシルもいっしょ？」

「そうだねえ。久しぶりに一緒にお昼寝しようか」

イヴの髪がセシルの顎や首筋、鎖骨のあたりを滑るせいですこしくすぐったい。だがそんなことを知るよしもなく、イヴはうれしそうに口元に手をあてて身じろいだ。

「いいんですか、あなたは休まなくて」

「見たまま、休んでるけど」

「違うでしょう」

ふと、頭上から風のようにひそやかな声が聞こえたかと思うと、横たわるセシルの上に淡い影が落ちる。レースのカーテンだけ閉めた窓から差し込む光は夕方に差し掛かりつつある昼のもの、セシルはともに寝台に入ってからというもの、イヴの隣に横たわって眠る彼女をゆっくりと撫でやりながら、まんじりともせず徒に時を数えていたのだった。遠くから午後四つの鐘が聞こえる。もう少し季節が進めば、この時間でも空の色は紺に染まることになるだろう。この地方へ冬がやってくるときは駆け足のようにはやく、あつという間に一面を銀世界へと染めていく。

咎めるような厳しい視線を感じて、セシルは苦笑の息を吐き出しつつ、イヴを起こさぬよう静かに掛布の中で寝返りを打った。思ったとおり、そこには紅葉色とやや色素の薄い朱金色の、色違いの一对の瞳が、持ち主の幼い容貌に似つかわしくない厳しさでこちらを見下ろしている。

「やあ、アキ。来てくれたんだ」

「呼んだのはあなたでしょうに」

「まあそうなんだけどね。ハルとは仲直りした？」

尋ねると、彼——アキは軽く目を睨り、それからふいと顔をそむけた。あなたのそういうとこ、嫌いです。そう尖らせたくちびるのあいまから呟いて、拗ねた子どもの顔をする。でも、それにセシル

がくすりと笑えば、幼げな仕草を引つ込めて、アキはたちまち見た目の歳に似合わぬ硬い雰囲気纏ってしまった。色違いの瞳がセシルを見据える。ひたりと、どこまでも冷静に。

「呼び出した用件については」

「この子が調子を乱した原因を調べてほしい。間違いなく魔力がらみだから」

「ええ、承知しています。そちらはすぐにでも。でも、ぼくにはもうひとつ、あなたに忠告しなければならぬことがあります」

アキの静かな、けれど無視できない圧力を感じる一言に、セシルは寝台に横たわったままずっと濃紫の双眸を細くした。

「あなたの体は――」

「少なからず、こうなる可能性があることを分かっている僕はこの引き受けたんだ」

「ですが」

「アキ」

短く、だがはっきりした音で名を呼ぶ。それは隣の少女を起こさぬようにと潜められたものであったのに、アキから続く言葉を奪うに十分だった。

セシルは唇を薄く開いたまま声をなくしたアキに向かって、真っ直ぐ、迷いのない目を向け、言った。

「陛下と、それから彼女に誓ったことを、僕は決して違えない」

Section . 5

夜、イヴを寝かしつけてからセシルは再び書庫に籠もった。

さして狭くもないはずの部屋に林立する書架、吸い込まれるような静けさ。昔から、書庫に満ちるこの独特の空気が少しだけ苦手だった。年月を経た本たちの威圧感とでもいうべきか、かれらは無言ながら清濁併せ呑んで様々なものを内に秘め、じっとそこに留まっている。この書庫でも王立魔法学校の図書館でも本邸や王城の図書室でも、セシルが出入りするような書庫では納められている本たちの半数ほど、あるいはそれ以上が何らかの魔法を封じられたものなので、少しずつ滲み出て漂うそれらの魔力に中てられてしまうものもあるかもしれない。さすがにそれで体調を崩すことなどないが、ざわめく気配にあまり落ち着ける場所ではないのだ。本を読むこと自体は好きなのだけれど。

しかしながら今は娯楽のためのそれを探しているわけではないから、セシルはため息をついて開いていた本を閉じた。昼間も含め、探し始めてからもうしばらく経つのに目当てのものは一向に見つからない。本邸ほどでないとはいえここにもそれなりの魔法書が揃っているのだが、セシルの知りたいことはそのどれにも載っておらず、また片鱗さえ見当たらないのは何故か。

落胆しつつ積み上げていた本を元の場所に戻していると、ドアのほうから物音がした。続いて聞こえる足音は二人分、どちらも子どもものものだ。予想したとおり、本棚の陰からひょっこり顔を出したのはそれぞれ薄紅色と紅葉色をした頭二つ。

「こんばんは、セシル」

律儀なアキはひょこりと頭を下げ、倣って隣のハルも首を折る。

二人はセシルが抱えていた本をすべて棚に納めてしまうのを待って、狭い書架の間を抜け出した。

「こんな時間になにか調べもの？」

書庫の一角にある開けたスペースのソファに並んで座って、ハルはまずそう首を傾げた。ここに入ってからどれほど時間が経ったかは知らないが、ハルがこんな時間というだけ夜は更けているのだろう。成果一つなかったセシルは曖昧に笑う。

「うんまあ……。何も見つからなかったけどね」

「何を調べていたんですか？」

「イヴの……。あの子が一体何者なのかを」

言葉の途中で、セシルは軽いため息を挟んだ。きつと大切なことに違いないのに、真実はなにひとつ掴めないまま時間だけが過ぎてゆく。

残された時間は、少ない。

「なぜ……。いえ、なんでもありません」

アキは『なぜそんなことを知りたいのですか』と言いたかったのだろう、問うことを止めたのは答えが分かりきっているからか。セシルがアキを見遣ると彼は気まずそうに視線を逸らし、ハルのほうがすかに眉を寄せ、何か言いたそうに鈍く沈んだ薄紅の瞳で見返してきた。

彼らならば何か知っているのかもしれないと思う。

ただ、答えをくれる気はなさそうだった。そうするつもりがあればアキはわざわざ回りくどい問いを発そうとなどしないし、ハルもアキを庇うような顔をしない。ハルの瞳は咎めるな、と暗に釘を刺している。

この二人は子どもの形なりをしていながら頭のなかは必ずしもそうでない。セシルは慎重に言葉を選びながら、手がかりを引き出せないかと思案した。

「『命を生み出すこと』と『死者を蘇らせること』、その二つだけはどちらも、魔法には決して為せない。いくらあの人が規格外だと言ったって……」

「セシル」

「答えが知りたければ、父上様に直接尋ねてみてください」

「それで教えてくれるかどうかは分からないけど」

「でも、ぼくたちには絶対に言えません」

「『禁じられて』いるから」

ハルとアキはセシルを遮り、代わる代わる言った。顔立ちが似通っていても双子ではないのだが、同じようにして生まれ育ってきた二人は妙に息が合う。かれらの中には、かれらを強烈に結び付けている糸がある。

「父さまはなぜおまえたちに禁じたの？」

「分かりません。あなたに知らせたくないからかもしれませんが、あるいは、あの人のことだから自分で言いたいのかも」

「父上は、セシルのことをそれは大事に思ってるもんね」

分かるような、分からないような。ハルに言われたことには嫌な予感しかしなかった。答えは知りたい。だが、これでは問いかけるのさえ怖いと思ってしまう。

「……分かった。いずれにしろ、おまえたちにこれ以上この話はしない。いい？ それじゃあ本題に入ろう。アキ、昼間頼んだことの結果を知らせに来てくれたんだろう？」

「……はい……」

アキは浮かない顔のままだったが、頷いて手の中に一輪の白い花を現した。見覚えのある花だ。セシルが庭に植えたもので、先日イヴと散歩したとき揃って開いているのを見た。

けれどもそれから時間が経ったはずなのに、アキの手にある一輪はつい先ほど咲いたばかりのように瑞々しい。嫌な予感がする。肯定するようにアキが言った。

「これが、門の近くに咲いていました」

「……それがどうかしたの？」

「一輪だけです。周りのものは枯れかけて変色していたのに、これだけ。おかしいと思いませんか」

アキの表情が、いつそう暗いものになる。見当をつけ、セシルも同じ気持ちだった。

「セシルは先ほど言いましたね。魔法にできないこと。『不可能はない』と言われていて魔法にでも、決して出来ないこと。……でも、これを為したのは彼女の力です。枯れかけとはいえ、彼女は蘇えらせてみせた」

「間違いない？」

「はい。『視え』ました。彼女はこれに触れ、直後に魔力に変調をきたしています」

枯れかけた――つまり死にかけた花に触れ、力を引きずり出されてしまったのか。外から彼女の姿を見えなくしているはずの結界が綻んでいたのもその影響だったのだろう。

「詳しいことは言えません。ですが、彼女は魔力に対して不完全な存在ですので……少し力を使う、それだけで力に負けてもおかしくないのです」

一息に言い切ってアキはほうとため息をついた。疲れたようなアキに代わってハルが言う。

「だけど、これは父上にも予想外だったはずだよ。て、いうかそう言ってた。あと、セシルのことが心配だって」

「僕は大丈夫だよ。少しだけきつかったけど、今はもう平気だし」「ダメージは残ってる。そうでしょ？ ごまかしてもきかないからね」

「……多少は、ね。だけど今は僕よりあの子だよ。あの子は大丈夫なの。それに花を蘇らせるって……それはもとの彼女の力でできること？」

「答えられません」

それは知らないという意味なのか、言えないという意味なのか。アキの表情からはどちらとも判じることができなかった。舌打ちしたいような内心を、セシルは黙って抑え込む。ここで二人に当たっても詮無きことだ。

「……そう、分かった。それで僕はどうすれば良い？ これまで通りあの子を見ているだけで良いの？」

「はい。セシルのそばにすることが、彼女の力を安定させる一番良い方法です。ぼくとしては、あなたのほうが心配……」

「それは言わない、アキ」

アキの口を人差し指で塞ぎ、セシルは柔らかに微笑んだ。

「昼間も言ったよ。ねえ」

ついと、いとおしげに眼差しを緩めるセシルの瞳は、ここにはいない少女の影を追っている。自覚のあるだけにハルとアキの呆れたような視線が痛い。だが、これだけは手放せないのだ。

幼いころから心に決めていたこと。一度は守りきれなかったけれど二度はないと、セシルはだれよりも自分自身に固く誓っていた。

Section・6

「……セシル？ どうしたの？」

いつもと違う革靴の感触を気にしながら、イヴがセシルを見下ろしてひとつ瞬く。ついでにきょとんと首をかしげ、はずみに結わな
いまま残した髪が数房、さらりと揺れて肩からこぼれた。やわらかな
白銀色の髪しろがね。今は珍しく結い上げられて、白いレースで飾られて
いる。結ったのはもちろんセシル。

「なんのこと？」

セシルは彼女の足下に膝をついて靴の留め金を詰め、同じ姿勢のまま顔を上げてほほ笑んだ。

「あの、服とか……頭、も」

こんなふうにしたことない、と困惑ぎみのイヴはそろそろと頭
手をやったり、かと思えばスカートの裾を引つ張つてみたり、落
着かないようにそわそわしている。慣れない格好が恥ずかしいのか、
居心地が悪いのか。そんな彼女に、セシルはにこりと笑みを深める。
「かわいいよ、イヴ」

お世辞でなく、本心から言った。いつも裾の長い、細部は違えど
似たようなドレスばかり着ている彼女が、こんな格好をする機会は
滅多にない。どころか、今まで一度もなかったのだ。似合うだろう
とは思っていたが、実際に着せてみるとやはりいつもと異なる雰
囲気がまた可愛い。

一度くらい良いんじゃない、と気まぐれに仕立てて寄越した友人
の見立てはさすがである。

今のイヴが着ているのは膝丈のワンピースだった。色は秋の空の
ようなベビーブルー。レースに縁取られたフレアの裾からはほんの
り色づいた両膝が見え隠れし、やわらかな生地のスカーツが動いた
びにふんわりと揺らぐ。胸と袖口にあしらわれた花形の飾りボタン
が過ぎない程度に愛らしく、結った髪や足下とあわせて良家のお嬢

さんといったふうだ。

ひいき目抜きに、誰が見たって文句なく可愛いと思う。

連れ歩いたらさぞ視線を集めることだろう。思いながら、けれどセシルは最後に頭をすっぽり覆うフード付きの、ワンピースの裾より丈の長い上着を着せかけた。白い色に、フードの縁にはふわふわした毛がついているので、被せるとなんとなく雪ん子のように見える。魔物ではなく、妖精の。

しかしイヴを雪の妖精と言うならあながち間違いではないかもしれない。

「なあに、これ」

ほとんど上着に埋もれながら、フードの奥から不思議そうな声が出る。セシルは思わず頬をゆるめ、雪ん子の頭にほんと軽く手を置いた。

「外は寒いから。それだとあつたかいでしょう」

真実半分、嘘半分。厚手の上着は防寒にも優れているが、顔かたちはもちろん体格までおおよそ隠してしまう。イヴの姿は人の目にさらしたくないし、さらせない。

「そと？」

「そう、今日イヴは僕と一緒に出かけ」

「ふへ？」

セシルの手を乗せたまま、ふわふわのフードが横に傾く。セシルが軽く身を屈めてその奥をのぞき込んでみると、薄暗がりの中で、青い瞳がわずかな光を集めながらはたりはたりと瞬いていた。

「どうして？」

イヴはとても不思議そうに目を丸くしている。

「どうしてって……」

セシルは一瞬返答に詰まった。たしかに、イヴをこの屋敷から外に出したことはこれまでに一度もなく、またそうしようとしたこともなかった。もちろん意図あつてのことなのだが、そのせいで彼女の『世界』はほとんどこの小さな屋敷の中だけで完結してしまつて

いる。イヴははじめから、外に出るなどとは、むしろ外にも世界が——窓から見える風景などではなく、彼女が実際に触れることのできる世界が——続いているなどとは、考えたことなどなかったのかもしれない。

「嫌？」

「や、じゃ、ない……と、思う……」

自分のことなのに自信なさげにしている、イヴが困惑するのも無理はないのだろう。そう、考えて、セシルは胸のうちをそっと隠してほほ笑んだ。

「大丈夫だよ。外も、そんなに怖いところではないから。それに、僕が一緒だ」

フードの上から、結った髪を崩さないように頭を撫でる。

「だからひとつだけ約束してね、イヴ。外では、決して僕の手を離さないで。ね？」

頭を撫でたのとは反対の手で、セシルはイヴの小さな手のひらをそっと包んだ。きゅ、と軽く握り返される感触がして、イヴがごくんと顎を引く。

「いいこ」

部屋を出て門まで歩く速さはいつもより遅く、セシルは焦れることなく歩調を合わせた。いつもなら手を繋ぎ、花々を愛でながらふたりで散歩する前庭を、ほとんど腕にしがみつかれるようにしながらゆっくり歩く。そのあいだ、セシルの胸中は自分で思っていたより穏やかだった。

イヴを外に出す。それは本当のところ、セシルにとっても複雑な思いの絡まる決意だったのだけれど。

門を結んでいる鍵に手をかけ、解くと、イヴが小さく息を呑んだ。

「……セシル」

一歩先に出て振り返る。イヴは繋いだままの手のひらを見、次いで揺らぐ瞳でセシルを見上げた。

「おいで。だいじょうぶ」

押し開いた門の前で立ちすくんでいるイヴの手を、セシルはやわらかく力を込めて引き寄せた。固まっていた彼女は耐えきれずまろぶように足をもつれさせ、頭からセシルの胸に飛び込んでくる。衝撃はわずか。そのままぎゅうぎゅうと子どものように引っ付いてきたイヴの、小さく震えて自立していない軽い身体を支えてやりながら、セシルは、こわくないよとやさしい声音で繰り返した。

「ね？ なにもない」

「い、い、いま、なにかふわって……」

「このお屋敷を守っている結界を越えたんだ。大丈夫、なにも変なことではないよ」

「セシルもなった？」

「うん。僕は慣れているから、なんとも思わなかっただけ」

しばらくそうして待ってれば、セシルを抱きしめる力が少しだけ弱くなる。おや、と思つて黙つて見ていたら、そのうちイヴはそろそろ確かめるように周囲を見回し、ゆっくり、ゆっくりとセシルから体を離れた。片手だけは繋いだままで。

赤ん坊のように頼りなく、それでも自分の力で立った彼女は、地面の感触を試すかのごとく数度つま先でついてみたり、小さな物音にも敏感に応じて顔を向けたりする。吹いてきた風にはっとして視線を上げるのを、セシルはすぐそばから見守っていた。

「……どう？」

「うん……あの、なんか、なんか、ね？」

イヴはまだすこし不安そうにあたりをくると見回したあと、問いかけたセシルをじっと見上げ、くちびるを薄くひらいて迷うように息を吸う。胸元に手を当て、あてはまる言葉を探している。

何度か首をかしげてみたり、瞬いてみたり。セシルが穏やかな眼差しで彼女を見下ろしていると、やがておずおず、まだ決めかねるようながら口を開いた。

「その、すてき、ね」

言葉にしたとたん、イヴの顔がほんのりほころぶ。青い瞳が和や

かな日差しに明るく透ける。その笑顔を見て、セシルは良かった、と思った。

彼女にとって、外の世界が悪いものでなくてよかった。ほっと息をつき、おいでと繋いだ手を導く。

「どこへゆくのか、セシル」

「うん、今日は街へ。いつもより賑やかな時期だから、きっと楽しいよ」

田舎ながらそこそこ栄えている町の中心へ。ちょうどこの王国の祝日と重なっていて、街は賑わっているはずだった。

「どこ？」

おなじ町とはいえ、外れにあるこの屋敷から街の中心までは距離がある。歩いて行くのは少しばかり厳しい遠さだ。イヴを伴っているのはなおさらのこと。

「ここからではまだ見えないよ」

セシルはつまさきで立って道の向こうを見渡そうとするイヴに苦笑して、くつついていて、と言い置くと一旦繋いだ手を放した。イヴは自由になった手を持て余し、結局ふんわりセシルの腰にまとわりついてじつと様子をうかがっている。彼女の頭はセシルの肩ほどまでしかなく、セシルはその背を抱くように腕を回して、懷から小箱を取り出した。

飴色をした木製の、細かな彫刻が施された美しい箱。だがその価値は工芸品としての美しさ、ではない。

小さいはずの箱の中へ明らかに容積を貫いて指を突っ込んだセシルは、豆粒ほどの大きさをしたなにかを探り出し宙に放る。だがもとの大きさが目に見えたのは一瞬だった。それはセシルの指を離れた途端急激に膨らんだかと思えば、瞬く間に人が数人は乗れそうな車輪付きの箱——牽く馬のいない馬車のかたちをあらわして、音もなく道の真ん中へと着地した。イヴが驚いて肩をすくめる。

「ひゃあ」

「あ、ごめんね。怖かった？」

「ん、ちょっと、びつくりした……。なあに、それ」

イヴはセシルの持つ箱と馬車とを興味深げに交互に見遣り、特に箱のほうを覗き込もうと背伸びした。寄りかかってくるささやかな重みはあたたかく、しつとりとやわらかい。まとわりつく子猫のようで、思わず頬が緩んだ。

「ねーえ、なあに？」

「うーん、便利な箱、かなあ。いろんなものが入っているんだ」

「そんなにちいさいのに」

「魔法の箱だからね」

魔法かあ、とイヴがつぶやく。口調からは、彼女がどのように解したのかは分からなかった。

イヴにとって、それはどういう存在なのだろう。セシルが生まれるときからあたりまえに感じていたそれらの気配を、彼女も感じることもあるのだろうか。この世界を満たすかれら。

「セシル？」

「えっ、ああ、ごめん。行こうか」

つらつらと思考を飛ばしていたセシルはイヴに呼ばれて我に返り、何気ないふうを装って馬のない馬車——つまりただの車——へ彼女の手を引いて乗り込んだ。馬代わりになる使い魔でも持つていれば繋いで牽かせることもできるものだが、あいにくセシルは使い魔自体を持つていない。走らせるのはいつも自身の魔法だ。とはいっても動かすのは指先ひとつで、箱の壁にあらかじめ刻まれている魔法陣に指を滑らせ、魔力を通すだけのこと。

セシルがなにかをしたことにさえ気づかなかったのだろう、突然動き出した車に、イヴは小さく悲鳴を上げて隣に座るセシルの肩に縋りついた。

「大丈夫」

そつと細い身体を支えてほほ笑むと、イヴもそろそろと力を抜く。不安そうに揺らいでいた瞳は、だがそのセシルの肩越しに窓の景色を目にした瞬間きらりと輝き、彼女は半ば彼の身体に乗り上げるよ

うにしながら窓にぺたりと両手をついた。

「わあ……！」

「おもしろい？」

「うん、あっあれ、このあいだ竜がいた山！」

「イヴ、それちがう。竜が居たのはあっち」

「じゃああれは？」

「あれはね……」

——この子にとって、きっと本当のところ、この世界は優しくな
んでない。けれど、酷なものばかりではない、そうあってほしいと
セシルは願う。

Section・7

祝日の街は賑わっていた。だがそんな熱気に対して吹いてくる風は冬のかおりを含んで冷たく、あつという間に肌が冷える。セシルはイヴが冷えてしまわなかが心配で、寒くないか問いかけようとしながら、けれども口を開く前に軽く息をついてやめた。イヴは繋いだ手を絶対にはなさないとはかり握りしめ、おまけに反対の手まですシルの腕に絡めてひしとくっついていて。あたたかそうだが、ついでにセシルもぬくいのだが、寒くてそうしているのではない。

街に着いて早々、彼女は雑踏の空気に吞まれて縮こまってしまっていた。馬車のなかではしゃいだものの恐れる気もちも強かったのだろう、車を降りた瞬間からセシルにひつついて梃子でも離れない。辛うじて自力で歩いてくれるからそうはならないが、ともすれば引きずってしまいそうになる。

「ほらいヴ、そんなに怖がらなくても大丈夫だから。顔を上げて、周りを見てみようよ」

セシルは淡く笑って、彼の二の腕に顔を埋めているイヴに言った。彼女は首を横に振って聞かない。

「イヴ」

ふるふる。この反応では祝祭日の街ではなく、さながらホラーハウスのようだ。しょうがないなあと思う反面微笑ましくもあり、セシルはひとまず人通りを避けて脇に寄った。懷から鎖のついた丸い時計を出して確かめると、底辺のしなつた黒い三角形が向くのは文字盤天辺のすこし前。午後三時直前、ちょうどよい頃合いだ。

「イヴ」

名を呼んで気を引く。なあに、と尋ねるように見上げてくるこんもりしたフードの、その奥の瞳がこちらをじつとつかっている。セシルは黙ったまま、どこかいたずらめいた笑みを向けた。

「……セシル？ どうした……あつ」

笑うばかりで名前を呼んだままにも言わないセシルに、どうしたの、と問いかけようとしたらしいイヴは、ふいに言葉を途切れさせてはっと顔を上げた。街に、冷たい空気を震わせて気高く明朗な音が響き渡る。時を告げる鐘の音だ。

「なあに……？」

フードの上から耳に手を添えてイヴが尋ねる。セシルは「あれだよ」とみじかく答え、つと視線を空へ流した。先には、天高く蒼穹へとそびえ立つ白亜の鐘楼。遠く音を響かせる銀の鐘がその頂点で陽光を弾き、誇らしげに輝いている。

「かね……？」

「そう。あの鐘楼、って言うのだけれどね、そのてっぺんの銀色した鐘。見える？ この町のシンボルで、誇りなんだ」

「ほこり」

「うん。『この鐘の音がしるべとなり、希望となり、光となつて、ファイエルとみなみな安らかでありますよう』」

「なあに？」

「鐘に刻まれているまじないの言葉だよ。この国や人々がどんな暗闇に迷つても、あの鐘の音がまもり導くようにと、そういう意味なんだって」

イヴは淡く笑みを浮かべながら言うセシルをじっと見つめて、それから再び鐘楼の先、銀の鐘に視線を移した。上向く横顔は真剣だ。彼女はその青い瞳になにを映し、なにを見て、なにを思っているのだろう。この鐘の音に何を感じるだろう。

セシル自身は、ここで聴くこの音にはいつも懐かしさを覚えていた。生まれたところからずっと、同じで、けれど違う鐘の音——この鐘の双子鐘の鳴らす音を聞いて育ってきた。

「きれいな音ね」

それに、とても強い。セシルはイヴのもらしたつぶやきに心のうちで付け足した。あの鐘ならばきっと、この世界が闇に覆われたとしても切り裂いて光を示してくれるだろう。あれは、そう願ったひ

との祈りだから。

かの人の祈りを刻まれて、銀の鐘は日に数度、この街で時を告げる。鳴る鐘の音は破魔の響きだ。

「気に入った？」

「うん」

「それはよかった」

セシルを見上げて笑うイヴの表情からは、もう過剰な怯えをたたえていた翳りは消えていた。きらきらした瞳で楽しそうに、鐘の音を聞いている。

鐘がやむまで待つてから彼女の手を引いてふたたび通りを歩きはじめると、今度はすっかり自分の足で歩き、繋いだ手をご機嫌に揺らしながらイヴは「どこへゆくのか」と尋ねてきた。

「雑貨屋さんだよ」

セシルが答えれば、ざつかやさん、と口の中で繰り返し、「ざつかやさんてなあに？」、そう、また首をかしげる。

「いろんなものが置いてあるお店のこと」

「いろんなもの？」

セシルは言葉に詰まった。いろんなもの。雑貨屋で売られているそれらを分かりやすく簡潔にひとまとめにして説明するのに、これ以上言葉があるだろうか。だがイヴはじつと答えを待っている。真っ直ぐな眼差しが、正直痛い。

「えーっと……」

セシルが答えてくれることを微塵も疑っていない瞳からセシルは少し視線を外し、さまよわせて眉を寄せる。それからまえにもこんなことあったな、とふいに思い、それがいつだったかを思い出した。遠い昔の話だ。セシルも、今の半分よりさらに幼かったころ。同じような青い瞳に期待を込めて見上げられ、答えに詰まって困り果てたこと。

あのときはどうしたのだったっけ。

「いろんなものってね、うーんそうだな……っと、イヴ危ない」

「ふえ」

なにかにつまづいてよろけたイヴの倒れる先へ、咄嗟に身体を入れて支えてやった。彼女はずっとセシルを見上げていたから、足元がおろそかになっていたのだろう。振り返って確かめてみれば、石畳の些細なおうつが爪先を引っかけたらしかった。

「大丈夫？」

「あう、ありがと……」

「どこか痛いところはない？ 足は？」

「ん、へいき」

「それならよいけれど。気をつけて」

「うん」

セシルならば気にも留めなかったような、石畳にはいくらでも付いた段差である。手を繋ぎなおして歩き出しつつ、おぼつかないイヴの足下を見やる。ほんとうはいっそ抱えてしまったほうが安心できるのだけれど、イヴがご機嫌にかつかつと靴を鳴らし石畳の感触を楽しんでいたので、セシルはなにも言わなかった。

「あ」

「うん？」

気をつけて、と言ったとおり地面を慎重に見ながら歩いていたイヴはふいに声を上げて立ち止まった。セシルが歩みを止めて引く張られたぶん戻ると、彼女は身を屈めてなにやら地面に手をやっている。

「なにこれ」

「おや十リルだ」

「り……？」

立ち上がったイヴの手のひらには、小さな銀色の硬貨が乗っていた。

「お金だよ。だれかが落としたんだね」

「たいへん、かえさなきゃ！」

「いいんだよ、イヴ。もらってお置き」

あわてて周囲を見回し落とし主を見つけようとするイヴのせわしない頭に、セシルはくすくす笑って手を置いた。硬貨一枚、この雑踏のなかでは持ち主なんて見つからない。

「こついうのは拾ったひとの運が良かったんだ。だから幸運に感謝しながらなにか小さなことに使って、それでぜんぶおしまいにするんだよ」

「いいの？」

「そういうものだから」

セシルが言えばイヴは、ふうん、と手のひらの硬貨をまじまじ見つめて、それから大事そうに上着のポケットにそれを仕舞った。

大通りも街の中心へゆくに従って、人の数も店も増えてくる。祝日に合わせて出ていた露店のいくつかを覗いてみれば、イヴがいちい喜んだり驚いたり怯えたりするのでおもしろかった。慣れてきたとはいえセシルの影から出ていくことはしないイヴはセシルに連れられるままついてゆくばかりで、けれどそんなかたっただひとつだけ、自ら寄ってゆく店があった。

「セシル、あれなあに」

くい、と繋いだセシルの手を引っ張って、イヴがふと歩みを止める。指差す先は露店のひとつ。尋ねているあいだにも気になって仕方のないらしい彼女がじりじりそちらへと近づいていくので、逆らう理由もなかったセシルはイヴの手を引いて大通りを横切った。

「結晶石だね」

イヴが気にした露店のさして大きくもない台の上には、色も大き

さもとりどりの透き通る石がいくつも並べられていた。

「けっしょうせき？」

「魔力を、あんなふうに固めたものだよ」

結晶石の色は魔力の色。それはひとりひとり異なるものだから、並べられた結晶石にもどれひとつとしてまったく同じ色がない。ちなみに魔力の色味はたいいていその瞳の色と同じであって、つまりセシルの魔力は濃紫色にあらわれる。

と、そこまでは説明することなく、セシルはただ、結晶石に興味津々なイヴが不用意に動いたりしないよう、じっと動向を見守っていた。

「きらきらして、きれいなね」

「そうだね。けれど触れてはだめだよ」

「そうなの？」

どうして？ と問うイヴの手をそつと揺らしながら、セシルはどうしても、とだけ答えた。理由を説いても、イヴには理解できない。「当てられやすい子なのかい？」

やはり腑に落ちない顔でセシルを見上げるイヴに代わって、声をかけてきたのは台の向こうに居た露店のあるじだった。結晶石なんて珍しいものを、しかもこんな露店で扱っている店主の男は年のころならセシルの倍ほどだろうか、洗いざらしのシャツや土くさい口調に反して、仕草や表情、視線の遣りかたにはどこか洗練されたものを感じる。セシルは気づかれない程度に目を細め、すぐに人当たりのよい笑みを浮かべた。

「ええ、まあ。体が弱いので、念のためですが」

「なるほどね」

魔力に『当てられやすい』——つまり外部からの魔力の干渉を受けやすいのは、とくに子どもにはまま見られる性質だ。セシル自身幼いころそうであつたし、力がある程度使いこなせるようになるまではちょっとした影響で不安定になるのもめずらしいことではなかった。

「おまけにえらく恥ずかしがりな子みたいだな」

「人見知りが激しくて」

店主に言われ、セシルは苦笑含みに声をかけられた途端背中に隠れてしまったイヴのフードをぼんぼんと撫でた。イヴはセシルの背中をぎゅうと掴みながら、それでも気にはなるのか目から上と思しき部分をそろりと脇から出している。

「お嬢ちゃん？」

「！」

にこやかに声をかけられても、イヴはぴゅつと頭を引つ込めてしまった。ただし、しばらく待ってればまたそろそろと出てくる。まるで雨上りの庭先へたまに出てくるとこその生き物のようだ。ぬめぬめと光るそのことを、イヴはあまりお好きでないが。

「あらー、なんだかすつかり警戒されてるなあ。それでも子どもには好かれるほうなんだけど」

子どもに好かれるというのは果たして事実だろうか。かれらは幼いが大人が思うより聡いものだ。

ちら、とそんなことがセシルの頭をよぎったが、彼はあいまいに笑ってそれ以上考えることを放棄した。下手につついて藪から蛇を出すのは本意でない。

「ま、いいや。それよりお兄さん、なにか用が？」

「ああ……そうだな」

もともとイヴが興味を持ったから寄ってみただけで、セシルに用はなかった——『なかった』、つまり今は、『ある』。

面倒なものを見つけてしまったと内心ため息をつくも、放っておいてさらに面倒事を引き起こされるのは不本意なのでセシルは、迷うふりをしながらひとつ、若草色の石を指差した。

「その、緑のをください」

「へえ」

「……何か」

「いいや。これだね、これを作った男は風属性の魔力だと言ってい

た。包む？」

セシルは頷き、が、同時に顔に出さないままうんざりしていた。

――風属性？ またそんな大嘘を。

でもそれはこの男の非ではあるまい。

半ば諦めの境地で硬貨数枚と引き換えに小さな包みを受け取って、セシルはそれを懐へと放り込んだ。気になるらしいイヴの視線が、包みのゆくえを追ってじっと見上げてくる。

「お嬢ちゃんにはこれをあげよう」

そんなイヴに向かって、ちよつとしたおまけのつもりか店主は手のひらに収まるほどの小さな壘を差し出してきた。ほら、と軽くゆすれば中身が動いてしゃらりとさざ波のような音が鳴る。

「？」

壘のなかみは色とりどりの細かな砂糖菓子だった。可愛らしいそれに心惹かれるのか、ひょこん、とフードに覆われた頭が先ほどよりも伸び上って、壘と店主を注視しているようである。

「欲しいなら、もらっていいよ」

「いいの？」

「どうぞ」

セシルも壘を一瞥したが、別段怪しそうなところはない。店主が隣の台で扱っている雑貨のひとつだろう、受け取っても問題なからうとイヴに声をかければ、彼女はそれでもためらいがちにセシルと壘との間で視線をさまよわせ、迷っているのだった。壘に対する興味と店主に対する人見知りとの間でふらふらしているのだ。

あんまりイヴが警戒するので、セシルがほら、と繋いだ手を軽く引いてやってようやく、おずおずとながら近寄って手を伸ばす。覚束ないその手のひらがうっかり壘を取り落すのではないかと見ていたセシルははらはらしたものの、さいわいなことに、かろうじて、イヴは壘を落とす前に外套のポケットに仕舞った。

「ありがと、おじさん」

イヴの声は消え入りそうだ。だがそれでも届いたらしい、店主は

にこりと人好きのする笑みを浮かべてどういたしまして、と答えた。

「よかったね」

「うん。……あつ。……これ」

「なんだいお嬢ちゃん……、十リル？」

「うん」

買い物の仕方など知らないはずだったが、先のセシルを見て思い立ったのだろうか。イヴは拾った硬貨を壇の代わりにポケットからひっぱり出すと、彼女に合わせて店主が差し出した手のひらのうえにぽとりと落とした。

「おー、えらいなお嬢ちゃん。ありがとな」

「うん」

イヴは満足そうにちよつとだけほほ笑んだ。それからぽつとセシルにしがみつき、そのままセシルの胸のあたりに顔を埋めて動かない。色々限界ということか。セシルはよくがんばりました、との意を込めてフードの上から頭を撫でると、店主に会釈をし、彼女を抱えて歩き出した。イヴにとってそれがいつも屋敷のなかでやっているあまりに自然な体勢だからか慌てふためくこともなくセシルの首に腕を回してバランスを取り、おとなしくしている。抱えて歩くセシルにしてみても彼女の重さはさしたる問題ではないのだ。

まるで大きめの鳥を腕にとまらせているくらいだった。その翼は、いまは羽ばたかないけれど。

Section・8

目的の雑貨屋には、結局いつもの倍の時間をかけてたどり着いた。黒格子のオイルランプとそれに吊るされた木の看板が目印のその店は大通りから一本外れた小道の角にあり、赤い屋根と緑に塗られた壁の木造りの外観がなかかわいらしいなりをしている。ベルを鳴らしながら入口のドアを開けてセシルが抱えていたイヴを下ろすと、彼女はふらつと引き寄せられるみたいに店の中へと足を踏み入れ、見回して感嘆の声をあげた。

「いろんなものがある……」

「そうだね」

その感想にはセシルも苦笑するしかない。まさに百聞は一見に如かず。

ぽうつと棚へ見入っているイヴの手を引いて、セシルは奥のカウンターへと向かう。顔なじみの店主に声をかけてあらかじめ用意していたメモを渡し、品物をそろえてもらうあいだはあちこちを見遣って見て回ったそうにしているイヴの願いをかなえてやることにした。手を繋いだままゆつくりと店内を歩く。

セシルがこの町でよく利用するこの雑貨店には、そんなに広くもないのにそれこそ日用品から嗜好品まで、いつ来てもなにかしらの新入りを含んでさまざまなものが所せましと並べられている。セシルですらときどき首をかしげたくなるような物品も混じっていれば、ましてイヴには正体も分からないものだらけだろう。あれなに、と聞くこともできずいそがしく首を動かして、イヴは次々目に飛び込んでくるものを必死に追いかけている。そのうち目を回しそうだ。気もちは分からないでもないが、そうなる前に、とセシルはちょうど目に留まったもので動き続けるイヴの視線を引くことにした。

「イヴ、ほらこっち。見て、これ綺麗でしょう？」

「うつん、なあに……？ お花？」

「の、髪飾り。こんなふうだね、ほら、髪に挿して使うんだ」

フードの下に手を入れて、目元にかかる髪を白い花が付いたピンで緩く留める。それを、そこにあった売り物の鏡を指して映してやると、少し爪先立って覗きこんだイヴからはうれしそうなほほ笑みがこぼれた。

「かわいい」

鏡から目を離し見上げてくるイヴに笑みを返して、セシルはそつと持ち上がったフードを被せなおしてやる。残念だけれど、どうあつてもこの少女の姿は人前にさらせない。

そのすぐあとに準備ができた奥から呼ばう声がしたので、髪飾りのことも告げて一緒に清算してもらった。代金と引き換えに受け取った一抱えもある紙袋は、そのまま『箱』へ入れてしまう。中身をあらためなくともこの店主に抜かりなどないことを分かっている。「よし、じゃあ行こうか」

「どこへ？」

「イヴの好きそうなところがあるところ」

店を出るとイヴは名残惜しそうに振り返ったが、セシルはわざとかまわずに道を歩き出した。イヴの興味にすべて付き合っていたらさすがに日が暮れてしまう。石畳は夕方にさしかかってほのかな橙にかがやき、月日を経てまるみを帯びた灰色の石並びが鈍くもどこか美しい。

「ほら見てイヴ、空の色が綺麗だ」

「たまごやきのいろー」

「……うん？」

「あっちははちみつのいろ。そのちよつと上ははちみつのかかったパンケーキのいろ」

「もしかしておなか空いてるの？」

次々出てくる色のたとえに、セシルは思わず隣を歩くイヴをじつと見下ろしてしまった。似ていると言われれば確かに似ているかもしれないけれども、イヴのそれはなんだか切実に聞こえるのだ。そ

れでも、てくてく歩いているイヴの歩調は規則正しく、さほどの疲れは見られない。

「どうして？ おなか、そんなにすいてないよ」

「そう？」

「うん。だって……」

ふと、言葉とともにイヴの歩みが止まった。なんの前触れなく、はたりと足を止めてしまったイヴにセシルは軽く引つ張られるかたちになる。

「イヴ、どうし……」

振り返りながらどうしたの、と尋ねようとした途中で、セシルは呼吸とともに続く音を呑みこんだ。

「イヴ？」

動揺を押し隠し、いつもと同じ声音になるようつとめて冷静に呼ぶ。往來のど真ん中でなかったことを幸いに、石畳に膝をついてフードの下から彼女を見上げた。

「せ、しる……」

繋いだ手からも伝わってくる――イヴは、小さく震えていた。

「どうしたの」

「……っ、かな……」

「え？」

「分からない、よう……でもなんかっ、なんか……いや、なの……」
「……………」

青い瞳が泣きそうにゆがむ。セシルは弱った顔でその頬をひと撫でし、イヴを抱き寄せながら立ちあがった。軽くあたりを見回してみても、変わったものは見つからない。でもイヴのこの様子は尋常じゃない。

「なにか居る……？」

イヴがこれほどまで怖がるようなものを感知できない、それどころかわずかの異常も感じないなどと、自分の感覚も鈍ったものだとセシルは舌打ちしたい思いに駆られた。

危険を感じないということは、イヴが特別反応しているだけだろうか。それとも本当に、自分がそれほどまでに鈍くなってしまったのか。

「……どちらにしても」

「セシル？」

「なんでもないよ、大丈夫だ。イヴ」

わきあがる軽い苛立ちと余計な思考をいっしょくたに追い払って、セシルはまだ怯えた顔をしているイヴへいつもの顔でほほ笑んでみせた。自分が不安定になっていたら、この子をますます怯えさせてしまっただけだ。

感知できないことに焦っても仕方がない。

そう割り切ってセシルは手を繋ぐより近く抱き寄せ、とりあえず行こう、とイヴをうながす——促そうとした。けれどそのとき、ふっとセシルの感覚になにか覚えのある気配が引つかかる。

咄嗟には言い当てられない、けれど確かに知っている魔力。

だがセシルがそれを思い出すよりも先に抱いていたイヴの肩がびくりと跳ねて、彼の直感を裏付けるような反応をみせた。

さらに彼女へと注意を向けたセシルが、親しげな声音で呼び止められたのもほぼ同時。

「クロフォード！」

予期しないところで名を呼ばれ、セシルははっと顔をあげて声のしたほうへ目をやった。多くの人が行き交う中、その人混みを抜けこちらへやって来たのはとくにこれといった特徴もない青年だ。セシルはやや目を眇めて見遣る。どこにでも居そうな男であっても、一応知らぬ相手ではない。

「……………ギルバート・カーター？」

記憶力はそう悪くないと自負しているセシルだが、突然現れた彼の名を思い出すまでには少々の時間がかかった。それほどまでに意識外の人物だったのだ。

ギルバート・カーター、本来ならばセシルが関わることなど微塵

もなかったのだろう男。ところがこの地方でイヴの面倒を見ることになってから、ついではかり父にここの魔法学校へ無理やり転入させられたせいでというめぐり合わせがクラスメイトになってしまった。

級長であつたギルバートはなにかとセシルを気にかけていたらしいが、セシルはといえば学校へなどほとんどゆかず屋敷でイヴと過ごしていたのだから顔を合わせたのも数えるほど、咄嗟に思い出せなくても仕方がないだろう。もっと重要人物であれば違ったのだが、そんなだから親しげに破顔されるような付き合いはない——そうセシルが疎ましさを含んだ視線で見返すのに、ギルバートはいつこうに堪えた様子もなく近づいてくる。

イヴのことを最優先したい今、はつきり言つて邪魔だ。

はじめにさつぱり気づかないふりをしていればよかった。

「偶然だな、おまえと町で会うなんて珍しいってか、初めてじゃない？」

「何か用？」

セシルはさりげなさを装つてイヴを自分の影に隠しながら、ことさらに素っ気なく訊いた。関わらないほうが身のためだ、お互いに人当たりのよい彼に罪などないのだとはいえ、その性質もことセシルに関しては相性が最悪だと言わざるをえない。

案の定そういう彼だからセシルの思ひはまったく言っていないほど伝わらなかつたらしい、もしくは伝わっていても気に掛けなかつたのか。悪びれない笑みをうかべるギルバートがあるうことかセシルの背後をひよいと覗き込んだために、庇つたイヴを守ろうとセシルが身構えるのは当然のことだった。変わった雰囲気を感じ取つて、息をひそめて成り行きを見守っていたイヴの身体が一瞬のうちに固くこわばつて縮こまる。

ギルバートも一瞬間を引き攣らせたが、セシルの変容をどう受け取ったのかなおも態度は変わらなかつた。ここに至つては、セシルが普段から外では人を寄せ付けけないのがわざわざいしたのかもしれな

い。会うたびに打ち解けようとしてくるギルバートにとって、そんなセシルの雰囲気など慣れたものだったろう。

「その子、もしかしてこのあいだ庭に居た子？ 妹か弟？」

「それ以上近づくな」

イヴの被るフードの下を覗きこむように身をかがめたギルバートの視線を、セシルは体を入れて遮る。きつい口調での制止に「なんだよ」と戸惑いと憤りを混ぜたような抗議があったが、黙殺してイヴを抱きよせる腕に力を込めた。そうしてみてふと気づく。

彼女が、ひどく震えている。ギルバートに意識が逸れたせいで失念していたが、彼と出くわす少し前からイヴは様子がおかしかった。今はさらに酷くなっているそれをギルバートに対する人見知りというには尋常でない気がして、セシルは得体の知れない焦燥感を覚えた。煽るように、ゆらりとイヴの持つ魔力の気配が不穏に揺らめく。「イヴ」

ごく小さな声で名前を呼ぶと、イヴはセシルの上着を強く握って体を寄せてきた。俯いたフードの下からのぞく肌が色を失くし、呼吸は浅く、唇もぎゅっと噛み締められている。

一体なぜ。

考えるより先に小規模の結界魔法を結びながら、それでも動かしていた思考の片隅で、そのときふっとひとつ、ひらめくものがあった。

——同じだ、あの時と。

セシルが留守にしているあいだに、イヴが魔力を暴走させたとき。あの日、過去を——正確には過去を含め様々なものを——『視る』ことのできるアキに聞いた、本来扱えないはずの力を引きずり出されてしまったために制御できずそうってしまったのだらう、という結論を、疑う理由もなかったせいでそのまま納得してしまっていた。

でももし、そうでなかったら。いや『それだけ』で、なかったら。共通しているのは目の前の存在だ。ギルバート。今、セシルが探

つても特におかしなところは見受けられないけれども、何かイヴの勘に触れるものがあるのかもしれない。

職業柄の癖でも言おうか、本格的に警戒すべきだと判じた瞬間視線を——というか雰囲気——鋭くしたセシルにギルバートははつきりうろたえた。セシルはそれで一瞬より疑いそうになったのだが、すぐに彼が一般人であることを思い出して思考を切り替えようとする。ギルバートはセシルが普段対峙するような海千山千の狐狸どもではない。しかしながら、あるいはそうであってあえて『演技』をしている可能性は考えられる……。

「クロフォード、な、なんか怖えぞお前……」

ギルバートが怯えたように顔をひきつらせて後ずさる。それもまたわざとらしくさえ見えてしまったセシルは、疑いだしたらキリがないとうんざりため息をついてひとまずの考えを追いやった。

考えすぎるのはお前の悪い癖だ——と、主に兄から幾度となく言われた言葉が思い出される。その兄本人といえはいささか樂觀的すぎるところがあるのだが、たしかに今は、考えてばかりでは動けない。

「僕に何か、用事が？」

「い、いや用事ってほどでも……」

「そう。じゃ」

「ええっ!？」

会話をほぼ一方的に終わらせてセシルは、イヴを抱き上げると立ち尽くすギルバートの隣を足早にすり抜けた。背後でギルバートが素っ頓狂な声をあげても振り返ることさえしない。

すれ違う一瞬、やはりギルバートから感じた覚えのある魔力の残滓。それは彼自身のものではなく、彼がここ最近、それもおそらくは数時間のうちに身近に接触した人物のものだろう。気になるからこのまま放つては置かないけれども、ともかくも今はイヴを安全な場所に移して、それからだ。

「イヴ、今の人いやだった？」

「……………ん」

尋ねると、イヴは数回呼吸をくりかえしたあと小さくうなずく。ギルバートから離れることでイヴの状態はだんだんと落ち着いていった。かなりの速度で置き去りにしてきた上意図して雑踏に紛れるような動き方をしたので確かに引き離れたはずだし、追ってきている気配もない。

「どうしていやだったか、分かる？」

「……………うん……………」

「そっか……………」

アキを連れてきておけばよかったと、セシルは今更ながら屋敷に残してきた子どもへ考えを遣った。どういうわけか彼らふたり、このところセシルのもとへ居ついているから丁度良かっただろうに、つい留守を任せてしまった。こうしてイヴを連れてきたことも、屋敷を守ってもらったこともどちらにも意義はあるから、なにが良かったのかすぐに判ずることはできないが。

「もう大丈夫？」

「うん……………」

こくりと首を縦に振っても、イヴはまだ落ち着かないように神経をとがらせている。

こわい思いをさせて、ごめんね、と。セシルは喉元まで出かった言葉をため息とともに飲み込んだ。

楽しいばかりで済まないだろうと予測はしていたけれど、さすがにこんな事態が起こるとは考えていなかった。セシルが迂闊だったとも言えない出来事であるとはいえ、やや軽率だったかと後悔せずにいられない。

イヴにとってははじめての外の世界。それなのに、恐ろしいものという思い出として残ってしまうのだろうか。

フードの陰から、雑貨屋で買った白い花飾りが覗いている。それをつけてあげたときの、彼女の嬉しそうな顔を思い出す。

願わくば恐ろしいばかりでないのだと知っていてほしい。屋敷の

中にずっと居るよりはたしかに危険も多いのだけれど、それでも、この世界は。

「イヴ、おいで」

「……どこへ、ゆくのか？」

「……きつと、いいところだよ。きみにとって」

地面に下ろしたイヴの手を握りなおして、セシルは警戒の色を浮かべるイヴに優しく微笑みかけた。セシルを見つめるイヴの瞳が頼りなげに揺らぐのは、まだ先ほど味わった恐怖を忘れられないからに違いない。

「だいじょうぶ。怖いものはなにもないよ」

「……ほんと？」

「本当だ。僕が、きみを守るから」

今度こそ。そう、言葉にはしないままだった強い決意がイヴにも伝わったのだろうか。彼女は緊張をふつと緩めて、信頼のこもる眼差しで見上げてくる。

青い瞳は今、輝く夕日をうけて神秘的な色に染まっていた。今はセシルばかりを見上げているイヴが少し視線をずらせば、空を美しく燃やして地の向こうへと沈みゆく太陽を見ることができるよう。見てごらん、と促そうとし、続く言葉を決めかねて開きかけた唇をまた閉じる。

イヴへ告げるのに「空が綺麗だよ」と「夕陽が綺麗だよ」、どちらがよいのだろうか、彼女の視線を受け止めながらセシルはふと、自身でさえ思いがけないほど真剣に考えた。

だがすぐに思考を放棄したのはイヴが目を逸らしたからではなく、彼女がそうする一瞬の間で答えが分かったからだ。

すなわち、どちらでも結果は同じ、と。

「きれいな、セシル」

「……うん」

そうだねとささやくように、けれど心から、セシルは思わずいったふうにこぼした彼女にうなずいた。

夜明けの魔術師たち

夜明けの魔術師たち

手のひらに残された小さな欠片をそつと握り締めて、セシルは祈るように瞳を閉じた。

ゆっくりと息を吸って、吐く。まだ冷たい冬の日の空気は、夜と朝とのあわいを漂う、霞のような匂いがした。

最後の言葉を。

迷って、迷って、少しでも不安そうに見上げてきた真つ青に澄んだうつくしい瞳に、結局、ゆっくりと屈みこんだセシルはまっすぐ自分の姿を映しながらほほ笑んだ。

またね、と。

自身のその言葉を、セシルは信じている。

十年かけて集めたピースがようやく揃って、ついに最後のひとつが還っていった。環を繋げなければ完成しない魔法陣はこの世界の真理だ。揃えて、元通りにあてはめたならそれこそが、次へと導く扉である。

すべてを元の場所に還してセシルたちはようやく、十年前のあの日からまた、歩きだす。同じではない、一歩進んだこの場所から、もういちど。

「……またね」

風にはかすかに春の匂いが混じっている。もうまもなくすれば、この王都で春を告げる花たちが綻びはじめるだろう。その頃には王都より北にある公爵領でも、その中でも更に寒冷地帯にあるカルリ

アでも、雪が止んで陽光が覗くはずだ。とはいえこれからしばらくは、かの地に戻ることもないだろうけれど。

懐に突っ込んだ指先に硬質なものを感じて、セシルはそれを取り出した。ころん、と小さな反動をつけて手のひらに転がったのは、真つ青な色をした、小さな石。——イヴの瞳と、同じ色をしている。シリルかアンジェリーナあたりの入れ知恵か、つい先日迎えたセシルの誕生日に、イヴから贈られたものだった。魔法使いならばいくつか持ち歩いているような類の、ごくありふれた結晶石だ。イヴの精製したそれは透き通った深い青、彼女の——シルヴィアの魔力の色。日付が変わるまで無理をして起きていたイヴは零時を告げる鐘が遠くから聞こえてきた瞬間セシルのもとへと駆け寄ってきて、ややためらいがちに握った拳を差し出した。不思議に思いながらあてがったセシルの手のひらに、華奢な指先がそつと置いていったものの。

思わず目を瞞ったセシルに、イヴははにかみながら言った。

『セシルを護つてくれますようにって、願いながら作ったの。——

セシル……誕生日、おめでとう。それから、いつもそばにいてくれてありがとう』

石を渡したセシルの手のひらを小さな両手で包むように握って、

イヴはほほ笑んでいた。

「……またね、イヴ」

彼女の手を放したその場所を、一度だけ振り返って呟く。それからセシルは踵を返し、東の空に朝の光が滲み始めた夜明けの回廊を、迷いの無い足取りで歩いていった。

夜明けの魔術師たち（後書き）

これにて序章完結です。実は序章はだいぶ番外編じみっていて、これからやつと、本編にあたる部分へと続いていくのですが……。

登場人物等はほとんど変わりませんし物語の軸も同じですので、この先にもお付き合いいただければ幸いです。

— 先ず、ここまでありがとうございました。

章機能が付きましたので、本編もこの続きに連載していきます。

Prologue

ふわり、と。

ゆるやかな水底から浮かびあがるような感覚とともに、シルヴィアの意識は外の世界と繋がった。空気の冷たさ、かすかな音、それから自分の呼吸。唐突に、五感がそれらを認識しはじめる。

「……………」

背中にあるのは適度に柔らかい、おそらくは寝台であろう感触。まだ、瞼は重くて持ち上がらない。瞼だけでなく、全身がまるで自分のものでないかのように、思い通りに動かすことができなかった。腕を持ち上げようとしてもかろうじて指先がひく、と酷く緩慢な反応を返すだけ。

ままならない中で感覚のみがおぼつかないながらもあつて、それがまだ半分夢の中にいるシルヴィアを、現に繋いでいるのだった。動かすのを諦めて再び寝台に身を任せたとき、誰かが、シルヴィアが目を覚ましてから——おそらくはそれよりずっと前から、優しい手のひらで頭を撫でてくれていることに気づく。あまりにも馴染みすぎた感触は、シルヴィアにその認識を遅らせたらしい。

「……………」

だれ、と問おうとした唇は薄く開いているばかりで、喉の奥で音になりそこねた吐息だけがかすかにもれた。それでもそのたったひとつの呼吸を相手は拾ったようだ。髪を撫でる手はそのままに、ほんの少し身を乗り出したような、小さな衣擦れの音がする。

「シルヴィア、起きたの？」

未だぼんやりと霞のかかった聴覚は、その人の声を判別してはくれない。でもほんの僅か、名を呼ぶその音でさえも、シルヴィアに安心感をもたらした。

ほっと息を吐き出すと、同時に口元が綻ぶ。

こんなふうに傍に居てくれるのは、歳の離れた妹をこれ以上なく

大事にしてくれている兄か、はたまた帰らないでと、散々駄々をこねて困らせたあの人が――。シルヴィアが幼い頃、彼もまた子供であつたというのに、よくもまあたくさんのがまを聞いてもらったものだ。

彼のことを思った途端、心の奥からあたたかいものが溢れてきてシルヴィアの内をじんわりと満たした。そんな情動のままに心地よい手のひらへと、動きの悪い頭をほんの少しだけすり寄せる。見上げるほどはできないけれど重たい瞼もどうにか持ち上げて、兄か、彼か、ともかくシルヴィアの慕う誰かの面影を捉えようと視線を彷徨わせた。案の定、満足な視界も確保できない視界はかろうじて淡い光を拾うのみだったけれど、でもその向こうに、こちらをのぞき込む人の影を感じる。胸が、とくと鼓動を刻む。

「……あ」

少しずつ感覚を取り戻しつつある声帯を震わせると、先の質問への返事と受け取ったのか、静かな声が降って来た。手のひらが、包むように額からこめかみ、頬へと滑ってあてがわれる。

あたたかい。

「よく眠っていたね。……良い夢は見られた？」

「……………ん」

やわらかく問われたそれに、シルヴィアはゆめ、と心の内で呟いて、それからかすかに残る、浮かび上がってきたその『夢』の名残を辿った。

もう、よくおぼえてはいないけれど、あれはたぶん。

「……とても、しあわせな夢、でした……。あたたかくて、やさしくて……『そんなふうだった』ことしか、思い出せないけれど……」
ままならない唇で、それでもどうしても伝えておきたくて。ゆっくりと、吐息混じりの言葉をつむぐ。

見えてはいなかったけれど、視線の先で、その人の笑う気配がした。

空気に溶けてしまいうくらいに儚いそれ。でも、つられてシルヴィ

アは、ふ、と息をこぼしてほほ笑んだ。

「しあわせ、でした」

「……そっか」

良かった、と、呟かれた声音はどこか懐かしげな響きを含んでいた。シルヴィア自身も、もうほんの一握りしか残らないそれを、まるで幼い頃の思い出のように想う。懐かしくて、少しだけ切なくて――。思い出すことはほとんどない、でも心の奥底にそっと積もっているもの。

確かだった『夢』のかたちがあつという間に失われていく感触を、シルヴィアがどうしようもないと知りながら名残惜しく追っていると、額に、羽のような軽い口づけが触れた。

「……まだ夜明けた。もうすこしお休み」

まるで魔法のように、言葉一つでシルヴィアの意識はまた沈み始める。本当に、なにがしかの呪いまじなが含まれていたのかもしれない。一度だけ、頬を撫でた手のひらが体温の余韻を残して離れていく。
「おやすみ、シルヴィア」

最後に、手放された意思に従って閉じた白銀色の睫毛の先から――筋だけ、透明な涙が静かに流れて落ちていった。

P r o l o g u e (後書き)

ここから本編開始となります。どうぞよろしくお願いします。

Section : 1

小さな衣擦れの音と、もうひとつ、重たげな布の擦れる音。それから。

まぶたの裏に小さな刺激を感じた気がして、ゆるゆると漂っていたシルヴィアの意識はようや焦点を結んだ。眩しく思ったのは気のせいではないらしく、まだ閉じたままの瞳にもその光は透けて届いていた。

「……んん……」

「あ、やつと起きた？」

「……………！」

半覚醒の聴覚ではその認識が一瞬遅れる。でも、そうして聞こえてきた声の主には心当たりがあるなんてものではなくて。シルヴィアがびつくりして反射的に目を見開いたら、突然の光に眩しさを感じる間もなくのぞき込んでいたらしい濃紫の瞳とぶつかった。

「ごきげんよう姫君。そろそろ起きないと、朝が終わってしまいますよ」

「せ、セシル！」

部屋が明るい。朝日が昇ってからずいぶん長い間それを遮っていたらしい、シルヴィアが寝ているベッドに一番近い窓にかかるカーテンが、窓の端で行儀よく括られていた。

なるほど先ほどの音のうち一つはこの重いカーテンを引いたときの音か。――などと得心している場合ではなく、そうしたのは間違いない今目の前に居るセシルで、彼はその口調にふさわしい仕事用の顔で品良く笑っているけれど、シルヴィアのほうはそれどころでない。慌てて跳ね起きてたぶん寝ぐせでぼさぼさの頭なんかに手をやったら、セシルは澄ました笑顔を引っ込め、くすくす声をたてて笑った。

「な、なんでここに……………」

「だつて出勤したらきみ、まだ寝ているんだから。しばらく隣で待っていたけれど、待ちくたびれたから来たんだ。早くしないとお昼ご飯の時間になってしまうよ」

「えっ」

「ちなみに今日の朝食ははちみつ掛けのトーストと朝摘みのいちごだつたんだつて」

「ええっ」

さらりとシルヴィアの好物が揃ったメニューを告げて、だから早く支度をしておいで、とセシルが着替えを差し出して、それでシルヴィアは自分が思い切り簡素な夜着のままであつたことを思い出した。自分付き近衛騎士であり世話係兼教育係であつた彼にそんな姿を見られたことなんて幼い頃から数えたらそれこそ数え切れないくらいあるけれど、あるけれど！

だからといって身体の線を隠してくれるような装飾など一切付いていない、布一枚被つただけの姿を見られて平気だなんてことはまず、ない。

セシルの顔を伺うに、彼はシルヴィアのこんな姿に対して特になにも思っていないらしい。ほら、と手渡された着替えをなけなしの砦代わりに胸に抱き、寝台にべたりと座り込んだまま恨みがましい目でセシルを見ているが、こちらの心境などお見通しかもしれない。セシルは宥めるようにシルヴィアの頭を一撫でしたあと、着替えたら隣の部屋において、と言い残し、寝室の扉を閉めて出ていった。

今まで、セシル以外には身の回りの世話をするような、侍女というものがいなかったシルヴィアだから（このあたり、いつか兄に何故女性を付けなかったのか問いただしてみたい）、普段着用のドレスに着替えるくらい一人でできる。ごく幼い頃はセシルが着替えさせてくれていたような記憶もあるけれど、すぐに彼はシルヴィアへ、自分自身で身の回りのことを一通りできるように教えていった。セシルはシルヴィアに対していつも優しく、そして兄を除けば誰より近しい存在として接してくれる一方で、ある部分において甘やかし

すぎることはない。その教育の賜物で、シルヴィアはいくつか、深窓の姫君にあるまじき習慣を身につけているのだ。さすがに着脱の難しい正装などは一人でこなせると思えないが、今までのところシルヴィアがそれを着るようなことはなかった。そもそも必要が無かったためにその手の衣装は一着も持っていない。

今日の服は繊細なレース使いが美しく映えている、見たことのない新しいものだった。シルヴィアの身体のサイズをきちんと知っているのは一人しかいないから、また彼女がこのびったりな服を仕立てて寄越したのだろう。一応貴族の令嬢をしているくせに、妙に手先が器用でおかしな趣味を持つ友人を思い出して、後でお礼を言うておかなきゃ、と胸元のリボン結びながらシルヴィアは頭の中の「やることリスト」に追加した。そういえば、このリボン結びも恐ろしく下手で、うまくできるようになるまでずいぶん苦労したものだ。何度やっても不格好になったりゆるゆるになったりするシルヴィアに、セシルはかなり根気よく付き合ってくれた。着やすいよう、襟元をリボンで絞って結ぶタイプの服ばかり持っていたから、そこが最重要課題だったのである。もしほどこけたら、なんてこと、あまり考えたくはない。何より幼い頃ならばともかく、今、誰かと一緒にいるときに襟が落ちてもしようものならあらゆる意味で大惨事になるに違いない。

尤も今ではシルヴィアだって、ただ結ぶより確実な方法を心得ているけれど。きれいに作った結び目を、魔力を纏わせた指先で軽くつつく。一瞬迸った光の線が描く紋様もシンプルな、ごく簡単な魔法。それでも、こうしてしまえばちょっとやさつとで結び目がほどこけることはない。

あとは、これもセシルが用意してくれたルームシューズをひっかけて、鏡台の前へ。

実のところシルヴィアはいまだにその長い猫っ毛を自力で制することができないのだけれども、とりあえず最低限の譲歩として櫛だけは通す。以前無理矢理自分どうにかしようとしたのを失敗し余計

酷くなった頭でセシルを泣かせたことがあって、だから例えただの霧吹きだろうと決して手を伸ばしたりしないものの、起き抜けのまのぼさぼさ頭で出ていくことは絶対に不可能だ。

そんなわけで今日も今日とてぴろんと跳ねたままの一房を手を巻き付けて引つ張りながら、やっぱりちよつとだけ悔しげな顔をしつつ、シルヴィアは先ほどセシルが消えた隣室へと向かったのだった。なけなしに、そのへんで見つけた青いリボンを適当に結んで。

けれど扉を押して開いた途端、ふわりと漂った香ばしい薫りに、ちよつとだけ尖らせていた唇は無意識のままほころんだ。それはもはや、いわゆる不可抗力とかいうものだ。

焼きたてトーストのおいしそうな匂いだとか、それに乗っかるように流れてくる蜂蜜の甘い匂いだとか、そんなものにシルヴィアが抗えるはずはない。

「おはよう、お寝坊さん」

そうやってほんの少し寄っていた眉間の皺も強制的に伸ばされたから、扉を開けたその一瞬にしか不機嫌な顔はしていなかった――はずなのに、振り返ったセシルの顔は、すべてを心得たような苦笑いだった。

「シルヴィア、こっちにおいで」

「……………」

そんな笑顔を向けられたら気恥ずかしくて、伸ばされたセシルの手を素直に取ることもなんてできない。

そんなシルヴィアに、セシルはまた少し笑って自ら歩み寄った。彼女が不満そうにくい引き張っている髪の毛を優しく解放してやって、代わりにそつと撫でつける。手のひらが通り過ぎればまたぴよこんと飛び出すそれがシルヴィアにとっては恥ずかしくっていやになるのに、セシルはそれをいつも、もちろん今日も、かわいいなんて言っては目を細めるのだ。

「もう、どうしておとなしくしてくれないの」

「人前に出るわけでもないし、そのままでも良いと思うけれどな」

「い、や！」

人前には出ていないではないか。まさに今！

そうシルヴィアが思っても、セシルは相変わらず、よしよしと寝めるみたいにシルヴィアの頭に触れている。細くて長い白銀色の髪の毛はすぐにぐしゃぐしゃになってしまふのだからやめてほしい――わけない。

子どもっぽいと思われるのが嫌で言えないけれど、シルヴィアはセシルに頭を撫でてもらうのが嫌いではなかった。むしろ、たくさんある好きなことのひとつ。

「あ、ほら引つ張らないの。後で直してあげるから、先に朝食にしよう」

ね？ と髪を撫でながら言われれば、シルヴィアには逆らえない。こくりと頷きながら視線を流した、ふかふかのソファに囲まれたテーブルにはすでに遅い朝食の準備ができていて、おそらくはセシルが持ってきたのである。小さな花束が生けられた可愛らしい花瓶と、ほかほかと湯気を立てるティーカップまでもが完璧に鎮座ましましている。自分は寝ぐせのひとつも直せないままなのに、とシルヴィアは内心、ほんの少しだけけれど気持ちが悪く落ち込んだ。

「シルヴィア」

長い付き合いのうちにシルヴィアの、顔に出ないような些細な心情の変化でもきちんと汲み取ってくれるようになったセシルがそれを看過するなんてことはもちろんなくて、彼はシルヴィアが沈む間もなく甘やかす声音で名前をんだ。暖かい手のひらにそつと手を取られたかと思えばそのまま、丁寧な所作でシルヴィアをソファまでエスコートしてくれて、気づけばやわらかいクッションの上。握られた指先は強すぎず緩やかで、決して力が込められることはない。いつもそう。

彼がシルヴィアにふれるときはいつも、まるで壊れ物を扱うよう。優しいほほ笑みをシルヴィアは好いているけれど、優しすぎるそれにはたまに、どうして、と問いかけたくなる。その理由もたぶん、

分かってはいるのだけれど。

「どうかした？」

「な、なんでもないよ」

突然視線を合わせるように覗き込まれて、慌てて首を振ってごまかした。シルヴィアの大好きな艶めいた紫の、セシルの瞳の色。でも、それを真つ直ぐに向けられると落ち着かなかった。

ひとりで食事を取るのが寂しいシルヴィアのために、自宅で朝食を終えてきたセシルはティーカップを片手にソファの隣に座っている。シルヴィアの好みであつたえられた、シヤンパンみたいな淡い色をしたソファはふかふかでゆったりしているが、もともと二人掛けのものだから、シルヴィアたちの間に大した距離は空いていない。そんな微妙な距離から意識を逸らすように手に取った、セシルの淹れてくれた今朝のお茶は優しい香りのハーブティ。薄い黄金色をしたそれが白磁のカップによく映えていて、シルヴィアは口をつける前に心地よい香りを楽しみながら水面をじっと覗き込んだ。呼吸に合わせて揺れる水面から見つめ返してくるのは、朝だというのに薄紅に染まった頬の、困ったように眉を下げた女の子。なのに、彼女の口元はかすかに笑っているように見える。

「わたし……」

「うん？　どうかした？」

「な、なんでもない」

シルヴィアはお茶をひとくちだけ含んでカップを戻し、伺うように見ているセシルがこれ以上何かを言う前にと、急いでナイフとフォークを手を取った。ほどよいカラメルを散らしているトーストはナイフを入れると柔らかく沈んで、断面からはじわりと蜂蜜が染み出してくる。口に入れば予想に違わず、卵と蜂蜜の絶妙な甘さが広がった。

「おいしい？　……みたいだね」

セシルは、シルヴィアの表情を読みとって答える前にそう言って笑う。口元に寄せたカップで隠れていたから、シルヴィアが表情そ

のものを見たわけではないけれど、彼の唇が弧を描いているのは間違いない。

（わたし、まるで小さな子どもみたい）

細めた瞳は幼子を見る眼差しそのもののようで、きっとセシルがシルヴィアを見る目は今でも、シルヴィアのことを面倒を見始めたずっとなんと昔から変わっていないのだろう。

以前は、そうやって大切にされて、構ってもらえることがうれしくて仕方がなかった。

否、もちろん、今だって。

Section . 2

繊細そうな指先が、おざなりに結ばれていた青のリボンをそつと解く。器用なセシルの指に、滑り落ちた髪が丁寧に梳られ、肩から流れていくさまを、シルヴィアは鏡台前の椅子に座って鏡越しに見ていた。薔薇のかおりのする香油をセシルが髪に馴染ませたから、さらさらと動いたびにほのかな香りが漂う。こぼれおちた数房を拾うために耳の下をするりと通った指先の感触が心地よい一方、少し落ち着かない。

鏡に映っているセシルの姿をそつと窺うと、開いた襟から続く首筋から肩にかけての線が目に入った。少し筋ばった、直線的なライン。比べる対象が限られているからよくは分からないけれど、セシルはたぶん、男性としてはかなり華奢な体格をしているのではないかと思う。数少ない友人であり、セシルの兄でもあるシリルや、シルヴィア自身の兄、彼らだって決してがっしりとした体つきをしているわけではないのに、それと比べたってセシルは、どこか質量が少ないように見えた。

「……シルヴィア？　どうかした？」

「あつ、うつん」

鏡を通してちらりと覗いた鎖骨のくぼみ、その陰影がうつくしくて思わず目を奪われていたら、セシルに不審がられてしまった。やましい気もちはないのだけれど、悟られるのも気恥ずかしくて目を逸らした。

軽く首を傾げたセシルが再び手を動かし始めるのを待って、また鏡を見つめる。確かに華奢な、でもしなやかな筋肉を纏ったセシルの身体が動くさまは、思わず見惚れるほどきれいだった。

比べて自分は、と、同じ鏡に映った自分の姿に目をやり、シルヴィアはため息をつきそうになる。

ぽつきりいきそうなほど頼りない首、骨ばった肩、枯れ木のように

な腕。女性らしいやわらかさというのがどこにも見当たらないような、貧相な体だった。辛うじてふくらみをもつ胸だって、友人の一人でシリルの恋人であるアンジェリーナに比べたらひかえめとしか言えなくて、おおよそ女性の魅力とは無縁の、幼い顔立ちをした子どもがひとり、鏡の向こうからじつと見つめ返してくるだけ。あまり見ていると情けなくなつて、シルヴィアは早々に意識を背けた。せめてもう少しだけでも、美しいといえるような姿かたちをしていたらと、そう思わずにはいられない。

シルヴィアは今まで、自分の容姿をそれほど意識したことはなかった。日常の中で接する相手というのがとても限られていたせいもあり、その点について特に考える必要もなかったのだ。

気になるようになったのは、つい数日前。

兄に、そろそろ外に出てみないかと言われたのがきっかけだった。シルヴィアは生まれつき体が丈夫ではなく、今までほとんど隠されるようにして育てられてきたために、公式に王女として披露されたことがない。そのため国王に跡継ぎが生まれていないいまのところに王位継承権を持つ唯一であるというのに、正式な王族の地位を持つているのかと言われれば、周囲の認識という点で曖昧な部分があった。いまだその存在すら知られていないわけだから、当然と言えば当然のことだ。

公の場に出して、国王である兄がシルヴィアの立場を明確にしておきたいと思うのにも頷ける。

……けれど……。

「シルヴィア、浮かない顔をしているよ。大丈夫？」

セシルに名前を呼ばれてはっと顔を上げると、髪はもう、きれいに整えられたあとだった。シルヴィアがもともと結わえつけていた青のリボンと、白いレースのリボンを使って、一部をゆるく結い上げられている。最後にセシルは仕上げと、耳の上にガラスでできた花飾りを挿してくれた。セシルは月の色と形容してくれるが、ほとんど白に近い、色素の薄いシルヴィアの髪はたったそれだけでも随

分と華やかになる。

「……きれいな飾りね」

「よく似合ってる」

やわらかく発された言葉とともにそつと、肩の上へセシルの手のひらが添えられる。

「顔を上げて、笑って。きみはとても可愛いんだから、俯いていたら勿体無いよ」

鏡越しにほほ笑みかけられれば、深くやさしい色をした彼の瞳に、引き寄せられるみたいに目を奪われた。

セシルは今、こうしてシルヴィアにつきつきりで、護衛から侍従と教育係まで兼任している王女専属の騎士だけれど、本来は王家に次ぐ位を持つ公爵家の三男だ。詳しく聞いたことはないが華やかな場に出る機会だって少なくないだろうし、尋ねたら色々教えてくれるのかもしれない。でもどうしても、自分にそういった煌びやかな場所が似合うとは思えないのだ。

それ以前に、この場所を離れるのが怖い。

兄と少しの友人、それからセシル。王城の片隅に、格式ばったなにもかもを無視して作られた小さな世界。シルヴィアにとっては、それが全てだった。

セシルが教えてくれたから、外の世界のことだって知らないわけではないものの、でも例えば政治制度だとか、社会のしくみだとか、決まりごとだとか、そんなものが何の役に立つだろう。

こんなみすばらしいと思える姿でも人々の前に立つとき、シルヴィアはこの、国土も広くて歴史もある大国の、第一王女という身分を背負うのである。それに耐えられるだろうか。

「今日は、お昼ご飯まで歴史のおさらいをしようか。それから、午後は魔法の訓練。魔力がだいぶ安定してきたってあのひとが言っていたから、前より難しいことだってできるよ」

「ほんとう？」

セシルは魔術師の資格を持った魔法使いである。魔術師、と言う

だけで魔法使いの中でも最も優れた部類に入るのだけれど、その中でも彼が抜きん出た実力を持つ一人だということを、シルヴィアはそこはかとなく知っていた。そんな彼に魔法魔術を教わるシルヴィア自身の実力はよく分らないが、単純に、色んな術を扱えるようになるのは楽しくて好きだった。母親から妖精族の血を引くシルヴィアはその特性から白魔術に分類される、病気や怪我を治す癒し手の魔法や浄化の魔法が得意だ。魔法は理論さえ修めておけばいくらでも応用がきくものだが、セシルのもとで長く訓練してきても、シルヴィアが最高難度の術まで扱えるのはその白魔術だけ。それ以外は、今まで魔法陣を描くことまではできても、発動段階になると魔力が安定してくれなくてだめだった。大抵はそうやって力を暴走させてしまう前に、セシルに止められて試してみることもできなかったけれど。

それをやってみてもいいと言われて、シルヴィアが浮き足立った気分になるのも仕方がないことだろう。

「少しずつだよ、シルヴィア。そもそもその前に、教えた魔法理論を忘れてしまっていたら、そこからやり直しだからね」

「そんなことない、ちゃんと覚えてるもの」

「そう？ でも、今からやる歴史だって、忘れていたら午後も使ってやり直しだよ」

「え……えっ!？」

シルヴィアは焦った。魔法理論の書かれた魔法書は何度も読み返していて諳んじることでもあるほどだけれど、歴史はどうだろうか。まずいかもしれない。

「セシル、あの、わたし、がんばるから、その……」

慌ててセシルを振り返ると、彼は必死に言い募るシルヴィアを見て苦笑していた。その表情をみて、シルヴィアは先の一言が冗談であつたことを知る。少しむっとして唇を尖らせると、セシルはふと真面目な顔をして、それからやさしくほほ笑んだ。

「……セシルのいじわる」

「ごめんね。もし忘れていたとしても、きっと仕方がないよ。十年分はゆつくりと埋めていこう」

十年。受け止めた言葉は、思ったよりも重みをもってシルヴィアの中に落ちてきた。

そつと、結われていない部分の髪に指を絡められ、撫でるように梳き下ろされる。男性にしては細いのであろう指先と、そこに絡む自分の髪を伏せた瞳で見つめながら、シルヴィアはこくりと頷いた。

Section . 3

「どこまでやっていたか覚えている？」

王都の中央魔法学校でも使っているという分厚い歴史の教科書。セシルはそれと一緒に地図や数冊の本を机に並べてシルヴィアを見た。分厚い教科書を手にとって、シルヴィアはぱらぱらとページを繰る。十数ページごとにあらわれる見出しに目を留めながら、記憶をたぐってその内容を忘れていないらしいことに安堵しつつ、気がつけば最後の項まで来てしまった。

「……あれ？」

手をはなすと、中身に引かれてぱたんと堅い裏表紙が閉じる。

「ねえセシル。これ全部、終わってたと思う……」

シルヴィアが顔を上げたら、彼はそうだね、と言って軽く頷いた。シルヴィアに問いかけはしたが、その授業の進度を、セシル自身もちゃんと覚えているのだろう。セシルはシルヴィアの膝の上から教科書を取り上げて、適当なページで目を留めた。

「……通暦20192年、三の大陸のある国が、対岸にあった二の大陸を攻撃した。この事件は？」

「第一次ドルシラ火薬戦争」

「うん。二の大陸も三の大陸も魔法魔術がほとんど発達していないから、代わりに科学技術によって発展しているんだね。……ちなみに、結果は？」

「えーと、初めは威力の強い新兵器に押され気味だったけれど、結局強度の高い結界と遠距離魔法で二の大陸側の連合軍が押し切ったのよね？」

火薬戦争、と名前が付いているのは、その示すとおり火薬を使用した兵器がいくつも開発され投入された戦争だったからだ。魔法大国であるフィエル王国にとっては当時もさほどの脅威にならなかったものの、歴史的には戦争の在りようが大きく変化した節目の事件

として記録されている。

「そうだね。当時の二の大陸に、偶然七の大陸出身の魔術師が居たんだ。彼の名前は？」

「リチャード・ローゼルでしょう？ アンジュのご先祖様ね」

「そう。正確には、ご先祖様の血縁だね。兄君がいたから伯爵位は継がなかった代わりに、他の国や大陸を回って研究した人なんだよ」
彼が二の大陸側の人間として戦争に参加したのは、王国の指示だった。丁度科学技術と魔法技術を合わせて利用する研究のために、リチャードは当時の国王によって派遣されていたのである。このことをきっかけに、フィエル王国と二の大陸にある諸国とは現在でも友好を保っているが、肝心の技術の相互利用に関してはあまりうまくいかなかったらしい。

「……どうして？」

「せっかく方法を発見しても、魔法を扱えるのが七の大陸の人間だけだったからだよ。二の大陸で魔力を持つのは竜族だけだったのだけれど、彼らは鉄や火薬を嫌って協力を拒んだんだ」

魔力は、あまり鉄を好まない。使えないほどではないから試みはあったが、特に竜族にとって、鉄の武器はその身を酷く苛むものだからかわり合いを避けたがるのも道理だろう。シルヴィアたち魔法族にとってもあまり好ましいものでないから、身の回りの調度品や装飾、食器類に至るまで、鉄製のものは用いられていないのだ。

「鉄ではなくて、他のものではだめだったの？ 銀とか、そういうのは？」

「銀は希少すぎるよ。それに、知っての通り魔力の伝導率という点では魔法の『媒介』に最もふさわしいものだけれど、直接魔力を流し込むには向かない。だから、魔法と科学技術両方の素材とするには強度が足りなかったみたいなんだ。他も同じだね。魔力の伝導率と強度、その両方を満たすっていうのが、とても難しいらしい」

「……あれ、でも汽車は？」

「あれは外枠だけもらってきて、動力やからくりは全部魔法で補っ

ているんだ。機関室には魔法陣がめぐらせてあるよ。そのために材質は鉄じゃなくて銅なんだけれど」

魔法と科学は、魔法陣を開発するのと、技術を開発するのとどちらが早いかな、という競合関係にあることも多い。それでも魔法族ではやはり魔法の研究が盛んなわけで、必然、ほとんどのものが魔法で補われることのほうが多かった。医療の分野でも、二の大陸や三の大陸で行われているような治療法ではなく、白魔術を用いる癒し手の術師たちが活躍しているところが圧倒的多数だ。問題は高度な白魔術を扱える人間が限られていることで、同時に常に人員不足でもあった。

「僕ら魔法族は、やっぱり魔法の習得のほうにある分の時間を費やすからね。なかなか、向こうの技術は入ってこない」

「ふうん……」

「さて。ちよつと話が逸れたけれど、じゃあ次に行こうか」

それからセシルはいくつかの条項を抜き出してシルヴィアに確認し、おおよそ大丈夫だと判断すると教科書を閉じた。次いではじめに机の上へと並べた本のうちから一冊を手に取り、軽く目を走らせる。

「セシル、それは？」

「これは、最近の出来事がまとめられているやつ。教科書って、生徒に早々買いなおさせるわけにはいかないからね。直近の二十年分くらいはこういうので補うんだよ」

二十年、と聞いて、シルヴィアは小さく息を詰めた。半分は知っているはずのもの、だけれど、もう半分は――。

「そんな心配そうにしないで、ちゃんと……シルヴィア？」

「うんと……その、あのね……。ほんとうに時間、経っているんだなあって、それを……」

「実感するのは怖い？」

セシルの持つ本にちらりと視線をやって目を伏せる。きゅ、とそるえた膝の上で手を握ると、隣に座るセシルが少し身を寄せ、包み

込むように手のひらを重ねてくれた。

「大丈夫だよ……ね？」

「……………」

空いたほうの手で髪と、そのまま背を撫でてくれる手つきも、声音も、これ以上ないほどに優しい。思わず肩の力を抜いて、セシルがいてくれるなら、と口走りそうになったのをシルヴィアは唇を噛んで慌てて制した。事実だけれど、それは言えない。

「もしどうしても嫌だって言うなら、今日はやらないけれど……」「ううん、だいじょうぶ。教えてセシル。十年の間に、なにがあったのか」

十年間分。シルヴィアの記憶はすっぱりと抜け落ちている。その詳しい理由は、セシルも兄も、尋ねたのに教えてはくれなかった。もう一人、事情を知っていそうな人に心当たりがあるのだけれど、彼にはまだ会えていない。

だからこそ、知りたい、とシルヴィアは思った。

怖くないと言えはうそになる。でも、ひとつひとつ、前に進んで行かなければ。時間は、いつまでも待ってはくれないのだから。

そうしてこれまで通り、与えられた部屋に引きこもってばかりではきつと、なくなる。

事情は分からなくても、空白の時間を埋めていきたい。だから、まずはひとつ。

ゆるりと瞬いて顔を上げたシルヴィアを、セシルは優しく見つめた。細い銀の髪に絡めた指をほどいて、同じ指先で本をめくる。そのうちある一ページでふと思案するように目を留め、ちらりとシルヴィアを見遣った。

「……………」

「ねえシルヴィア、……うーん、やっぱりまずはこれをやっておくべきなのかなあ」

どれ？ とシルヴィアが首を傾げてセシルを見上げると、逡巡するように軽く顎先をつまんだ彼は、さらりと開いたページを撫でて、

シルヴィアに見えるよう手のひらの上に立ててみせた。

左半分が地図になっっているページで、見慣れた地形で右側の文字を読む前に地域が分かる。七の大陸のおよそ三分の二、シルヴィアにいるフィエル王国と、隣接するカリダ帝国辺りの地図だ。国境線の一部が太い赤色で強調されていて、その地名にピンとくるものがあった。

「スピト村付近の国境抗争のおはなし？」

「うん。ただこれをきっかけにその後、二国間で協約が結ばれて、今では友好関係を持っているんだ」

「えっ？ で、でも、そんな……」

教えられたことに、シルヴィアは目を丸くした。

フィエルとカリダ国の仲は壮絶に悪い——悪かったはず。同じ魔法国家だが、それゆえに歴史をたどれば大きな魔法戦争で何度も対立し、国境沿いの小競り合いを含めれば争いごとにはキリがない。いままで何百何千何万と隣国として時を重ねてきたけれど、手を結んだことなどほとんど、否、全くと言っていいほどない。なかったのだ。

それがまさか、協約だなんて。

「国境を侵して攻め込まれたって事件、つい何ヶ月か前の話だったのに……。それからずっと睨み合いが続いているのだって、思ってた」

「十年は、確かに短い。下手をすると戦争がずっと続いているような期間なのにね。でも、向こうの皇帝が七年前に代替わりして、こちらに友好関係を持ちかけたんだ。フィエルとしても悪い話ではなかったから、歴史からすると手放しでは喜べないけれど歓迎した」

「皇帝、代わったの？」

「うん。前の皇帝が崩御して、その息子に。今の皇帝は、まだ若いよ。僕より年下だもの。きみよりは上だけれどね」

セシルよりも、歳の近い新皇帝。聞いて、シルヴィアは複雑な気持ちになった。

協約が結ばれてまだ年数も浅いから、シルヴィアも王女として彼と対面することもあるかもしれない。だけど、あまり会いたくないなと思う。

「セシル、それがいちばん大きなこと？」

「んー、そうだね。十年の間に一番変わったことといえばこれかな。たぶん、これからシルヴィアにも関わることが多そうだから、初めに教えておきたかったのだけれど」

大丈夫？ と顔を覗きこまれて、シルヴィアはあわててこくこく首を振った。それを見て苦笑したセシルが、シルヴィアの頭のとっぺんに置いた手のひらでよしよしと髪を撫でてくれる。

ほらやつぱり、全部お見通し。

「午前中はここまでにしようか。お昼ごはん、もらって……って、あれ」

「……あつ、お兄さま？」

気配に気づいてすぐに、シルヴィアたちのいる部屋の前の廊下が少しだけ騒がしくなった。王城の敷地内にあっても、周りを囲む庭にさえ普段人が入ってくることのほとんどない離宮だけに、多少の物音でも自分たちが立てたものではないそれには敏くなる。

ややあつて、部屋の扉が控えめに叩かれた。セシルがソファを離れて扉を開くと、そこに立っていたのは予想通りの人物、シルヴィアの実兄であり現国王であるアルフレッド。後ろに侍従を二人従えていて、彼らの隣には昼食らしきものの乗ったワゴンが並んでいた。

「陛下……アルフレッド様」

そばまで寄ってきたシルヴィアをちらりと見下ろして、セシルが呼称を言い換える。彼に視線で促されたシルヴィアは、そっとドレスをつまんで愛らしいお辞儀をした。

「ごきげんうるわしゅう、お兄さま。……あの、どうなさいましたの？」

「ごきげんようシルヴィア。少し時間が空いたから、たまには可愛い妹と昼食を摂ろうかと思ったんだ」

兄の顔をして、やわらかく瞳を細めたアルフレッドは妹の髪を撫でる。シルヴィアもまた、セシルに見せていたときよりもさらにもうすこし、甘えたな幼い表情になった。セシルとの付き合いも赤ん坊の頃かららしい（さすがに覚えていない部分も多い）のだが、頼れる幼馴染であると同時にある時期からはちよつと気になるひと、でもある彼よりも、身内であるアルフレッドに対してはそういう気負いが無いのだ。公の場面で相対したこともないから、王女として兄王に接したこともない。

夕食をとにもするのは王家の代々の習慣らしく毎日のことでも、忙しい兄と昼食の席で一緒になるのはいつぶりのことだろうか。

昔、まだ兄も幼かった頃のように、明るいうちから兄と時間が過ぎることがうれしくて、シルヴィアはきらきら、真っ青な瞳を輝かせた。

Section . 4

久しぶりの兄と一緒にの昼食が嬉しいと思った数分後、やっぱりこれはなんだか落ち着かない、とシルヴィアは思っていた。

普段食事に使う背の高いほうのテーブル、普段は長方形をしたそれが今は円形に変えられている。三人で座ったとき、「まるで面談みたい」とアルフレッドが苦笑したために、セシルが魔法でぼんと変えてしまったのだ。アルフレッドについてきた給仕たちは昼食の皿を並べると部屋を辞して、真実、シルヴィアの私室に三人きり、等間隔に丸いテーブルについている。

はじめ、セシルは給仕係をやるうとしていたのだが、アルフレッドが当然のように止めて同じ席につかせた。用意されていた食事も三人分、国王は初めからそのつもりだったらしい。もともと、彼のことという振る舞いにはセシルも慣れているので、今更戸惑うこともなく一礼して椅子に座ったのだけだ。

つまりどうということかという、落ち着かないのはシルヴィアだけなのだ。

目の前にはおいしそうなお昼ご飯、斜め前に兄と教育係の幼なじみ。王家と公爵家という間柄、アルフレッドとセシルがシルヴィアの生まれる前から親しい付き合いのある仲だけに、なおさら悪い。セシルの兄たちや両親も交えて家族ぐるみの晩餐会が行われたことも何度だつてあったものの、こうして保護者二人に挟まれての食事会なんていままでなかった。兄はともかく、セシルは一体どういう立ち位置でいるつもりなのだろう。親戚？ 妹の友人？ それとも王女教育係として？

アルフレッドならば、どの立場の人間でもこうして同席させてしまいそう。

食事は始まっているのに、喉を通るものの味がよく分からないような気がした。もったいない。これ、絶対においしいものなのに。

むう、と手の中のこんがり焼かれたパンを睨みつけていると、ふいに両脇から笑い声が上がった。

「ふえ……？」

「ふふ、シルヴィア、頬にジャムがついているよ」

「お前は本当に、小さい頃と変わらないね」

右側からはセシルの手が伸びてきて唇の端についていたのである。うジャムを拭われ、左側からは懐かしそうな視線にさらされる。笑い声の理由を察して、シルヴィアは頬を真っ赤に染めた。

「あつ、あつ、し、失礼しましたっ」

恥ずかしい、ちよつとは大人にならなければ、と秘かな決意したばかりだというのに、こんな。

「ごめんね、そんな顔しないで。ほらシルヴィア」

セシルの指先から、何かがぽいつとシルヴィアの口に放り込まれる。パンだ、とれたていちごのジャム付きの。シルヴィアの好物。思わず頬は緩むけれど、こんなことはたぶんものすごくお行儀の悪いことなのに、仕掛けた張本人のセシルはもちろん、アルフレッドも特に何もいわず、楽しそうにシルヴィアを見ているだけだった。困らないのだろうか、第一王女がこんなので。

二人が甘やかしてくれるから咎められないだけで、王女としては失格なのではないだろうか。そう思うと、シルヴィアはだんだん申し訳なくなってきた。

しゅんと沈んだシルヴィアに、アルフレッドとセシルはすぐ気がついてどうしたの、と尋ねてくれる。なんでもないと流してしまおうかとも思ったが、結局小さな声で「ごめんなさい」とあやまった。「どうしたんだい、シルヴィア」

アルフレッドは驚いたようにシルヴィアの頬を撫でた。その手に導かれて顔を上げた先、兄は本当に心配そうにシルヴィアを見つめてくる。頬から頭に移動した大好きな兄の大きな手のひらに、セシルの結った髪を崩さないようゆるゆると撫でられて、シルヴィアはまた、居た堪れなさからしおしおと小さくうな垂れた。

「だって、お兄さま……。わたし、これでもこの国の、お姫さまなの……」

口に出すと、いよいよ情けない思いがつのる。初めはちょっと落ち込むくらいだった気分が、今ではすでに目の縁に涙が溜まって、ともすれば泣いてしまいそうだった。だめだ、そういえば泣き虫もなおさなければと思ったばっかりなのに。

「シルヴィア、そんなことで泣きそうにならなくて良し。私はお前がちょっとばかり甘えんぼうなのも知っているし、不器用なのも知っているし、同年代の子と比べたら、多少は幼く見えるかもしれないけれどね」

うるうると涙をこらえていたら、アルフレッドが懷から取り出したハンカチでシルヴィアの目元を拭ってくれた。目元を掠る布は、肌触りは良いが生成りのもので、アルフレッドが持っているにしてはやけに質素だ。そう思っていたら、その隅に、赤とオレンジの落書きみたいな模様らしきものがくつついているのを見つけ、シルヴィアは慌てて声をもらしそうになった口をふさいだ。そうと知っていれば辛うじて鳥のかたちに見えなくもないその模様は、昔シルヴィアが刺繍したフェニックスだ。この国のシンボルと知って、兄への贈り物にと覚えてたての裁縫を頑張った記憶があるのだが、しかし、今見てみると相当にひどい、としか言いようがない出来栄だった。それでも当時の自分が、嬉々として兄に差し出したもの。嬉しいやら恥ずかしいやら気分としては複雑だけれど、でもこうして持っていて、大切にしてくれたいらしい。

「お兄さま、それ、その」

「覚えているかい？　ちっちゃいころ、シルヴィアがくれたハンカチだよ。これは、まだお前の身長が今の半分くらいしかなかったころのものだね」

「よく覚えていらっしやいますね、そんな……」

「他に、毎年くれた分は全部とってあるんだよ、もちろん。並べてみると感慨深いものだね」

思いがけない告白に、シルヴィアは顔を覆いたいと思った、――否、覆った。ぷしゅう、と頭のとっぺんから湯気が出ているに違いない、反対となりでセシルが笑っている気配がする。そういえば、思いだすと、セシルにも似たようなことをしていたような。彼には王家の紋章である不死鳥ではなくて、単純に自分の目に付いた意匠や練習していたデザインなんかをその時々で選んで刺繍していた気がする。そしてそのぶん、下手をすると、もっと酷いのでは。

もちろん、長年やっていただけあって今でこそ、シルヴィアの刺繍の腕もなかなかだし、実は綺麗なレースなんかを編んだりすることもできる。でも、元来不器用だったシルヴィアは暇つぶしに料理に挑戦してキッチンを爆破し、以来出入り禁止を言い渡されたために仕方なく針と糸を持っただけのことなのだ。当然のように怪我は多かったものの、他に大規模な被害が出ないのとシルヴィアが懇願したおかげで取り上げられずに済んでいたもので、それはつまり、当初はどこかしばらくの間、どうしようもなく、どうしようもなかったということだ。

訊くのは恐ろしかったが、訊かないのもまた恐ろしい。シルヴィアは顔を覆った指の間からおそろおそろセシルをのぞき見て、蚊のなくような声をしばらくだした。

「あの……セシル、も、持ってる……？」

笑顔で頷かないでほしい。そして嬉しそうにしないでほしい。今後の精神安定のために。

「小さなシルヴィアが背伸びしながら差し出してくれたのまで覚えているよ」

白いハンカチが血だらけだったのには、少しおどろいたけれど。付け足された言葉に、ますます溶けて消えてしまいたくなる。そうだ、確か、兄に贈る前にセシルに渡したのだ、一番最初にそこそこうまく縫えた一枚を。

今すぐ当時の自分を説得してやめさせてやりたい。当時の『そこそこ』だなんて、現物を見なくても想像がつく。おまけに血だらけ。

せめて洗ってからにすればまだましだったのに、幼さとは罪である――主に、未来の自分自身にとって。

両側からまたしてもほほ笑ましく見守られているのがわかって、シルヴィアは先ほどとは違う意味でくらりときた。このまま頭に血が上り続けたら、もしくは血の気が引き続けたら、そのうち絶対に絶対に絶対に、気を失ってしまう！

むしろそのほうがしあわせなのかもしれない。

「お、お兄さま、セシルも、どうぞ良心がおありでしたら過去は潔く過去ものにしてしまってくださいませ！」

口に出すのも恥ずかしいところを一生懸命に言つたのに、二人の返事は揃って「考えておくよ」だった。それは遠まわしにもなっていない拒否ではないかとシルヴィアは思う。思ったが、もう口には出さなかった。勝てる気がしないのだ。二人を相手にして、そもそも勝負事をした記憶もほとんどないが、どちらか片方にでさえ一度として勝つたことがない。小さい頃からだいぶ歳の離れたお兄さんであつたセシルと、そこからさらに離れたアルフレッド。頭が上がらないのも当然かもしれない。記憶にないころから今日この日に至るまで、おそらくはありとあらゆる弱みを握られている気がする。

ぽんぽん、となだめるように頭に手を置かれて、うつ、と唸りながらシルヴィアは顔を上げた。アルフレッドもセシルも、シルヴィアに向かってほほ笑んでいる。

「お前が頑張りやさんなのは私もセシル君もよく知っているのだから、なにも心配してないんだよ。ねえセシルくん」

「アルフレッド様のおっしゃる通りだよ、シルヴィア。きみは、できないことなら努力できるし、ちゃんとしないといけないところではきちんとできるでしょう？ それに、僕たちの前にいるときくらい、ちよつと抜けているほうが可愛くて好きだな」

「あ、そ、そう……、な、の」

顔が熱い。励まされているのだということが嬉しい以上に、今の

言葉に他意はないって分かっているけれど、——セシルは、小さい頃からよくそうやって、可愛いつて褒めてくれるから慣れていたはずなのに、たぶん真っ赤になっているであろう頬の熱が冷めない。

今口にいったばかりの、フォークの先に刺さっていたものが一体なんだったのかさえ、まったく分からなかった。

「セシル君」

夕食までともししてからシルヴィアの離宮を辞したあと、セシルは王城の廊下でアルフレッドに呼び止められた。ちょっといいかなと連れてこられた先は王の私室で、何の話だろうと少しだけ身構える。執務室でないということはどちらかといえば個人的な話なのだろう。そのぶん、わざわざ部屋に呼ばれるような心当たりもない。

「シルヴィアのことなのだけれど」

「殿下の……」

シルヴィアを殿下、と敬称で呼んだセシルに、アルフレッドは軽く笑った。

「セシル君は、本人のいないところではあの子のこと、名前で呼ばないんだね」

「それは」

「いや構わないよ、どちらでも。済まないね、ふと思ったただけなんだ」

座って、とうながされて、セシルは対面に置かれたソファの片方に腰かける。シルヴィアの白や淡い色でまとめられた部屋とは対照的に、アルフレッドの私室は濃い目の家具で落ち着いた雰囲気を作り出していた。

そう長い話ではないのだけれど、と前置きし、セシルの向かい側に座ったアルフレッドは「シルヴィアをどう思う？」とひどく曖昧

な質問を寄越してきた。

「どう、とは？」

「そのままの意味なんだけどな。君が、あの子をどう見ているのかが知りたい」

「……………」

セシルは、すぐには答えられなかった。質問の意図を測りかねてアルフレッドを見るも、彼はいたっていつもどおりで、特に重要な問いであつたふうには見られない。

けれどもそうすると、どのような類の答えが正解なのか。『見ている』とひとくちに言つても、その意味合いはいかようにも取れる。しばし考えたのち、セシルは慎重に相手をつかがいながら、最も無難だと思われる選択をした。

「優秀な方だと思います。勉学の面もそうですが、作法や立ち居振る舞いも……気を抜くと元来の不器用なところが覗いたりもしますけれど、王女として、十分な教養と気品をそなえていらつしやるでしょう」

昼間のように、たとえば、アルフレッドは苦笑する。そのくつろいだ様子に、とりあえず間違つてはいなかったらしい、とセシルはひそかにほつと息をついた。

「確かに。……兄ばかりだと言われそうだが、かわいい子だね、シルヴィアは」

「そう思いますよ」

妹を思っているのだらうアルフレッドは、笑み崩れて兄の顔をしている。だが、それがふと国王としての表情に変わった。どちらの顔も知っているからこそ分かる変化に、セシルは少し緊張して背筋をのばす。

「なるほど。では、外に出しても問題はないかな」

「外に？ ……失礼しました。陛下、殿下を披露なさるうとお考えなのですか」

セシルとて王家のたった一人の姫君を、さすがにずっと隠してい

るわけにはいかないと思っていた。だから、晴天の霹靂とまではいかないものの、それでももう少し落ち着いてからだろうと思っているものを。

「千歳さまから、魔力のほうはもうそこまで問題ないだろうと言われたんだよ。今のままではあの子も可愛そうだ。隠しておくにもそろそろ限界のようですね、いくつかの噂はすでに流れている」

そうであれば、下手に匿うより存在を公表したほうが、むしろ守りやすいだろう。それに、とアルフレッドは続けた。

「世間では定職につかず放蕩していると噂の君にも、正式に地位を与えてやれるわけだ。私としては、直接王女の存在を探られるよりも、君が探られているほうが情報の漏れる危険性は高いと思う。だからといって、シルヴィアから君を外すわけにはいかない」

どう思う。改めて訊かれて、セシルは大国の王として君臨する人物の視線を真っ向から向けられる。もしかしたら、判断を求められているのかもしれない。

けれどセシルは、つと表情を引き締めると、目を伏せ、アルフレッドに向けて頭を垂れた。

「御意に。……陛下がどうなさるとしても、私はつとめを全うしますゆえ」

Section . 5

Section . 5

「シルヴィア、どうしたの？　ここ難しかった？」

セシルからぼん、と肩に手を置かれて、シルヴィアははっと我に返った。顔を上げると、セシルが心配そうにのぞきこんでくる。ひざの上には魔法書。今はまだ陽もてっぺんまで昇りきらない午前中、炎属性をもつ上級魔法の授業真っ最中だった。

「シルヴィア？」

ふたたび名を呼ばれて、シルヴィアは軽く頭を振る。

「ごめんなさい。ちよつと、考え事をしてしまつて」

「考えごと？」

めずらしいね、とセシルが様子を見るようにじつと見つめてくるものだから、シルヴィアはそんな場合じゃないと赤くなりそうな頬を懸命におさえて開かれた魔法書の内容を凝視しなければならなかった。

魔法書に書かれているのは、魔術式と、その理論と、例としての魔法陣。ただし、教習用なので最外郭の輪は途中で切られて、繋がってはいない。魔法の不用意な発動を防ぐためだ。教科書などに限らず、術師が持ち歩くような直接発動に関わるもの以外のすべての魔法書において、魔法陣には同様の処置が施してある。魔法陣では、魔力が廻らなければ魔法は発動しない。

魔法書のページそのものにも、記されている術の難易度が上がるほど複雑な魔法がかけられていて、簡単に内容を読めないよう厳重な防護策が施されている。とはいえ上級の術師ならばごく自然に術をかわしてしまうので、術師の実力に対して記された内容の等級さえ見合えば普通の本と変わりなく読むことができた。

セシルが選んできた魔法書がシルヴィアの力の及ばないものであ

るはずはもちろんなく、その内容も魔法理論を教科書丸ごと暗んじるほど頭に入れているシルヴィアにとっては別段難しいものではない。シルヴィアが授業中にもかかわらず気にしていたのは、魔法とはまったく別のことだった。

「シルヴィア、なにか悩みでもあるの？」

「うーん……」

シルヴィアが指先をすつと伸ばすと、その先に青の魔法陣が生まれてぼん、と小さな花が咲く。魔法陣の支えを失った花がふわふわと落ちてくるのを手のひらでつかまえて、シルヴィアはその花弁をもてあそんだ。隣でセシルが教科書を閉じる気配がするから、どうやら授業は一時中断らしい。彼は、シルヴィアを見てなにかありそうだと判断したようだった。事実その通りなのだが、シルヴィアは悩む。

シルヴィアの気を揉ませていること、それを打ち明けたところでセシルにどうこうできる問題ではない。でも、相談できるとしたら一番の適任はおそらく彼なのだろうと思う。シルヴィアが何事かを相談する相手はとも限られていて、少ない友人か、兄か、第二の父親代わりといってもいいくらい親しくしている人か、その誰かだ。そのうちでも、兄でなければセシルがいちばん親しくて、そしていちばん、シルヴィアのことを知っている。

「あのね、……」

「うん」

並んで座っていた彼に、少しだけ寄りかかるように体重をあずけると、そつと受け止めてくれる体温が心地いい。ずっと昔から、知っていることだけね。

半ば条件反射でまぶたがとろんと落ちるのには逆らわず任せ、シルヴィアは頬が触れているセシルの服ごしの腕にすり、と肌を寄せた。それは子猫が甘えるような仕草で、セシルはただ苦笑している。

「あのね……」

「うん、なあに？」

「これからさき、どうなっていくのかなあって、思ってた……」

ぽつり、水に落とすように呟くと、セシルはしばらくにも言わなかった。でもだからといって放置されているわけではなく、その視線が注がれているのは分かっていたから、シルヴィアはゆっくりと深い息をしてただじっと、セシルから与えられるぬくもりに甘えていた。

ほんとうにこれからさき、どうなっていくのだろう。

最近、というか十年の記憶が飛んでのち、気がついたときにはもといた真つ白い離宮の部屋ではない、どこか違うところに移されていた。だけれどそれも部屋が少々変わったただけで、どちらにしろ同じこと。小さな部屋の中から出たことのないシルヴィアにとっては、『外の世界』という未来は途方もなく広くて、大きい。そんなところに投げ出されても、シルヴィアは立ちすくむしかない。

シルヴィアの言葉にセシルはどう応えるのだろうかと思ひやり考えていたら、伸びてきた手に、いつものようにやさしく髪をなでられた。シルヴィアが落ち込んだり、悲しんだりしているときにはかならず、シルヴィアの頭を撫でくれる大きな手のひらだ。大丈夫だよ、と言われているようで、シルヴィアはいつも、それだけで安心できてしまう。そう、今も然り。

そうして同時に、それこそがセシルの答えなのだ。

「セシル……」

名前を呼んだら、なんだか甘えた声になった。ちょっと頬を赤くしてうつむくシルヴィアの気分は、でも、さつきよりもずっと明るい。

ありがとう、とぐりぐり額を押し付けながら言ったら、セシルが笑う気配がした。髪にからむ彼の指はそのままずっとシルヴィアの長い髪を梳いていつて、ふと、その半ばごろをすくいあげる。

「もともと長かったけれど、だいぶ長くなっただね、シルヴィアの髪」

「えっ、あ、うん……十年も放っておいたからかなあ。なんだか、知らない間にすごく伸びちゃったみたい」

ただシルヴィアの感覚としては、一気に、だ。もとは腰より長かったくらいだが、今では足元に届く。毛先にかけてゆるやかに波打つ、亡き母に似たという白銀色の髪。決して嫌いではないし、つま先まで流れる様子は壮観だけれど、あまりに長ければ不便なことも多い。

「ねえ、今日、お昼ご飯食べたらずし短くしようか」

すると、セシルが髪をもてあそびながらそう尋ねる。シルヴィアの髪は、小さい頃から彼が整えてくれていた。思えば、セシルはなにかと器用だ。髪を結ったり、お茶を入れたり、シルヴィアの服をそろえたり。

たとえ職務であつたとしても、その仕事内容自体、公爵家の人間にやらせるにしては少々範囲を超えすぎている気がしてならないもの、でも、それはすべて自分のためだとシルヴィアは知っていた。身の回りの世話をする人間がセシルのほかになかったのも確かに理由の一つだけれど、大部分はセシルが手ずからそうしたいと望んでくれたからだ。

今でこそセシルは器用にシルヴィアの髪を結ってしまう。だけれど、一番初めはただ結ぶだけでも四苦八苦していたのをちゃんと覚えている。

「天気もいいし……そのバルコニーに椅子を出して、ひなたぼっこしながらでもいいかもね」

「ひなたぼっこ？」

シルヴィアは瞳をきらりと輝かせた。前の部屋と違い、今の部屋には大きなフランス窓があつて、そこから外のバルコニーに繋がっている。けれど、シルヴィアは今まで一度も外に出たことがなかった。出ようと思えば出られたのかもしれないが、今まで部屋の外には出ないよういつけられて育ってきたため、憧れつつもなんとなく気が向かなかつたのだ。明るい太陽の光がたくさん差し込むことだけで満足していた。

「今日はだいぶん暖かい日だから、きつと気持ちいいよ」

「うわぁ……」

目を細めて外の天気確かめるセシルに満面の笑顔を向け、シルヴィアははやくもそわそわしている。そんなシルヴィアの様子を見ていてセシルは、そういえば、と彼女を出してあげたことがなかったのに今更ながら思い当たった。もう少し早く気がつけばよかったと後悔したけれど、だからといって今すぐ誘ってみることはせず、昼までは今のまま期待させておくことにした。胸をふくらませている時間だって、それなりにいいものだ。

「ねえセシル、お昼ご飯まだかな」

「まーだ。もう少しはお勉強の時間だよ。ほら、本を開いて」

……ぽんぽんまりのようにソファで跳ねているシルヴィアが、外に転がってしまってしまわなければいいのだが。

Section・6

換気以外で一度も開かれたことのなかった窓を全開にして、セシルが椅子を運び出している。その後ろにひよこひよこついていったはずのシルヴィアは、けれど境界のところであらう、結局もじもじしながら足元のバルコニーとの境目とセシルを交互に見やっていた。セシルは日当たりのいい真ん中あたりに椅子を下ろして、それからシルヴィアを振り返った。

「おいでよシルヴィア」

おずおず、頭だけ出してはひっこめるといふ動作を繰り返すシルヴィアに、セシルは苦笑しながら手を差し伸べる。バルコニーはそこに広く、届く距離ではない。それでもシルヴィアは差し出されたセシルの手のひらをじっと見つめて、あうー、とひとしきり唸ってから、やはり一歩を踏み出せずにつまさきで足元をつついたりした。

あれだけ楽しみにしていたのに、いざとなるとやはりこわいのだ。ずっと、外には出るなといわれて育ってきた。太陽の光も、雨粒も、あまり好きではない雪も、風も、直接肌に受けたことは一度もない。ガラス越しではない空を、少し頭を出して見上げたら、これまでに見たどんな空よりもあざやかに青く、透きとおって見えた。浮いている雲がきもちよさそうだ。

「シルヴィア」

ふいに影が落ちて、気がついたらセシルが目の前にいた。陽の光を背にして立つ彼は、いつものとおりやさしくほほ笑んでいる。

「おいで」

今度は、届く距離。手のひらを差し出されて、シルヴィアはまだためらいを残しながらもゆっくりと、彼の手に自分の指先を重ねたきゅ、とそこが包み込まれると、安心感がひろがる。——と、同時に既視感も。セシルには何度もこうして手を取ってもらったから、

当たり前かもしれない。

導かれるままに一步、白いバルコニーに片足を乗せた。部屋の床の絨毯とはちがう、ひやりと少し冷たい、そして硬い石の感触。

「あ……」

セシルの手をしっかりと握りながら、シルヴィアはゆっくり、ゆっくり、陽の当たる場所まで歩いていく。

それはほんの数歩という些細な距離だったけれど、影がかかる軒下を出るまでの時間は、とても長いように感じた。

「ん、まぶし……」

思わず目をつぶった。その次の瞬間、さらされた肌を空気が撫ぜる。吹いてきた風に髪が舞って、ドレスの裾が大きくふくらんだ。

「う、わあ……！！」

目を開けて、視界にはいった景色は絶景だった。頭上に広がる空はどこまでも遠く、果てがない。今まで四角く切り取られたそれしか見たことがなかったから、あまりの大きさにシルヴィアは目をまわしそうになる。セシルが支えてくれなかったら、上を見上げたままふらふらして、どこかで転んだかもしれない。少し視線を下ろすと、そこは王城の庭なのだけれど、たくさんの木々がこんもりと植えられていて、それらが風の吹くたびにさわさわと揺れて鳴る。息をするたびに香りが変わって、そしてなにより、外は部屋の中よりもずっと明るかった。部屋を暗いと思ったことはそうなかったのに、その環境に慣れていたシルヴィアの目には、外は眩しいほどだった。空の青も、木々の緑も、バルコニーの白さも、なにかもがくつきりとしてあざやかだ。シルヴィアの部屋は意外と高いところにあつたらしく、庭の木々向こうに、かすかだが城下の街並みが見える。窓の内側からながめていたのとは、とても比べものにならない。世界は、なんて大きいんだろう。

「大丈夫、シルヴィア？」

「……ん、うん……うん……」

感動のあまり、言葉なんて吹っ飛んでしまっていた。ほとんど無

意識に慣れ親しんだセシルの体温に体を寄せながら、シルヴィアはふわふわと浮き上がりそうな心地になる。くつついてきたシルヴィアの背中に腕を回して、セシルがしっかりとつかまえていてくれるから、たぶん大丈夫なのだけれど。だが今のシルヴィアには、そんなことを気にしている余裕などないのだ。

大きな青い瞳に太陽の光をいっぱいを受けて、きらきらと輝かせている。

「あわ、わ、ねえセシル、あれはなに？」

「え、どれ？ …… あれは、お城の外壁だよ」

「じゃああつちは？」

「あれは厩舎。の、ひとつだね」

「えっと、あの向こうの壁は？」

「シルヴィア、落ちるからあまり身を乗り出さないで」

「ねえ向こうのは？」

「……聞いてないね……。あれが王城そのものだよ。壁じゃなくてお城。ここからじゃ、とても全体は見えないくらいに大きいんだ」
「わー……」

フィエル王国の城、フィエリア城はその美しさから観光名所ともなるほどだ。同時に歴史を経たそれはとても巨大で、高台に建っていることも相俟って城下のどこからでも見上げることができる。

そんな説明を加えつつ、セシルは興味のあまり浮き上がりそうになっているシルヴィアの体を、何度も引きずりおろさねばならなかった。おまけに当の本人は、そんな自分の状態にさえ気づいていないのだから手に負えない。いつもはしまわれている小さな白い羽がいつのまにか現れてシルヴィアの背中ではたばやっているのが主な原因だが、うっかりそれに触るとくすぐったいのかシルヴィアが飛び上がって驚くために迂闊に引く掴むこともできない。

結局、セシルはいつまでも興奮冷めやらぬ様子であちこち見渡し、いるシルヴィアを抱き上げて、半ば強引にバルコニーの真ん中付近に置いた椅子に座らせた。

「あつ、セシル！」

「はいはいごめんね。でも、あんまり興奮していると疲れるから、今日はこのくらいにしようね」

「えー……」

「またあした」

につこり笑って言うセシルはすでに、櫛をとりだしてシルヴィアの髪を梳きはじめている。抗っても無駄だということを知っていて、ついでに確かに彼の言うとおり少しばかり疲れてきたので、シルヴィアは素直におとなしくなった。

息をするとそれだけで、胸がいつぱいになるなんて。

そんな感覚は今まで知らなかった。

椅子に掛けたまま上を見上げると吸い込まれそうに真っ青で、腕を伸ばせば届きそうで届かない。

「ほらシルヴィア、動かないの」

「ごめんなさい」

セシルにたしなめられても、空を見上げることはやめられなかった。鮮やかすぎて眩しいけれど、それがそこにあるだけで嬉しい。くすくす笑っていると、セシルがやさしい顔をしながら頭を撫でてくれた。

「これからはもっと、いろんなものを見に行けるよ」

「いろんなもの？　ねえどこに？」

「どこがいいかな……城下にあるデザートがおいしいお店とか、王都の外れにある森の湖とか、春になると綺麗な花が咲く野原とか」

「ふふ、まるで絵本の中みたい」

連れて行ってくれる？　と尋ねたら、セシルはほほ笑んで頷いた。「きみが望むなら、どこへだって連れて行ってあげたいよ」

「どのくらいの長さがいい？」

椅子の後ろに跪いて髪をそろえているセシルが尋ねてくる。

「んー……どのくらいがいいと思う？」

前と同じくらいとかいつそ思い切り短くとか、色々シルヴィアの頭に浮かぶものはあったものの、結局はセシルの気配を気にしながら訊き返した。

本音を言ってしまうえば、彼が気に入ってくれる髪型がいい。

短くても長くても、結ってくれるのはセシルで、シルヴィアがいちばん気にするのもセシルの反応なのだ。

「そうだね……あまり短くしすぎないほうがいいな。きみの髪、風に舞ったらきつと綺麗だ」

「そ、そう……かな。じゃあ、まえと同じくらいの長さがいいかな」
後ろにいるセシルには、頬に熱が上っているのはばれていないだろう。それでもちよつと恥ずかしくて、シルヴィアはひざの上で指先を遊ばせながらすこしだけうつむいた。毛先のほうをセシルが扱っていたらしく、軽く後ろに引かれる感触がする。

「それじゃあ、前より少し長めにしておこうか。中途半端だったら、また切ればいいのだし」

「うん」

もう一度全体を梳いてから、セシルはシルヴィアの髪に刃をあてた。鋭利な刃物はかるく滑らせるだけで白銀の髪を断ち切り、落とす。切られたほうの髪はやがて、きらきらと光の粒子になつては消えていく——シルヴィアの、というより妖精族の特徴だ。亡き王妃は妖精王の娘で、それは美しい容姿をしていた。その血を引くシルヴィアは混血だが、兄のアルフレッドよりも妖精族の血が濃いらしく、普段は消している背中の翼然り、体の大きさに対して重さの比重が軽いところも、この所属を断ち切られたものを昇華するところも、さらに言えば白魔術がとりわけ得意なところも、他にも多数妖精族の特性を受け継いでいる。

手元から上がる光の粒に時折視界を奪われつつ、セシルはていねいにシルヴィアの髪を整えていった。

「ねえセシル」

「なあに？」

「……………」

束の間の沈黙のあと、自ら声をかけたシルヴィアは、けれどそのあと再び黙り込んでしまった。手のひらにすくった髪が引かれるのを感じてセシルが彼女を見上げると、シルヴィアはどこか遠い目をして、右手に広がる庭園の森、その向こうの城下、あるいは空を見つめているようだった。

本当のことを言うと、セシルには、シルヴィアの抱える『悩みごと』、その内容には大体察しがついているのだ。そうして、それをなかなか言わない理由も。

彼女はもう、昔のように、すべてをセシルに打ち明けてくれることはなくなった。

幼く愛らしいばかりだった姫君は今、美しく花開こうとしている……………。

「……………城下ではいま、花の髪飾りがはやっているんだって」

「……………え？」

「シルヴィアの目の色みたいなの、青い石のものを見つけたよ。……………結び上げたら、きつと似合う」

「……………」

視線は手元に落としたまま、セシルは他愛もない話をした。否、他愛もないような話をした。一瞬、目を丸くして振り返りかけたシルヴィアは、髪を扱われている最中だったのを思い出して前に向き直る。それから、ふつと息を吐いた。

「……………セシル、お兄さまに聞いたのね」

「……………」

沈黙には色々種類があるけれど、これは肯定。気配だけでそれを察して、シルヴィアは静かに目を閉じる。

「ねえ、わたし、ちゃんとやっていけるかしら。この、フィエル王国の王女として、相応しい姿になれるかしら。……まだ、外に出たことだってないのに……、国の人たちや、遠い大陸の人たちが期待するような、……せめて、お兄さまやこの国に恥をかかせないくらいには、なれるのかしら……」

途中から、声音が湿ってしまった。涙を落とすことだけはなんとかこらえて、ひざの上に乗せたこぶしをぎゅっと握りしめる。

情けないとは思われない。七つの大陸の、頂点に君臨する国の一つとして、歴史ある魔法大国の王女として、侮られたくない。

——侮られてはいけないのだ、『フィエル王女』は。
でも、その資質を持ち合わせている自信がない。

「セシル……」

「大丈夫だよ」

いつの間にか、セシルが真正面からシルヴィアをのぞきこんでいた。陽の光が入り込んでいつもより明るく見えるセシルの瞳は、真っ直ぐにシルヴィアを見ている。

「大丈夫だよ、シルヴィア——……」

一呼吸置いて動いた唇のかたちだけで、名を呼ばれたのが分かった。今までに何度も呼ばれてきたはずなのに、どうしてか懐かしささえ感じる名前。

「ほんとう？」

「本当だ。僕を信じて」

セシルの眼差しはどこまでも真摯だった。彼のことを、信じられなかった時は一度もない。

ゆっくり首を縦に振ったら、こらえていた涙が一粒、頬を伝って流れていった。

ずっと近づいたセシルの瞳、それから、濡れた頬に触れた唇。
やわらかくてあたたかなそれは幼いころと何ら変わらないものの、触れられたところには、幼いころにはなかったはずの熱が残っていた。

第1話「もういちど」 完

Section・6（後書き）

第1話はこれにておしまいです。このまま第2話に続きますので、お付き合いくだされば幸いです。

また、2月28日の午前1時ごろweb拍手のほうにコメントを下さった方、ブログ「天国と地獄より。」（<http://sakura.blog74.fc2.com>）のほうでお返事させていただきます。サイトからのものかこちらから分かりませんでしたので、こちらでもお知らせしておきます。

また拍手のみの方、またいつもこの小説を読んでくださっている皆様も含めまして、この場を借りてお礼申し上げます。日ごろの閲覧及び拍手、本当にありがとうございます。

まだまだ拙いところの多い私ですが、これからも頑張っていきます。

Section . 1

その朝、国王であるシルヴィアの兄、アルフレッドが妹を訪ねてきたのは、本当に突然のことだった。

兄が部屋を訪れたその時、シルヴィアはいつものように寝坊したところをセシルに起こされ、ぼんやりしているところに服を手渡され、覚醒してきたところでどうにもならない猫っ毛を引っ張りながら朝食を摂り、セシルに苦笑されつつ髪を結い上げてもらったところで、さあこれから勉強しようかというときに叩かれた部屋の扉にシルヴィアとセシルは思わず顔を見合わせた。

訪問者は魔力の気配で、結界に仕切られた離宮の敷地に入ってくればすぐに分かる。

公務で多忙なアルフレッドが妹の離宮を訪れるときに事前通知がないのは日常茶飯事だが、こんな午前中、執務真つ只中である時間帯に訪問を受けたことはなかった。

それだけでない、見知らぬ気配が三つ、アルフレッドに付いてきていることにシルヴィアは戸惑い、セシルが扉を開けるためにドアノブを掴むのをじっと見つめて、表情に緊張の色を走らせる。

「おはようございます、お兄さま」

「おはようシルヴィア。ちょうど支度が終わったところかい？」

「はい。これからセシルとのお勉強ですが……」

「邪魔してごめんね。すぐに済むから、少しだけ時間をくれるかな」
シルヴィアがこくりと頷くと、アルフレッドは廊下に向かって手招きをした。そうして彼が体をずらして空けたスペースに、見たことのない三人の女性が並ぶ。彼女らがみな同じお仕着せを身に付けているところを見ると、王室に使っている女官たちだろうか。

アルフレッドに促されて部屋に足を踏み入れた彼女らは軽く目を伏せたまま礼をとるのに、初対面の女性たちに対してはもちろん、形式ばった挨拶を受けることにも慣れないシルヴィアが不安そうに

して半歩後ずさるのを見とめつつ、アルフレッドは妹に女官たちを示してみせた。

「シルヴィア。彼女たちに、これからきみの身の回りのことを任せようかと思っているんだ。右からニーナ、クレア、マリィ。注意すべきことなど基本的な部分は言いつけてあるけれど、その他細々した問題の解決はセシル君に頼むよ」

「えっ」

突然聞かされたことに、シルヴィアは驚いて思わず小さな声を上げ、次いでセシルを見上げた。彼はいつもと変わらない冷静な表情で侍女だと紹介された女性たちを見ていたけれど、シルヴィアの視線に気づいて少し困ったような苦笑いを返してくる。それでも特に気負いのないセシルの表情に少しだけだがほっとしたシルヴィアは、人見知りを起こしてすり寄ったセシルの背中に半分身体を隠してしまった。

「シルヴィアの世話に、これまでだってそうだったろうけれどこれからはなおさら、セシル君一人では不便だろうと思ってね。色々面倒を見てもらいなさい」

怖がっているようなシルヴィアの態度に、アルフレッドも苦笑している。

「王女殿下、これから身のお世話をさせていただきますことになりました、ニーナと申します。後ろの二人とともに心よりお仕えする所存にございますので、どうぞよろしくお願い致します」

アルフレッドに促されて挨拶をした、三人の中では一番年上だろうと思われる女性に笑みを向けられたシルヴィアはけれどもそそそとさりげなく、しかし確実にセシルを盾にしまった。びっくりしたのと怖いのとで色んなことが吹っ飛んでしまって、困った顔で彼を見上げているばかりだ。

「ほら、ちゃんとご挨拶して、……姫君」

「……………」

「……シルヴィア」

「……、こちらこそよろしく願います」

突然対面した知らない人には免疫がないシルヴィアは、小さな声でそれだけ言うのが精一杯だった。すぐに緊張で全身を強張らせながらセシルの背中に引っ込んでしまう。セシルもこれが礼儀作法を教えている時間ならば間違いないと叱ってやりなおいということにするのだけれど、さすがに人見知りを通り越してやや怯えているような彼女にそれを強いることはできない。

「申し訳ないね、ニーナさん。姫君はあまり、その……人に慣れていないから」

「承知致しておりますわ、伯爵閣下。ですが、少しずつ慣れていたきたく存じます」

ニーナと紹介された女性はあくまで笑顔で応対してくれる。だがシルヴィアの態度然り、これは面倒なことになりそうだとセシルは顔に出さないまま思った。

「では、私はこれで戻るよ。君たち、後のことはセシル君の指示に従ってくれ」

そう言ってアルフレッドが去ってしまうと、後には生真面目な顔をした侍女たちと、相変わらず、否ましますセシルの後ろに入り込んで隠れているシルヴィアと、そしてセシルが残されて束の間微妙な沈黙が落ちる。侍女たちは言われたとおり指示を待っているのか、それともそもそも壁際に控えておくつもりなのか、シルヴィアとセシルの動向をうかがいつつ微動だにしない。どうしようもなくしてシルヴィアがセシルに視線をやると、目が合った彼は仕方が無いね、とシルヴィアの無言の要求に応えてくれた。

「改めて、知っていると思うけれど、僕はセシル・クロフォード・エルヴィス。王女殿下が幼いころから、陛下の依頼で彼女の傍付きをしています」

「陛下から聞き及んでおります。私たちはもともと陛下にお仕えしておりましたが、お声かけいただいたいて本日付けで王女殿下の侍女となりました。男性ではなにかとご不便もありでしたでしょう、本

日より、私たちも誠心誠意殿下にお仕え致しますので、どうぞよろしくお願い申し上げます」

こちらこそよろしく、と侍女の挨拶にセシルが当たり障りなく返している。いつだってごく親しく接していた彼の外交用の顔を見るのは初めてで、シルヴィアはもの珍しく彼だけを見ていた。

侍女たちのほうは、本音を言えばまだあまり視界にいれたくない。他人の存在を意識しただけで気疲れしてきて、シルヴィアは小さなため息をつく。ごく小さかったはずのそれを、けれどセシルは拾ったようで、ちらりとシルヴィアに目を向けたあと侍女たちに向き直った彼はひとまず退出を命じた。

「来てもらって早々に申し訳ないのだけれど、今からは姫君との授業時間なんだ。あなたたちは隣の部屋に控えておいてもらえるかな」
「私たちは邪魔にならぬようここにおりますので、どうぞはじめてください」

礼儀として浮べられた笑みが薄ら寒く感じるのは気のせいだろうか。言葉こそ丁寧だが動くつもりのないニーナにセシルはつとめて平静な表情を保ったまま、同じ口調で簡潔に告げる。

「今日から高度な魔力制御の訓練をするんだ。だから、同じ室内にある魔力要素は障害になってしまふんだよ」

セシルの言葉は、彼女らを追い出すのに信頼を得るには間逆だが一番手っ取り早い方法だ。そんな侍女たちとセシルとのやり取りを黙って見つめていたところに、不意にニーナから目を向けられてシルヴィアはついひるんでしまった。

「どう致しましょう、殿下」

おろおろと視線をさまよわせると、セシルもまたシルヴィアのことをうかがっている。助けるつもりがないというよりはそれが妥当だから黙っているだけということなのだろう、セシルはシルヴィアがどう答えるかは分かっているようだ。

ただ、シルヴィアがそれを自分の口で言えるかどうか。

それくらいは造作のないことと思ったのに、一度詰まらせてしま

った言葉はなかなか喉の奥から出てこない。

「……？ どうなさいました、殿下？」

「——っ、あ、の……、……に」

「はい？」

「隣の部屋、に……」

どうにかそれだけ絞りだすと、あとはセシルが扉を開けて侍女たちを促してくれた。ぱたりと隣室との境が閉じられる音に、ほっとして思わずへたりこんでしまう。戻ってきたセシルがそれを見つけて一瞬目を丸くし、それからふわりと淡く苦笑った。

「お疲れさま、びつくりした。ね？」

「……うん……。うん、びつくりした……」

ぺったりと絨毯に膝をつけたままのシルヴィアが応えると、セシルはそんなシルヴィアの身体をひよいと抱き上げ、ソファまで運んでくれる。

「お茶淹れようか。どれがいい？」

「ん……。どれでも……」

セシルが選んで、と頼むと、軽く了承の返事をして彼は部屋の一角に設けてある給湯場まで行ってしまった。ケトルに水を汲んで火にかけてたり、茶器を用意したりしているささやかな音だけが聞こえてくる空間で、ソファに沈んだシルヴィアはひとり大きな息をはく。突然のことに、頭も心もついていかなかった。

きちんとしなければという思いと焦り、一方で、ニーナたちに対するどうしようもない恐怖心が同時に頭をいっぱいにして、いたずらに心拍数ばかりが上がっていた。

「おまたせ、シルヴィア」

戻ってきたセシルは自然にシルヴィアの右隣に腰を下ろす。ついでに持ってきたらしい、常には昼食後のお茶の時間にしか出してくれない焼き菓子の入ったバスケットをローテーブルに下ろして、彼はシルヴィアにあたたかいカップを握らせてくれた。

「大丈夫？」

「……………」

だいじょうぶ、と返そうとして、でも返事ができなかったシルヴィアに、セシルが小さく笑う気配がする。それからシルヴィアがじつとカップの水面を見つめてっていると、背中から左の肩に優しく腕を回され、包み込むように抱き寄せられた。持っていたティーカップはソーサーごと宙に浮いて、シルヴィアの視界の端をふわふわしている。

「ねえ、今回のことは僕にとっても突然だったから、さすがに少し驚いたな。あの一番若い子……マリーって名前だったかな。あの子とシルヴィアは歳も近そうだし、仲良くなれるといいね」

「……………」

「お化粧……は、いらないかもしれないけれど、ドレスのこととか髪のかい方とか、色んな相談ができるよ」

「……………」 うん。ねえセシル、お兄さまはどうして急に、あの方たちをわたしに下さったのかな」

侍女が必要というなら、タイミングはもう少し早いほうがよかったはずだ。事実、セシルはこれまでも何度か、女性としてのシルヴィアを持て余して、シルヴィアと共通の友人である伯爵令嬢——アンジェリーナを頼っている。

「それはもちろん、シルヴィアを外に出すためだろうね。そうなるをやっぱり、身の回りの世話をさせるにはアンジュにも限界があるだろうし」

「あつ、そうか……。外につて、王女としてお披露目するってことよね。そのこと自体は前にお話くださったけれど、お兄さまはいつごろを考えていらっしやるのかしら」

「そうだね。今の時期に侍女を下さったことを考えると……アルフレッド様の誕生日のお祝いとか、春祭りか……夏よりは早い時期かもしれないね」

「……………」 それって、けっこうすぐ、だね」

「そうだね」

不安そうにきゅつと眉を寄せたシルヴィアの頬に、セシルはやわらかく笑って口づけた。

「大丈夫、僕が付いてる。王女のお披露目の話は僕も打診されたよ。その時にも、アルフレッド様はきみに僕を付けたままでいてくださるって仰っていたし」

「……うん」

セシルの指先がこめかみのあたりを撫でていくのを感じながら、シルヴィアはそつと目を閉じた。深く息を吐いて、触れたセシルの腕をきゅつと掴む。

「疲れた？ 今日午前中の授業はやめて、少しゆっくりしようか」
どうせすぐにお昼ご飯の時間になるよと、セシルは窓の外に目を向けて言う。彼の言うとおり、太陽はもうだいぶん高いところに昇っていて、窓からではその姿は見えなかった。でも、透明なガラスの向こうは明るい空色が広がっていて、今日もよく晴れたい天気だ。

あの空の下にシルヴィアがはじめて立ったのも、つい先日のこと。

「なんだかね、セシル」

「うん」

「わたしがずっと寝ていた……って千歳さまがおっしゃる十年をわたしは知らないから、いろんなことがものすごくせわしく感じるの」

「それはそうだろうね。僕たちの生きる時間からしてみればたったのって言うてしまえそうな十年だけれど、物事が目に見えて変化するには十分な時間だよ」

「うん……。だから急に外に出るって言われて……わたしまだ、お兄さまが『陛下』って呼ばれるのにも慣れない、のに」

シルヴィアの記憶では、そう呼ばれていたのはずっと父だった。でも突然その父は前王になっていて、玉座には王太子だったはずの兄が座っている。

なにもかもがすぐには受け入れられないまま、次は自分自身に変

化を求められて、戸惑ってられる時間さえ気がつけばもう残っていない。

時間はあまり気が長くないようで、そう悠長に待ってはくれないようだ。

Section・2

衣擦れの音がして、暗かった寝室にさつと光が入ってくる。目覚めかけた瞼の裏に感じた眩しい光に眉を寄せたシルヴィアはその時、まだ薄ぼんやりしていた意識の片隅に嫌な違和感を引っ掛けた。

「姫様、お目覚めの時間でございます」

「……ふえ？」

その日、昼も近づいた朝の遅い時刻、フィエル王女の寝室で響いたのは彼女の悲鳴だったという。

「うわあああああああん！！！！！」

「で、殿下！？」

半泣きで悲鳴を上げいつもの寝起きからは考えられない素早さでベッドから半ば転がり落ちつつ飛び降りたシルヴィアは、一直線に寝室の扉へ向かって乱暴にそこを開け放ち、居室にセシルの姿がないのを知るとそこも突っ切って続きになっている応接間へとまっしぐらに転がり込んだ。

そこで止まったのはひとえに、見知った彼がいたからだ。もしもそこにさえ彼の姿が見えなかったら、シルヴィアの逃亡はさらに続いていただろう。

「わ、シルヴィア」

「セシル！」

ソファに腰かけていたセシルは扉が開く音に驚いて立ち上がり、次いで文字通り飛び込んできたシルヴィアを胸の中に受け止めた。「どうしたのシルヴィア。なにかあった？」

特におかしな気配はしなかったけれど、と不思議そうにしている

セシルに、シルヴィアは泣きながらぎゅうぎゅうとしがみつく。

「し、寝室に知らないひとが！」

「知らない人って、え……」

セシルがちらりと目をあげると、困り顔で居室から応接間を覗いている侍女たちがいた。彼女たちも何が起こったのか分からず困惑している様子で、セシルと彼に抱きついて泣いているシルヴィアをうかがいつつ顔を見合わせている。

……なるほど。

なんとなく事情を察したセシルはひとまず、驚いてパニックに陥ったらしいシルヴィアを宥めることにして、屈んで視線を合わせた。「シルヴィア。大丈夫だよ、忘れちゃったの？ 昨日アルフレッド様に紹介されたでしょう」

「えっ、……。……」

シルヴィアは潤んだ瞳をぱちぱちと瞬かせてセシルを見、彼が黙ったまま答えを促すように待てば、少しの間を置いたあと「あつ」と口元に手を当てた。

「思い出した？」

「……思い出した」

セシルの問いかけにくくりとうなずくと、シルヴィアは彼から離れて振り返る。

「おどろかせてごめんなさい。その、ちょっと、夢見が悪くて」

まさかあなたたちのことを忘れていて、とは言えずに誤魔化したシルヴィアだが、成り行きを見守っていた侍女たちがその言葉にほっと胸を撫で下ろしたらしい気配が伝わってきて、申し訳ないという気持ちについては心からの謝罪をした。まだ、彼女たちに慣れることはできないけれど。

初日からこんな調子でと先行きを思いやってうな垂れるシルヴィアの頭を、セシルが手袋を外した手のひらでそっと撫でってくれる。

「ほら。僕はもうしばらく待っているから、戻って服を着替えておいで。あと髪もね、彼女たちに整えてもらいなさい」

「うん」

「その間に朝ごはんの支度をしておこうか。今日はチーズオムレットとサラダだよ。お茶は何かいい？」

「えっと、ラベンダーのがいいな。このあいだセシルが持ってきたの。……あれ、セシル？」

今部屋にある茶葉の種類について思い巡らせながらシルヴィアが答えていると、彼女を促して応接間から一緒にいついてきたセシルが居室——シルヴィアが普段食事をしたりセシルとの授業を行ったりする部屋の半ばまで来たところでセシルは足を止めてしまう。普段は寝室までついてきて身支度を整えてくれる彼なのに、そう不思議に思ったところでシルヴィアは侍女のことに思い至り、彼女たちが寝室の手前で待ち構えているのに気がついた。

「あ、っ……」

「大丈夫だから行っておいで」

足が竦んでしまったシルヴィアの背に、セシルの手のひらが優しく添えられる。

「う、ん……」

シルヴィアは一度不安そうな顔をしてセシルを振り返り、侍女たちとともに寝室へと戻った。

ぱたりと扉が閉める音に、急な心細さを感じる。朝起きるときから日が暮れるまで、それこそ四六時中ずっと一緒にいたセシルがない。代わりに侍女たちがいるわけだけれども、それがむしろシルヴィアの不安によりいっそうの拍車をかけていた。

「姫様、どうぞこちらに」

「はい……」

座らされたのはいつもの鏡台前の椅子。それでも緊張は募るばかりで、後ろに回り込んだマリーに肩へと手を置かれたときには、シルヴィアはびくりと体を竦ませてしまった。

「し、失礼致しました……」

シルヴィアの拒絶にマリーはひどく恐縮したようにうつむく。シ

ルヴィアは城で仕える女官たちの制度をよく知らないから詳しくは分からないが、年齢を考えると彼女はまだ見習いから上がったばかりの頃かもしれない。やや青ざめながら身を固くするマリーは、シルヴィアと同じくとても緊張しているようだ。

「あ、の……」

「さあ殿下、お召し替え致しましょう」

「あ……」

シルヴィアはどうぞ気にしないでとマリーに声をかけようとしたけれど、その前に服を持ってきたニーナによって遮られてしまった。おまけに手を引いて立たされ着ていた夜着を脱がされそうになって、体を庇うことが精一杯、一瞬で頭の中は真っ白になる。

「きゃあ！ あ、ま、待つてくださいいっ」

「殿下？ どうなさいました？」

夜着の肩をぎゅっと握りしめるシルヴィアにニーナは不審そうに首を傾げる。検分するようにじっと見下ろしてくる目が、どうしようもなく怖い。

「き、着替えは自分でできますから……」

「ああ、伯爵がお世話をなさっていたからですね。でも、今日からは私たちが着付けて差し上げますので」

そう言うニーナが近づいてこようとするから、シルヴィアは足をもつれさせながら寝台の向こう側までまろぶろうに逃げた。いっそのこと結界を張ってしまいたいくらいだったが仮にも自分の侍女を相手にさすがにそこまではできないので、天蓋の柱を盾にするようにしがみつく。

「殿下、何か不都合なことがありませんか？」

「……っ、いいえ……」

そうではない、ただ他人に触れられることに慣れていないので怖いのだと、伝えたいのに言葉が出ない。それでも必死に首を振って近づけさせないシルヴィアに、しばらく粘ったもののついにニーナも諦めた。

「それでは、とりあえず今日は自分でお着替えなさってください」
とりあえず今日は、という言葉がシルヴィアにとってはまた身の
竦むものだったのだけれど、彼女は何も言わずに服を着替えた。こ
れからも着替えは自分でしますときっぱり言い放てるほど、まだ二
ーナに限らず侍女たちを受け入れることができていないのだ。もし
今日、兄がやっぱりやめると一言でも言えばシルヴィアは何のため
らいもなく頷くだろう。

——そういうことはできないと、頭では分かっているけれど。
慣れなければ、とシルヴィアは思った。

幼いころ、記憶はほとんどないのだがシルヴィアにも侍女のいた
ときがある。正確には母の侍女たちで、王妃であった彼女とともに
シルヴィアが過ごしていたときには一緒に世話をされていた。シル
ヴィアの存在は生まれたときから隠されていたというから、侍女た
ちのことを母は——父も、よほど信頼していたのに違いない。

今の自分と二ーナたちの間には、あまり想像ができない絆。セシ
ルとの間にと言われればよく理解できるそれを、彼女たちと築いて
いけるだろうか。

考えるだけでため息が出そうだった。

「姫様、お着替えがお済みでしたらこちらに」

そつと声をかけてきたクレアはやや控えめな印象の女性だ。歳は
二ーナより若く、それでもマリーよりずっと大人びている。シルヴ
ィアの態度を見ていたからか決して刺激しないように、でも親しげ
に手招いてくれるのには、シルヴィアも少しだけ肩の力を抜くこと
ができた。

ちょうど、記憶にある母がこれくらいの歳だったからかもしれない。
い。おっとりとはほほ笑むその姿はどこか、母と重なるところがある。
「髪を結いますね。どのようになさいましょうか」

「どのように……？」

「何かご希望はありますか？ 形とか、雰囲気とか。なければ私
が良いように致しますが——分かりました。では失礼します」

髪はいつもセシルが適当に結ってくれていたから、とつさに自分では思い浮かばない。シルヴィアが言葉の途中でこくこく首を縦に振ってみせると、クレアは鏡越しにっこり笑って櫛を手にした。

丁寧に梳いてくれる感触は、セシルがやってくれるのとあまり変わらないのでほっとする。

「マリー、こちらにいらっしやい。姫様の髪飾りを選んでくれる？」
「はい……」

クレアがマリーを呼んだので、シルヴィアは彼女が近くに来てうかがうように自分を見たとき、なんとか口の端をあげてほほ笑んでみせた。少々きこちなかったかもしれないけれど、たぶん、うまく笑えたはず。ともかく意図は伝わったらしく、恐縮しきりだったマリーもほんの少しだけ笑い返してくれた。

「クレアさん、どれがいいでしょうか」

「そうですね……姫様、どれにしましょうか」

「えっと……」

マリーが引き出しから出して鏡台に並べた髪飾りはどれも、セシルをはじめ兄や友人のアンジェリーナ、それから彼女の婚約者と同じくシルヴィアの幼馴染のシリル、あとは現エルヴィス公爵など近い人から贈られたものたちだ。髪飾りに限らず持っている装飾品類はすべてそうで、だから目玉が飛び出るような高価なものは少なくても、シルヴィアにとってはとても大切なものだった。

「それじゃあ、右から三つめの……そのリボンの、お花がついているのがいいです」

淡い黄色の造花が付いた白いリボンは、わりと最近セシルがくれたもの。まだもらったその日にしか使ったことがなく、今日着ている薄黄のドレスにもそれなりに似合うだろう。そう思っていたら、マリーが同じく鏡台に並べられていた中からもうひとつ、オレンジのリボンを手を取った。

「では、こちらと一緒に使ってみませんか？ ドレスの色にも合いますし、きつと華やかになりますわ」

マリーはリボンを簡単に形作って、先にシルヴィアが選んだ飾りに合わせてみせる。

「あらいいわね。姫様、いかがでしょう」

「……そうしてください」

マリーの手の中で組み合わされた飾りは、確かにシルヴィアの目を引いた。華やかで愛らしく、そして明るい。セシルはいつも可愛くなるよう気をつかって結ってくれるが、飾りを組み合わせるほどそこを気にすることはあまりないから、マリーの提案はそれ自体シルヴィアにとって新鮮だった。

「それにしても、姫様がお持ちの髪飾り、素敵なものが多いですね」
「……ほんと？」

「本当です。ほらこれなんて、姫様の目の色と同じでとてもきれいな興味深そうに並べられた飾りを見渡すマリーは、青い石で花の細工が施された銀の飾りを示して感嘆する。それもセシルが、まさにマリーと同じことを言いながらくれたものだ。

まさか見透かされたわけではないだろうけれど、シルヴィアは気恥ずかしさにほんのりと頬を染めた。

「……ありがとう」

「姫様、うつむかないで前を向いてくださいね」
飾りも決まったところで結い方を決めようと髪を扱っていたクレアがくすくす笑いながらそっと、照れて面を伏せたシルヴィアの頭を上向かせる。

「クレア、殿下の髪は結い上げるのに少々長すぎるものではありませんか？」

シルヴィアはびくりと身を固くした。というのももそう指摘したのはニーナで、朝一番の衝撃が大きかったのか無意識ながら彼女には身構えてしまうのである。ニーナが近寄ってきて髪の長さを確かめる——ようにしたのは実はふりだけで、表情を見る限りどうやら彼女は明らかに切るべきと考えているようだった。

確かに、比較対象がアンジェリーナしかないけれどもおそらく、

シルヴィアの髪は女性の平均よりかなり長い。アンジェリーナの髪は背の中ほどで揃えられているのに対し、シルヴィアは軽く背中全体を覆ってしまうほどに長さがあつた。

でもその髪は先日セシルが短くしてくれたばかりで、その時に『長いほうが綺麗だろう』と言われたから、シルヴィアは長いまま残すことを望んだのだ。

「私はこのままでもなかなか良いかと思いますが。姫様の髪は、亡き王妃様譲りでいらっしやいますね」

「でもそのままでは、結い上げてしまうことはできないでしょう。殿下、お切りしましょうか」

「え……」

「昨今、女性は公の場では髪を結い上げてしまうことが主流となっておりますし」

「でも、その……」

「何か問題がありますでしょうか」

『セシルがきれいだと言ってくれたから』では、理由として呆れられてしまうような気がする。おぼろげながら覚えているとても綺麗だった母の長い髪に憧れてもいるけれど、彼女のようになりたいたいと言っても笑われてしまわないだろうか。

母はとても美しい人で、シルヴィアが足元にも及ばないほど気品があつたから。

「……………」

「殿下？」

「ニーナさん、よろしいではありませんか。姫様なら全てを結い上げてしまうのもきつとお似合いです、こうして長く流しておくのも素敵ですわ」

「けれども……承知致しました。では一先ず保留にしておきましょう」

クレアの助言とシルヴィアが顔を曇らせたのを見てニーナは折れた。

それからようやく髪を結ってもらって、軽く肌の手入れもされてからようやくシルヴィアは寢室を出ることを許され、まだ一日始まったばかりだというのにそのころにはへとへとになりかけていた。

「シルヴィア、今日は随分と遅く……お疲れさま。おいで、朝ご飯あたたかくしておいたから」

へろへろと寢室から出てきたシルヴィアを見てセシルは、一瞬目を丸くしたあと苦笑する。シルヴィアのほうはといえばなんだか随分久しぶりに彼を目にした気がして、それでも慣れ親しんだその気配にやっと心から息をつくことができたのだった。

Section・3

「セシル！」

「殿下、お待ちください！」

ほっとしてシルヴィアがセシルに駆け寄れば、後ろからニーナの叱責が飛んできた。びっくりと立ちすくんで後ろを振り返ると、ニーナがいかめしい顔つきでこちらを睨んでいる。

「殿下、そのようにはしたない行いは謹んでくださいませ」

「はした、ない……？」

ニーナに怯えながらも困ったように首を傾げるシルヴィアはつまり、世に言う男女のことわりを知らない。ある意味それも当然のこと、箱入りの上に鍵までかけてあらゆる意味で厳重に守られてきた彼女には、それを教えてくれる相手も身をもって知らせるような危険さえ一切与えられていなかった。

実のところ後者のほうは完全に排除されていたとは言いがたいわけだけでも、さいわいなことに誰一人としてシルヴィアに危害を加えようとはしなかったのだから同じことである。

どちらにせよ、シルヴィアにはなぜ自分の行動が咎められてしまったのか、その部分を理解するための知識も経験も、完全に抜け落ちていた。

けれどもそれを知らないニーナは相変わらず睨むようにシルヴィアを見据え、厳しい声で言い募る。

「そうです。殿下、あなたは仮にもこの国の王女なのですから、間違いがあつては困りますし、そう思われてもなりません」

「……どうということ？」

捕食者を前にした小動物のように身を縮こまらせながら、シルヴィアは目に涙を滲ませてセシルを見上げる。彼はすこしばかり決まりの悪そうな顔をして泣きそうなシルヴィアの頭を撫でると、庇うようにニーナの視線を遮って半歩ぶん前に立った。

「ですから伯爵閣下、そのような……」

「ニーナ。あなたの言いたいことも分かるけれど、このことはもう少しそつとしておいてくれないかな」

「ですが、私たちは陛下より殿下を任されておりますので」

半端なことはできないというニーナにセシルは苦笑する。確かに、彼女の言わんとする部分は今後、シルヴィアにとって最も必要な部分になるだろう。シルヴィアがセシルやアルフレッドに対するのと同じ態度をこれから接することになる多くの男性にも示せば、それは大問題になるに違いない。

けれどもセシルは、もとより大変な人見知りでもある彼女がそういった言動を取るとは思えなかった。

ニーナたちが良い例だ。シルヴィアは、ごく親しい相手以外に対して必要以上の接触、場合によっては必要でも可能な限り接することを避けようとする。

そうであるならニーナの言うとおりこの場での態度を厳しく改めさせるより、最低限人前に出る際の注意点を心得ておけば良いのではないか。ついでにその部分の教育については、おそらくニーナよりもアンジェリーナあたりの親しい女性に任せるほうが適任だろうとセシルには思えた。

成り行きを見守っておずおずと見上げてくるシルヴィアとセシルの視線が合う。

セシルとてシルヴィアが女性である以上、いつかはこの問題に真正面からぶち当たるだろうと思っていたけれども、彼女はまだまだ子どもだという認識が抜けないでいるままだ。

ずっと手の内で慈しんできた愛しい子。

手を放したら彼女は、その背にある翼でどこまでも飛んでいってしまうのだろうか。

結局、シルヴィアとニーナ、もとい、セシルとニーナの食い違いはニーナがひとまずは折れる方向で決着した。シルヴィアはほっとしつつセシルが用意していた朝食を摂り、そして授業時間になるとまたもセシルが侍女たちを追い出したので部屋では今日もいつも通り二人きりだ。

そうして教科書を開きながら、セシルは別のことを問うてきた。

「ニーナさんが、シルヴィアにドレスや装飾品が足りないって言うていたけれど、きみはどんなものがほしい？」

セシルと同じページを開こうと紙を繰っていたシルヴィアは一時その手を止めて宙を見つめる。そういえば朝、ニーナはしきりにあれがないこれもないと言っていた。そのことだろうか。

「……分らない。だって、わたしはドレスもアクセサリーも、アンジュが作ってくれたり、セシルやお兄さまや、みんながくれたものを使いきれないくらいたくさん持っているのよ。なのにニーナは足りないっていうのなもの」

シルヴィアは少しばかり不満だった。彼女としては足りないよりもむしろ多すぎてどれを選んだらよいか迷うくらいだったのに、シルヴィアの持ち物を指してニーナはないものばかりと言ったのだ。ところがセシルは、どこか納得している様子である。

「シルヴィア、それはたぶん、王族として着飾るぶんに足りないって言われたんだよ」

「それは、だって必要なかったもの。そうでしょ？ それに今あるぶんだって十分綺麗なのに」

「でも確かに、高価な宝石が使われたのとかは、あんまりあげたことなかったね」

僕の小遣いじゃあげられないんだけど、とセシルは苦笑する。

「そういうのを身に付けなきゃいけないの？」

「そうだなあ……」

高価なもので身を飾る意味が、シルヴィアにはいまいちピンと来

ない。幼いころの記憶はおぼろげであるし、そうして豪華に着飾った姿は父にも、兄にもセシルにもあまり見たことがなかった。

「ニーナって、すこしヘンね」

「実のところ、そうでもないよ」

「だって……」

セシルは苦く笑っているが、シルヴィアは唇を尖らせた。とつぜんやってきた彼女は、シルヴィアにはわけの分からないことばかり言う。おまけにかなり怖い。

むっとして幼い仕草を見せながら、けれどシルヴィアの声の調子はそれから少しばかり変化した。

「ねえ、ニーナは男のかたにむやみに近づいてはいけませんって言うけど、そうしたらお兄さまやセシルとも居られなくなってしまふの？」

「……………」

「セシル？」

シルヴィアの問いに、セシルは曖昧に笑う。普段ならどんな疑問にも答えてくれるセシルはけれども、朝のひと悶着に関してはたびたび答えを濁してしまった。

そのことが、シルヴィアにとってはとても不安だ。セシルがどう思っているのかが分からない。

「……お兄さまやセシルや、あとシリルやユーリおじさまに近づいちゃいけないのはいや。ねえセシル。セシルはむかし、ずっとそばに居てくれるって言うてくれたけど、あれは今でも？」

「……もちろんだよ」

「ニーナがだめって言うても？」

瞳をくもらせ、眉を寄せて不安そうに尋ねるシルヴィアに、セシルはふつと相好を崩してやわらかく笑いかけた。

きらきらと淡く光る白銀色の髪に手を伸ばすと、彼はいつもそうするようにやさしく撫でてやる。

「ニーナがどうこう言うのは関係ないな。シルヴィアがそうしてっ

て言うかぎりには、僕はいつでもそばに居るよ」

「ほんと？ わたし、きつと一生言うわ」

「本当だよ。一生でも、きみが望む限り」

ぱちぱちとその青い瞳を幾度か瞬かせてシルヴィアはセシルをじつと見つめた。

シルヴィアには、自分がとんでもないわがまを言っていることは分かっていた。セシルは確かに王家、今は直接シルヴィアに仕えているけれども、だからといってその一生をシルヴィアが縛っているはずがないのだ。

それでも、セシルの眼差しはどこまでも真摯で、嘘がなかった。

彼はきつと、シルヴィアがその手を自ら離さないかぎり、ずっとこうしていてくれるだろう。

そうしてたぶん、シルヴィアは、自分からでは彼を放すことなどできない。

「シルヴィアはどんな具合だい？」

「……だいぶ苦勞しているようですが」

セシルがやや控えめに返事をする、彼の正面に背を向けて立っていたアルフレッドは苦笑したようだった。

すでに公務用の服に着替え朝食も済ませたアルフレッドは、朝日が差し込む自室の広い窓から城下を見下ろしている。目に映る景色に彼は何を思うのだろう。肩越しに振り返られても、逆光になってセシルからではその表情は窺い知れない。

「まあ、無理もないだろうね。特にニーナだろう、シルヴィアが苦手としているのは」

「お察しの通りです」

「彼女みたいなタイプは、今までシルヴィアの周りにはいなかったから。融通のきかない面はあるけれど、だからこそ私たちにはできない接し方だよ」

「今までが甘やかしすぎ、ということですか」

「そうとも言えないけれどね。あの子には、ニーナのような相手もまた必要だというだけだよ」

「……なるほど」

セシルの相槌を最後に、国王の私室で僅かばかりの沈黙が落ちる。そこからもう一度口を開いたのは、やはりアルフレッドのほうだった。

「セシル君、一つ言っておこうと思うんだけど」

「はい」

「ニーナはね、おそらくシルヴィアを疑っている」

「どういうことでしょうか」

疑うとはまた不穏な単語だ。その心情どおりにセシルが片眉を上げてアルフレッドをうかがうと、彼は「そうぴりぴりすることはないよ」とセシルの内心を見通してたしなめた。

「彼女はあの通り、王家の人間としては容姿からイレギュラーだろう？ その上、いくらなんでも王女が存在をそう長年隠し通せるものなのかと、ニーナは疑っているんだ」

「つまり、姫君が実は王女ではないと？」

「その通り。わが国は外交戦略を考えると微妙な時期だからね。手駒として『王女』を一人、内密に迎えようとしてもまあ、おかしくはないだろう」

アルフレッドに、シルヴィアをそう扱うようなつもりはない。王女、国王の妹というのは政略的にかんりの利用価値があるものだったが、シルヴィアにはそれがなかった。利用できない理由があるからだ。

「……………。ニーナや他の侍女たちには、姫君のことは」

「詳しくは言っていない。特に隠されていた理由についてなんかは

ほとんど伏せて、ただ身体が弱かったからとだけ」

シルヴィアが存在を秘匿することは、実のところ国家の一大機密事項よりもお蔵重に秘され、行われたことだった。王女の存在を知っていたのは、シルヴィアが生まれた当時の国王と妃、その周りの数人の侍女と、宰相、数人の大臣、王家の執事、それからセシルの父でもあるエルヴィス公爵、それだけだ。セシルは内密に父に呼ばれ、彼女の世話係に就いた。幼かった彼が自分が選ばれた理由を知ったのは、ずっとそのことである。

シルヴィアは国ぐるみ、もっと言うなれば国の上層部ぐるみで誕生から徹底的に隠された。それこそ、毛ほどの気配ももらさぬように。

「ニーナの疑いは尤もなんだ。普通は可能なことではないからね。今回の場合、特にエルヴィス公、つまり君のお父上の力があつたからできたにすぎない。彼の魔法がなければあつさりばれていただろうよ」

「もとは父が言い出したことでしたから……」

「彼だから気がついた、というべきだね、それは。まあそれはともかく、そんなわけでニーナは、シルヴィアがロクな作法も知らぬ庶民の娘ではないかと考えているわけだ。だから殊のほかあの子の言動に厳しくするだろうから、程よくフォローしてあげて」

「承知致しました」

セシルは恭しく頭を下げた。

もとより、アルフレッドに言われずとも同じ役目を引き受けただろうが、なにはともあれこれでアルフレッドは、セシルとニーナの仲が多少険悪になっても目を瞑ってくれるというわけだ。

「まあ、今の状態が長く続くとは思えないけれど」

「と、仰いますと？」

「亡き、母上のもとで侍女頭をしていた女性を城に呼び戻した。シルヴィアが覚えているかどうかは分からないけれど、幼い頃は私もあの子も面倒を見てもらっていた方だよ。来週には城に上がってく

れると言っていたから、彼女が来てくれればニーナともうまく折り合いをつけてくれるだろう」

「もしかしてエメリアさんでしょうか。シルヴィアがよくエマと呼んでいた、あの……」

「きみも覚えているか」

アルフレッドは懐かしそうに柔らかく相好を崩した。つられてセシルもまた、かつてを思い出して目を細める。

セシルとアルフレッド、それにおそらくはシルヴィアもかすかにでも覚えているであろう、幼かったころの光景。

それは過ぎ去りし日々の、とても幸福な思い出だった。

Section・4

「どう？ これだと苦しくない、シルフィー？」

「う、うん…… コルセット外しただけで楽になったよ。けど……」
「けど？」

「いいの、これほんとうになくて……」

シルヴィアのドレスの腰紐を調整しながらにこりと笑って見上げてくるアンジェリーナは、相変わらず文句のつけようのない美人だ。豊かな胸元、細い腰、それらが実に素晴らしい線を描いてドレスに包まれている。

けれどシルヴィアはついさっき、コルセットの苦しさに耐えかねていたところだった。それをアンジェリーナに外してもらってようやく一息つけたのだが、正装するのにコルセットはかせないものだと言う、彼女が来る前にシルヴィアにそれを身に着けるよう説いたニーナと仕立屋の言葉がシルヴィアには引っかかっている。

けれどもアンジェリーナは手にしたメモ紙に何かを書き込みながら、「問題ないわ」と言い切った。

「あのね、コルセットでぎゅうぎゅうに締めるだけが補整じゃないのよ。あ、そういえば…… あらシルフィー、あなた少しサイズ変わったかしら」

「わ、な、どこ見て言ってるのアンジュ！」

アンジュ—— アンジェリーナがじつと視線を注ぐ辺りに気がついて、シルヴィアはぼつと赤面した。ドレスを作るのにサイズは確かに重要だけれど——そしてできればもうちょっと、否もうかなり欲しいところだけれど——そこはそんなふうに見つめるものじゃない……と思う。

「赤くなっちゃって、かわいいの」

「やつ、やだあ、アンジュ！ きゃーなにするの！」

「はいはい、サイズ測りなおすからちよつと大人しくしててね」

「サイズならさつき、うきやあ！」

実に鮮やかな手際でシルヴィアの身体から仮縫いのドレスを剥ぎ取ったアンジェリーナは、メジャーを手にしてにっこり満面の笑み。肌着が残されているとはいえ心許なさや危険を感じ取って、シルヴィアはさあつと顔を青くした。メジャーを手を迫ってくるアンジェリーナが怖い。

「えっと、あの、待ってアンジュ？ サイズならさつき……」

「大丈夫、私がちゃんとしてあげますからね」

「待って待って！ うひゃあだからくすぐった……っ！」

結局、シルヴィアはアンジェリーナから逃れることなどできなかった。じりじりと後ずさってはみたもののあつという間に捕まり、力を入れられているわけでもないのに抜け出せない彼女の腕の中でくすぐられながら採寸されるしかない。

メジャーが肌を擦れる感覚もさることながら、時折いたずらしてくるアンジェリーナの手のひらが大変くすぐったかった。

そもそもなぜこんなことになっているのかというと、時は少しだけさかのぼる。

突然開け放たれた扉の向こうには、よく見知った顔がいた。

「ごきげんようシルフィー！」

「アンジュ！」

豊かなブラウンの髪に似合う赤みがあった瞳を悪戯に煌かせ、シルヴィアに輝かんばかりの笑顔を向けるのは幼馴染のアンジュ——アンジェリーナだった。

彼女はセシルがシルヴィアに引き合わせた友人で、出身は七王家の一つ、ローゼル伯爵家の一人娘だ。伯爵令嬢という響きに似合わない親しみやすさと潑刺とした明るさを持つアンジェリーナとは、セ

シルや家族以外のほとんど誰とも親交のなかった幼い頃のシルヴィアでもすぐに打ち解けることができた。以来、早くに母を亡くしたシルヴィアにとって同性の友人という貴重な存在から、姉代わりのようにもなつて世話をやいてくれている。

アンジェリーナはスタイル抜群の身体をこれまたセンスの良いドレスに包み、迷いのない足取りでシルヴィアの前までやってくると、久々に会う妹分をぎゅっと抱きしめた。

「久しぶりねえ！ 元気してた？」

「う、うん、元気だったよ。アンジュはいつ帰ってきたの？ セシルから、遠くに出張してるって聞いてたけど……」

「昨日の夜よ。それで今日は朝からゆっくりしてたら、早速セシルに呼ばれて……」

アンジェリーナの肩越しに開きっぱなしのドアをうかがうと、ドア際にもたれて室内には入ってこなかったセシルがシルヴィアに向けて片目を瞑つてみせたのがわかった。

どうやら、自分が部屋から閉め出されたために対抗策としてアンジェリーナを呼んだらしい。

「昨日帰ってきたばかり？ いいの、アンジュ、疲れてるんじゃない？」

「野暮用だったらセシルを一発殴つてやろうと思つてたけど、あなたの用事ならいつでも飛んでいくわよ」

「な、殴っちゃだめだよ……」

につこりと笑うアンジュの台詞はまさにいつもどおりだ。この年上の友人はなぜかセシルと、それから恋人であるはずの相手にも厳しい。

その恋人——これもまたシルヴィアの幼馴染なのだが——いわくアンジェリーナはやや嗜虐志向にあるらしいがシルヴィアにはよく分らない。

そのアンジェリーナは、抱きしめたままのシルヴィアを見下ろし、いかにも無邪気そうなふうを『装つて』ことりと小首を傾げた。

「ところでシルフィー。そのだっさい服はなんなの？」

「……………えっと」

シルヴィアがその時着ていたのは、仕立屋の女性とニーナが見立てた昼用のドレスだった。

ださい——かどうかはともかく、好みとしてはあんまり好きじゃないなあと思っていたのは確かだからアンジェリーナの言葉に異となえるまではしないものの、まさかそこまで直球にくるとは思っておらず、シルヴィアもだがニーナと仕立屋の女性が視界の外で凍り付いている気配がする。

率直すぎる言葉にどう返していいか迷ってシルヴィアが唇をむずむずさせていると、答えを待たずにアンジェリーナはウエストを絞っていたリボンに手をかけあっさりとほどいてしまった。そこから背中のボタンだの何だのと、実に手際良くシルヴィアからドレスを剥がしていく。

「え、アンジュ…………？」

「お、お待ちください！」

慌てたのはシルヴィアだけではない。が、ニーナが呆気に取られつつ制止の声を上げたものの、アンジェリーナは全く取り合わなかった。

「ねえシルヴィア、これって何のためのドレス？ ああでも良かった、こんな似合わないもの、シルフィーが着せられる羽目にならなくて」

「あわ、待つて待つてセシルが！」

アンジェリーナの手はあっという間にコルセットの紐にまで伸びて、シルヴィアは慌てて彼女をおさえた。このきつい拘束から解放されるのは嬉しいが、その下にはなにも纏っていないのだ。

繋がった隣の部屋に彼がいるはずだとシルヴィアが目を向けたら、いつの間にか開いていたはずの扉は閉ざされていた。

「シルヴィアの身体をセシルなんかに見せるわけじゃないじゃない」
手を止めないままアンジェリーナが言う。なんとなく恥ずかしい

ことを言われた気がして、シルヴィアは少し赤くなった。紐がほどかれると、途端に新鮮な空気が胸を満たす。

「ぷはぁ」

「苦しかったでしょう、シルフィー。可哀想に」

やっと解放された自分の体を見下ろせば、アンジェリーナが軽く指で撫でている辺りには鬱血に近いくらい真っ赤な痕がついていた。それだけ強く締め付けられていたということだ。苦しさに気を取られて痛みはまだ気が回らなかったが、解放された今はそこがじんじんと痛んでいるのが分かる。

「シルヴィアはコルセットなんて着けられないわ」

「それってどういう……？」

「お嬢さま、しかしながら殿下に正装していただくためには……」

「あなた誰？」

「ニーナと申します。殿下の」

「ああ、あなたが噂の。セシルに聞いているわ。私はアンジェリーナ・ローゼル。よろしくね」

「ローゼル伯爵令嬢さまでいらっしゃいますか」

「ええそうよ」

喋っている間にも、アンジェリーナはシルヴィアから目を離さず、また手も止めなかった。シルヴィアの素肌に肌着を着せ、仕立屋が持ってきた中から見繕ったらしい仮縫い状態のドレスを被せてピンで調整をつけていく。

「ねえシルヴィア、これってあなたが公の場に出るときのためのドレスなのよね？」

「う、うん。ニーナはそう言って仕立屋さんを連れてきたよ」

そのおかげで今日は朝から散々だったのだ。セシルは早々に締め出されるし、ニーナと仕立屋の女性との間でなんだかんだと進んでいって、シルヴィアにはコルセットがきつくて苦しいと訴える暇さえなかった。

登場が唐突すぎて一瞬戸惑ったものの、だからアンジェリーナを

セシルが呼んでくれたことは本当に救いだった。

「だったら少し華やかなほうがいいかしら」

外に出るための決まりごととか、服装のこととか、シルヴィアはほとんど知らない。知らなくて良い環境で暮らしてきたせいだけだ、それを突然必要になりましたと言われてもどうすることもできないのは当たり前だ。そんなシルヴィアの女性として足りない部分を、アンジェリーナはさくさく埋めていってくれる。

「んー、デザインはもうちょっと考えたいわねえ」

「あの、一応わたくしの考えた原案がございますけれど……」

「それってさっきまでシルヴィアに着せてみてたやつ？ 却下」

アンジェリーナは恐る恐るといったふうに進み出た仕立屋の申し出をすげなく切り捨てた。

「あのね、シルヴィアって見た目からも分かると思うけど、骨格がかなり華奢なの。こんな子にコルセット着けてあんな重たいドレスなんか着せたら身体が潰れちゃうわ。そもそも体力的にだってタフじゃないのに、あなた王女を衆目の中で倒れさせる気？」

「いいえまさか……ですが、あの形は現在の主流ですし……」

「ちよつと聞くけど。あなたは流行を作るほう？ それとも乗るほう？」

アンジェリーナの指摘に仕立屋はぐつと言葉に詰まったようだった。彼女はそう言うが、実際流行を作り出せるようなデザイナーなんてそうそう居ないはずだ。アンジェリーナ自身はその稀有なる一人で、自ら作ったドレスを着ては社交界を賑わわせしていると以前セシルから聞いたことがある。

今もそうだけれど、自分でデザインした身の丈にぴったり合ったすてきなドレスを着て、利発そうな眼差しには力があつて、すつと背筋を伸ばして立つ彼女は本当に美しい。社交界の男性のみならず、女性たちからも憧れの目を向けられるのが疑いなく納得できるくらいに。

そんなアンジェリーナがシルヴィアには頼りになるお姉さんであ

ると同時にいつも眩しくて、羨ましかった。

今だって、アンジェリーナは一分の迷いなく言う。

「それに、べつにいいのよ、シルヴィアの着るドレスが流行の型じゃなかったって。この子はこの国唯一の王族の女性よ。どんなドレスでも似合うものを着こなせばそれが流行りになる。そうでしょう？」

「はい終わり。よかったわねシルフィー、やっぱりちょっとだけ成長してみたよ？」

「だからどこ見て言ってるの！？」

「言ってほしいの？」

「だめー！」

アンジェリーナはくすくすと笑いながら使ったメジャーをくると巻いて箱に仕舞った。シルヴィアは頬を膨らませながらも、アンジェリーナが手元の紙を見下ろしては時折何か書き込んでいくのが気になって覗き込むように背伸びする。

「アンジュ、何をしているの？」

「ああ、ちよつとね……どんなドレスがいいかしらって」

「え、さっき合わせたよね？」

「そうね。でも、これ見てたらやっぱり新しくデザインしなおしたくなったの。シルヴィアの身体つきも随分変わったみたいだし」

くるくるとペンを指で弄びながら、アンジェリーナはメモにアイディアを書いたり消したりしている。いつもは完成品を届けてくれるだけだったので、こうしてデザインされていくのを間近で見るのは初めてだ。

なんだか胸がどきどきした。

「うーん、これだとちょっと物足りないわねえ。ねえシルフィー、あなたはどいうのがいい？」

「えっ……えっ、と」

「あんまり悩まなくていいのよ。可愛い感じのとか、リボンを付けてみたりとか」

「うーんと……可愛い、よりはかっこいい感じがいいかな」

「かっこいい？」

うん、とシルヴィアは自分を見下ろしながら言った。

「あのね、わたし、かっこいい女性になりたいの」

「シルフィーはどっちかって言うとかわいいタイプよね。と、言うかかわいいわよね」

「ほ、褒められるのは嬉しいんだけど。でもね、それだけじゃなくて、その……」

アンジェリーナみたいに、とはさすがに言えなかった。でもシルヴィアは彼女のように、皆に憧れを抱かせるようなひとになりたいと思っている。

それは王女としてでもあり、またひとりの人としても。

「そうねえ、じゃあちよっとお茶にしながらでも考えてみましょうか。セシルも交えて」

アンジェリーナはシルヴィアにまた服を着せ替えながら言った。

肌着の上に、これはアンジェリーナが新しく持ってきていたらしい普段着用のドレスを被せられる。施されたレースを傷つけないよう気をつけながら襟ぐりから頭を出して、シルヴィアは挙げられた名に首を傾げた。

どうしてそこに彼が出てくるのだろう。

「セシルは……あ、ちよっと動かないでね」

「ん」

傾げた首はアンジェリーナの両手でもとの位置に戻される。

「ねえ、どうしてセシルもなの？」

「おかしいかしら」

「だって、ドレスのお話をするのに……。セシルはドレスなんか着ないでしょ？」

言っと、アンジェリーナは思わずといったふうには噴き出した。着替え諸々で乱れたシルヴィアの髪を直している彼女の手は、余韻でぶるぶる震え続けている。大真面目に聞いたつもりのシルヴィアが頬を膨らませてようやく、まだなにかを堪えながらといった様子で立ち直った。

「アンジュひどい……」

「ごめんね、あなたがあんまり可愛いこと言うものだから。……そうねえ、確かにセシルはドレスなんか着やしないけれど。でもね、着ないだけでドレスなんか腐るほど見てきたんだから、多少頼りにもなるでしょう」

「あ、そっか」

確かに考えてみれば、小さな部屋に閉じこもりっぱなしのシルヴィアよりよほど、セシルのほうがそんな方面にも詳しいのに違いはない。ドレスを着る淑女たちにも何度でも会ったことがあるだろう。

「そっか……」

胸が、つきんと痛んだ気がした。

Section . 5

セシルも交えたシルヴィアの衣装会議はとんでもなく賑やかなものとなっていた。

侍女が用意したお茶と焼き菓子は今やトレーごと宙に浮かび、では本来それらが置かれていたテーブルの上がどうなっているかという、それはたくさんの布地やらリボンやら飾りやらが天板も見えないくらい積み重なっている。すべてアンジェリーナ、もしくは仕立屋が出してきたものたちだったが、シルヴィアはそれらの名前を覚えるだけで目を回してしまいそうだった。たかが布地、そう舐めてはいけない。正装に用いることができるものできないもの、織りに模様、色、素材、その他考慮すべき要素はいくらでもあるのだ。アンジェリーナはほとんど一目でばいばいと選り分けていったけれども、シルヴィアには違いさえ分らないものもあった。

「えーと、ねえレースのサンプルある？ できれば最新ものが見たいのだけれど」

「こちらになります」

仕立屋の女性が大きな仕事鞆から取り出したサンプル集を、隣に座るアンジェリーナがシルヴィアにも見えるよう膝に置いてくれる。ちなみに反対隣にはいつものようにセシルがいた。

「シルヴィアはどれが好き？」

「えっと……」

アンジェリーナは束になったレースをひとつひとつ見せていくくれるが、シルヴィアにはどれなら使って良いものか分からない。そう言えば、両隣からくすりと笑われてしまった。

「シルヴィア、布地だけで目を白黒させていたからね」

「……セシルのほうが詳しいっていうのが、おかしいと思う……」
むっ、とシルヴィアが頬をふくらませると、セシルがなんとも言えない顔で苦笑する。確かにシルヴィアには知識がないほうだとは

いえ、それにしてもセシルは逆に知りすぎだと思うのだ。

だがそれも、なぜと問うたものの先ほどからやんわりはぐらかされてしまっていた。

「ねえアンジュ、セシルってちょっとへんよね？」

「彼はだいぶおかしいわよ」

「誤解を招くようなことを吹き込まないでくれるかな」

軽口に、セシルは少し眉を寄せてアンジェリーナを睨んだ。その表情が、シルヴィアにはあまり見慣れないものだからおかしくて、同時に小さな寂しさを感じる。シルヴィアにとってセシルは生まれたときからずっと面倒見の良くて優しい従兄（実際にはもう少し遠い）だったけれども、アンジェリーナとセシルにはそれ以前からの付き合いがあるのだ。歳が離れているシルヴィアと違って、二人はアンジェリーナのほうが多少年少だとはいえ随分近く、シルヴィアはいつもただ可愛がられてばかりいた。

でも、いつからだろう。

昔はそれでよかった。なのに、彼の『隣』に並びたいと思うようになったのは……。

「あらあらシルフィー、可愛いお顔が台無しよ？ まあそれでも可愛いんだけどね」

くすくすと笑って、アンジェリーナがシルヴィアの頬を撫でる。

それと、隣から視線を感じる。

振り向かなくてもセシルが今、アンジェリーナと同じ眼差しをしていることが手に取るように分かった。

子ども扱いしないで、そう訴えることが余計にまだまだ子どもだと主張することになりそうで、シルヴィアは悔しく思いながらも知らないうちに尖らせていた唇をおとなしくほどくしかない。

そうして仕方なしに手元にあるレースのサンプル集をまたばらばらとめくり出すと、ふと、隣でアンジェリーナが声を上げた。

「……あら？ シルフィーちょっと待って」

「え？」

「これ……。ねえ、このあたりにある模様って、あまり見たことないのだけれど」

「そちらはカリダからの輸入品となります。こここのところこの王都で人気の品でして」

「カリダ……」

唐突に挙げられた国の名を、シルヴィアは口の中で反唱した。その複雑そうな表情に気づいてか仕立屋の女性は慌てたように付け加える。

「先の大戦からはもう百年以上が経過しますし、その後も小さな争いはいくつか起こりましたが、数年前には協約も結ばれました。若い方々には大戦の頃の記憶もありませんので、その……」

百年以上、正確には百五十年以上というところだろう。たしか、シルヴィアが生まれた頃が丁度その大戦の終結期だったはずだ。半世紀以上続いた大きな争いは互いの国を疲弊させ、結局停戦協定が結ばれるという結果に終わった大戦の影響で当時国の荒れようは大変なものだったという。国力も弱まっていたカリダ以外の脅威もあった。

ただ、シルヴィアには争いの記憶そのものはほとんどないと言っている。物心付いたころにはもうすでに母と共に離宮で隔離されていたし、また停戦後数年経つてある程度統制が取り戻されたあとだったからだ。彼女は歴史の教科書から、間接的にしか出来事を知らない。シルヴィアと同じか、もうすこし前からそれ以降の世代は似たようなものだろう、そうであれば確執をあまり感じないのも無理のないことかもしれない。

けれどもシルヴィアは王族としての意識から、かの国に良い印象は抱いていない。ましてや公の場で王女が身につけるには、カリダのものはさすがにふさわしくないように思う。それをシルヴィアが口に出すべきかどうか迷っているうちに、アンジェリーナがシルヴィアの手からレースのサンプルを取り上げた。

「いくら人気といったって、シルヴィアにこれは駄目ね。 “王女”には身に着けさせられない」

「場合によっては友好のしるしとも言えそうだけれど、あらぬ誤解を招かないためにもそのほうが良いだろう」

セシルはアンジェリーナよりも思案顔だ。意見としては彼女のものを支持しながら、別のことを考えているようだった。

「あらぬ誤解って？」

シルヴィアが尋ねると、セシルは少し困った顔をする。なんだか最近頻繁に、彼はこんな顔をしているような。させているのは、紛れもなくシルヴィア自身なのだけれど。

「そうだね……例えば、協約の記念式典なんかだったら、まだありうるんだよ。ただどこかの国と特に関係のないときにシルヴィアがそういうものを身につけているっていうことは——穿った見方をする人もいるだろう」

セシルは直接の物言いを避けたが、言わんとすることはこの場に居た全員に伝わったらしい。部屋に微妙な空気が流れ、中でも一番難しい思いをしたのは当事者であるシルヴィアだ。

山積みになるであろう——今でもそこそこ積まれている問題のうち「『そういうこと』も含まれてくるのは分かっていたけれど、正直なところあまり実感は湧かなかった。でもこれからは、本当の本当にそういう話がいくらでも湧いて出てくるのだ。立場と年齢を考えれば、むしろ遅すぎるのだろう。」

ほんの数歩先に、全く知らない世界がシルヴィアを待ち構えている。そこでは、今までのようにただ流されるばかりでなく、自らの足で歩んで行かなければならない。

「まあそうね。でも、だからそんな面倒事は可能な限り避けて通るべきでしょ」

重くなった空気の中で、それでもあっけらかんとアンジェリーナは言った。『避けて通る』——つまりある程度先延ばしにして来るべきときに向き合えばいいと彼女は言ってくれたのだ。たしかに、

王女が本気で相手にしなければならぬものはそこそこ絞られるものだろうし、今から悩んでも仕方がない。そう考えると気持ちは軽くなった。

「あ、そうだ。シルフィー、いつそのことレースは自分で編んでみたかどうか？」

「えっ？ 自分で？」

「記念のドレスになるのだし、そのほうがきつと思入れも深いものになるわよ？」

突然の提案にシルヴィアはぱくりと目を瞬かせて、アンジェリーナが取り上げたサンプル集と自分の両手を交互に見やった。たしかに、ドレスを準備する期間を考えても、レースを編むだけの時間は十分にある。

「ね、全体のデザインは最初に打ち合わせして、レースは好きな柄で編んでみなさいよ。もちろん外国風のものだと色々問題があるから、この国の伝統的なものから選ばなきゃならないけれど」

「い、いいの、かな」

「いいに決まってるじゃない。ねえセシル」

「僕も良いアイディアだと思うよ。シルヴィアはレースを編むのとても上手なんだし、せつかくだからやってごらん？」

二人のこんな言葉は日常茶飯事——でも、シルヴィアはもじもじと両手の指を組み替えながら面映そうにした。大事なドレスの、一部だけとはいえ自分で手がける。そう考えると胸がどきどきしてくる。

「……うん、自分でつくる」

シルヴィアが頷くと、アンジェリーナとセシルが揃って笑顔になった。アンジェリーナはそれじゃあレースはシルフィーのものを使ったことで、と話を進めながらメモを繰って必要な物品リストを確認し、足りないものがないかチェックを始める。ペンはよどみなく走り、彼女の頭の中ではもうすでに、ドレスのかたちがおおよそできあがっていきそうだった。

「うーん、とりあえずお披露目のためのドレスはこれで良いかしら。ねえ、ほかに必要なものってある？」

アンジェリーナが目を向けたのは壁際に引っ込んでいたニーナだった。彼女はやや渋い表情ながら生真面目な顔をして即座に頷き、空で答えていく。

「はい。日常でお召しになるドレスも含め、殿下が身に着けられるものは揃って足りておりません。肌着類をはじめお靴、手袋、髪飾り、それから指輪や首飾りなど装飾品もあつらえる必要がございます」

「たくさんあるわね……」

シルヴィアも同感だった。体型が変わったとアンジェリーナが言っていたようにそれも一因であるが、おそらくはそもそも王女として着飾るためのものがほとんど揃っていないのだろう。同じことは以前ニーナにも指摘されていた。

贈り物として兄や友人たちからもらったものはあるけれど、シルヴィアが眺めて楽しむだけならともかく、王女として人前で身につけるとなるとそれなりに値の張るものでなければならぬ。彼らにもらったものもいくらかならば使えるのだろうが、数は足りないのに違いない。

それに、初めて披露されるときにはやはり特別なものが必要だった。その日一日のために絞っていても、準備するものはまだまだたくさんあるらしい。

「靴や肌着はなんとかなるとして……問題は装飾品ね。指輪はきつと陛下から賜るのでしょうから、首飾りのほうを考えないと」

「私と致しましては、現陛下の後見であり、また殿下の後見ともなわれるであろうエルヴィス公爵閣下にお問い合わせようかと考えているのですが」

「ジュリアンおじ様ねえ……妥当な線ではあるけれど」

ニーナの提案には、アンジェリーナのみならずセシルも難しい顔をした。

フィエルでは立太子の折、または王族の成人に際して近しい人物から何らかの装飾品を贈られるという風習がある。今の問題はそれに倣って守護者——すなわち、装飾品の贈り主を誰にするか、ということだった。

その装飾品はただの飾りではない。贈り主が魔力の込めて加護の魔法を施したお守りである。

だから、最初に贈られたそれはいつでも身につけておく大切なものであり、それと同時に贈り主もまたその王族の『守護者』となつて、他に代えられない重要な役目を負う。

魔法が国を護り、また成り立たせているフィエルにおいて、これらはとても重く見られることなのだ。

「父上は妥当ではあるけれど、すでに陛下の『守護者』でもあるし、適任とは言いがたいかもしれないね」

「そうね。『守護者』はいざとなればその身を盾に命を賭してその人を護る者——いくらおじ様が型破りに強い力を持つてらっしゃるとは言っても、陛下とシルフィー、どちらもというのは良いことではないわね」

うーん、と皆と一緒にシルヴィアも考えてみるけれど、もともと知人の少ない彼女ではすぐに選択肢も尽きてしまう。仕方なしに黙ってセシルやアンジェリーナの答えを待ってみたものの、彼らもすぐには思い浮かばないようだ。

「でもまあともかく、これは陛下に伺ってみなければはじまらないし、父上にも意見を聞いてみよう。それにもしかしたら、もう決まった人がいるかもしれない」

「あつ……」

セシルの一言に、シルヴィアは思わず声を上げた。

「シルヴィア？　どうかしたの？」

「ううん、なんでもない」

シルヴィアは慌てて首を振ったが、『決まった人』という言葉に内心ではどきつとしていた。守護者はシルヴィアが絶対の信頼を寄

せ、また一生を、それがどういう種類であれ共にするかけがえのない人となる。

相応の地位と力を持った人物でないと選ばれないのは当たり前、だからこそその相手については幼い頃から色々と思い描いてきた。ただどいつでも、幼い頃から夢見ていたのはたった一人。

だからその言葉をなんでもないように口にされたとき、シルヴィアの心はつきりと痛んだのだ。

けれども悟られるわけにはいなくて、シルヴィアにできたのは感じた痛みを胸の深いところまで、ただ静かにしずめていくことだけだった。

Section・6

「そういえば、あなたにお土産があるの」

ドレスやその他についての話がひと段落したあと、ようやくテールの上が片付けられ冷えてしまったお茶が淹れなおされたところで、アンジェリーナは思い出したようにそう言った。

「お土産？」

と、シルヴィアは今まさに口に入れようとしていた焼き菓子を見つめながら問い返す。これもまた『お土産』としてアンジェリーナが持ってきたもので、作り手は彼女の恋人——セシルの兄であり、また彼らと同様シルヴィアの幼馴染でもあるシリルだった。キッチンを爆破させるようなシルヴィアと正反対に、彼は料理も菓子作りもプロ並にうまい。彼がシルヴィアのもとを訪れるときは大抵手土産に持ってきてくれる手作りの焼き菓子が、シルヴィアは甘いもののなかでも特別好きだった。

でもアンジェリーナはぱくりと口を開けて閉じたシルヴィアにいたずらっぽく笑いかけながら、いいえ、とゆるく首を振った。彼女はぱんぱんに膨らんだ裁縫道具や布地を入れた鞆とは別の、小さな手提げ鞆を引き寄せる。

「そついうのじゃなくてね、仕事であちこち行っただから、そのお土産」

出てきたのは大小さまざまな包みだった。どう見積もっても、アンジェリーナが持つ鞆に収まりきる数ではない。内部空間に細工をしていたのだとは簡単に分かるものの、だとしても次から次へ取り出されては積み上げられていくお土産の山に、シルヴィアは思わず目も口も丸くした。

「こ、こんなに!？」

「ええ、色んなところに行つてね、先々でつい買っちゃったの」

「わぁ……」

テーブルをまたも埋め尽くさんばかりに並べられた中から手近な一つを手にとつて、シルヴィアは目を輝かせる。外に出られない彼女にとっては昔から、こうして彼らが持つてきてくれるものが嬉しくて仕方なかったのだ。聞かせてくれる話とともに、そこにはシルヴィアの知らない世界がいつもいっぱい詰まっていた。

「それはカルリアのお土産ね」

「カルリア、つて、そんなところまで行つたの？」

「そうよ。もう一年前のことだけだね。冬だったから、雪がすごかったわ」

「うわぁ……寒そう」

常に部屋の中でしか過ごさなかったシルヴィアは寒さというものを冬の窓際に寄つた時くらいにしか感じたことがない。でも、カルリアの寒さがその比でないことは容易に想像できた。

カルリアは国の北部に位置するエルヴィス領の中でも特に北の、公爵家の別邸がある街だ。公爵一家が避暑として夏を過ごすこともある場所で、その時はセルも王都を留守にしたから、シルヴィアはしばらく会えなくて寂しい思いをした記憶とともに町の名前を覚えていた。

「ね、あけてもいい？」

「もちろんよ」

包み紙を破らないようにそつと包装をほどいていくと、ウズラの卵ほどの大きさをした、淡い銀色の細工物が透明な箱の中で揺れていた。ちりん、ちりん、と揺らぎにあわせて澄んだ綺麗な音が鳴る。

「これ、銀……？」

「いいえ、それは白金。さすがに銀はそんなふうに出回らないわ。でも本物は銀よ」

アンジェリーナの声を聞きながら、シルヴィアはあまりに綺麗なそれを箱から出すかどうかで迷つて、結局好奇心に負けて手のひらの上に出してみる。シルヴィアの手の上に、ちりん、と澄んだ音が響いた。

「それね、街にある王都の鐘楼の鐘と同じ型からできた双子鐘を、地方の特産物である白金で模したもののなんですって」

「双子鐘……」

そうは言っても、シルヴィアは王都にある鐘楼さえ見たことがない。似ているのかどうか分からないがお土産のそれには頭の部分にどこかに下げられるよう紐が通じてあって、シルヴィアはその紐を持って目の前にぶら下げながら、まじまじと小さな鐘を観察した。表面に施された細工まで精巧で、古い文字で刻まれた魔よけの文言が読み取れる。

目を凝らして細工を追っていると、ふと、頭のどこかが急に遠くのような感じがあって、一瞬、焦点が合わなくなった。

「……あ、れ？」

これ、どこかで……。

数度瞬きを繰り返せばはやけた鐘の輪郭はすぐにはつきりしてくるが、同時になにか引かかる。

それはごく小さな違和感。けれどそのことにわずか気をやった瞬間、シルヴィアの脳裏に突然、見たことのない景色が浮かび上がった。

驚くほど賑やかな場所、溢れかえる人に、両脇にならぶ赤い煉瓦作りの建物。たくさんの人が行き交う大きな道。そこから視点が少し上を向いたらしく、薄灰色の明るい曇り空を背景にして、背の高い塔が目映る。そうしてその天辺近くには、鈍く輝く銀の鐘——。シルヴィア？

知るはずのない光景が再生されていく。耳を澄ませば、音まで聞こえてきそうだった。怪訝そうなセルの声ではっと我にかえっても、鮮やかなそれは眼裏にこびりついて離れない。

「え、あ……」

「どうしたの？」

濃紫の双眸が、探るようにじっと自分を見つめてくる。見透かされそうな気がした。

「あ、の……。な、なんでもない。その、綺麗で」

見えたものを伝えるべきかシルヴィアは迷ったが、アンジェリーナだけならともかく隅に侍女たちが控えている。まだ彼女たちに慣れないシルヴィアにはそれがどうしてもためらわれて、結局ふるふると首を振った。表情を見てセシルは何か察したかもしれない。けれど、彼は薄く唇を開いただけでそつとその瞳を伏せ、何も言わなかった。

「気に入ってくれた？」

アンジェリーナが訊くので、シルヴィアはくりりと顔をそちらに向ける。何事もなかったかのような明るい口調がシルヴィアにとつては救いだった。ごく自然に頷いて、笑顔がうかぶ。

「うん、もちろん！ ね、本物もこんなに綺麗？」

「本物はもつと、そうね、莊厳よ。いつかシルフィーも本物を見られる日が来るかもしれないわね」

「そのまえにこっちのもう一つを見るほうが先だろうけれど」

今度は振り返ってセシルを見上げる。

「こっちの？」

「そう。城の正面からでも見えるんだよ。テラスになっているところもあるから、そのうち鐘楼を見ながら食事することもあるかもね」
「どうしてテラスでお食事？」

「そついうこともあるのよ、風景が綺麗だから」

今度はまた右側。左右から話しかけられるのに合わせてそちらを振り向いていたシルヴィアは、首の振りすぎでだんだん頭の芯がくらくらししてきた。

「あう……」

「あんまり頭を振るから……シルヴィア、ほら」

「えっ、あつ！？」

「このほうが話しやすいでしょう？」

くすくす笑って腕を伸ばしたセシルはシルヴィアを軽く抱き上げて、驚いている間に彼のひざの上に乗せてしまった。ちょうどアン

ジェリーナに向かって横抱きにされたかたちで二人を視界に入れやすいのは確かだが、これにはこれで問題が……。

「えっ、えっ、ちよっと！」

お腹のうえに、腰から回されたセシルの腕が乗っている。暖かくなってきた少し薄くなった服越しに分かる、自分より熱い温度にシルヴィアは、かつと全身の血が頬に集まっていくのを感じた。

熱い。

ふいに視線を感じてそちらを見遣れば、壁際には三者三様の表情が並んでいた。ちよっと頬を染めているのがマリー、苦笑しているのがクレアでもものすごく怖いのが……言うまでもない。

色んな意味で居た堪れなくなったシルヴィアは、息を潜めつつ唇を結んで俯いた。そうでもしなければ、なにか悲鳴をあげてしまいうそで。

おずおず目の前のアンジェリーナを伺うと、彼女はとても微妙な目をしてシルヴィアとセシルを眺めていた。表情から何を思っているのか読み取るのは難しい。なんとかして、と目で訴えてみるも、彼女はそうすると困ったように眉を下げた。

……あ、でも確かに、なんて言ったらいいんだろう……。

少し前まで、こんなことは日常茶飯事だった、気がするのだ。シルヴィアはよくセシルに抱き上げてもらっていたし、そうされるのが好きだった。

——と、すると、ここで抗議するのもおかしい、のかもしれない……？

そんなことを思いながらもシルヴィアはとりあえず、ときどきと騒ぎ出そうとする心臓を宥めることに目下全力を注いでいるのだった。

そうしなければならぬ原因も分からないまま、ぎゅっと全身を強張らせたせいで小動物のように震えている肩が、彼に触れていることも気づかずに。

「セシル、あなた悪趣味よ」

「アンジュに言われたくないけど」

涼しい顔で隣を歩く食えない男に、アンジェリーナはこれ見よがしなため息をついた。今しがた後にしてきた部屋にいる妹分が心配で、あてつけ以外にも嘆息がもれる。

「どうしてあんなことしたのよ」

「あんなこと？」

「分かってるくせに」

アンジェリーナが軽く睨みあげると、少し先を歩いていたセシルはふっとその口元を緩めて振り返った。沈むのがだいぶん遅くなってきた夕陽に照らされて、逆光になった彼の表情は分かりにくい。

いつものように穏やかな笑みを貼り付けているのかとも、そうではなくて、なにか複雑に微笑んでいるようにも見える。

立ち止まった彼にアンジェリーナが並べば、セシルは一度軽く視線を合わせてまた歩き出した。常ならばアンジェリーナより少し早いくらいの歩調が、今は合わせられているのかアンジェリーナと同じ速度で並んだまま。横顔を見上げて、やはり何を思っているのかは分からなかった。

「あの子、あんまりからかったらかわいそうだわ」

「……………」

「ねえ、気づかないうちにどうにかすべきよ」

答えないセシルにアンジェリーナは苛立ったように言い募る。すると、彼はふと、ほんの一瞬だけ足を止め、その瞳を翳らせた。それは気づかないほど微かな差異で、わずかに遅れた彼をアンジェリーナが振り向いたときにはもう、何事もなかったかのごとく常の色を取り戻している。それから軽く息をついて、セシルはやや低い位置にあるアンジェリーナを見下ろした。

「そう心配することはないよ。『外』に出たら、どうせそのうち……」

……」

セシルの言葉が不自然に途切れる。不審に思ったアンジェリーナが顔を上げると、セシルはわずかにその目を見開いて、じっと前方を見つめていた。アンジェリーナは黙って視線の先を追いついて、そうして夕陽の作り出す光と影の境目に立つ一人の女性に気がついた。お仕着せのような地味なドレスを身に纏い、音のない回廊で静かに佇んでいる女性。初老に差しかかるかという年頃のその人は、小柄な体をぴんと伸ばして、静かに微笑みながらセシルの視線を受け止めているようだった。

「……エマ」

セシルの口から漏れた名前には聞き覚えがあった。アンジェリーナが直接知る人物ではないものの、それはつい最近、まさにセシルが口にした名である。

そのセシルの小さな呟きが聞こえたのか、応えるようにエマ——エメリアは、ゆっくりと、丁寧な所作で腰を沈めて礼をした。彼女はとても感慨深そうに目を細め、開かれた唇からは穏やかな声が紡がれる。

「お久しぶりでございます、セシル坊ちやま。……いえ、今はもう、クロフォード伯爵閣下、とお呼びすべきでございましょうか」

「やめて。坊ちやまも絶対やめてほしいけれど、そんな他人行儀に呼ばれるのも落ち着かないよ」

苦笑したセシルは束の間、少年の頃に思いを馳せたようだ。笑みに郷愁にも似た懐かしさが過ぎる。そうしてそれはエメリアも同じであるらしかった。

「では僭越ながら、セシル様、と呼ばせていただきますよう」

そう言っただけで面映くも懐かしそうに、百年と数十年ぶりに城へと帰ってきたかつての女官長は、セシルを見つめて母親のように柔らかな笑みを浮かべた。

Section・1

季節は春を巡り、さらに先へ進もうとしていた。

「小姫さま、よくお似合いでございますよ」

「ほんとに？ でも、あの、ちよつと恥ずかしい、な……」

シルヴィアが肩越しにエメリアを振り返ると、合わせてふんだんに使われた真っ白なレースが、それでも軽やかにふわりと回る。

それを満足気に見つめるのは最終チェックをしていたアンジェリーナだ。デザインの時点からある程度の予想はできていたものの、実際に着せてみたシルヴィアの出来栄は我ながら完璧だった。

レースも絹もリボンも、すべて純白で統一されたドレス。デコルテの露出は控えめにして、胸下で絞ったあとは惜しみなく布を重ね、床に付いて後ろ側に引くほど長くした裾まで波打つ豊かな襞を作る。デザイン自体はシンプルだがだからこそ本来の美しさが引き立つ、そんな衣装だ。

シルヴィアの腰より長い白銀の髪が、少ない飾りを施ただけであとはゆつたりと流れているそのさまもまた幻想的で、どれほど人々の目を惹きつけることだろう。

だが本人は、はにかむようにほんの少しほほ笑んだあと、もの思ふような憂い目を陽光の差す窓のガラスに向けていた。半分だけ開け放った窓から風がふわりと舞い込み、シルヴィアの髪とレースを揺らす。

「シルフィー、どうしたの？ 疲れた？」

「……えっ、あ、いいえ。だいじょうぶ」

そう言つて笑顔を見せるものの、その表情はやはりどこか力ない。真っ青な瞳の奥に不安を感じ取つて、アンジェリーナは彼女の肩に手を置いた。幼い頃からよくやっていたように、身を屈めて覗き込む。

「緊張しているのね？」

「……。うん。ちょっとね」

「そりゃあねえ。あんな大役任されちゃったら、緊張しないはずがないわよ」

「……………。うん……………」

アンジェリーナがわざと明るく言ってみても、当のシルヴィアは思った以上に参っているようだった。最近忙しいことばかりでゆっくりできないのも原因かもしれない。なにせ、忙しすぎて彼女にとつての一番の栄養剤がなかなかそばにいないのだ。――否、いるにはいるけれど今までのようにのんびりとは過ごせない。

環境の変化に弱いだろうシルヴィアにとって慌しさと少しずつ変わっていく空気だけでも十分だろうに、そこに彼との関係性まで加わればこの憔悴ぶりにも納得がいく。だがそれは、アンジェリーナにはどうすることもできないものだった。

「ま、ちよつと休憩しましょ。シルフィー、それ脱いで着替えたらお茶の時間にしましょよ」

「えっ、あ、うん。マリー、準備してもらえる？」

「はい」

侍女たちのなかで最も歳若いマリーが、シルヴィアの指示を受けてぱたぱたと隣室に消えていく。最近ではシルヴィアもようやく、彼女たちとの付き合い方を掴めるようになってきていた。ちよつと前まで自ら動いてしまふくらいだったのだから、なかなかの進歩だといえる。

そのマリーが出て行った扉からシルヴィアがしばらく目を離さなかった理由にも察しをつけつつ、アンジェリーナはシルヴィアの腕を軽く引いた。向こうにはいつもの通り『彼』がいるのだ。でもまだ、アンジェリーナにはシルヴィアの姿を見せてやるつもりはなかった。

当日に、せいぜい息を呑めばいい。

「シルフィーはこっち。ボタン外していくから、動かないでね」

「えっ、セシルにはいいの？」

「勿体無いから本番まで見せないわ。必要ないし」

「えっ」

「心配しなくても大丈夫。あなた十分綺麗よ、自信もってなさいな。ほら動かない」

「お手伝いいたします」

アンジェリーナだけでなく残った侍女たちまで加わってドレスのあちこちに手をつけられれば、シルヴィアはもう迂闊に動けない。そのやや朱の差した頬を見上げながら、俯いても無駄よ、とアンジェリーナは思った。

だって、腰のあたりで作業している自分たちには、それで余計に丸見えだ。彼女が何を考えたかも。

「シルヴィア、そこ違う。一節飛ばしてるよ」

「うう……」

「ほら、そんな緊張しないで。今からそんなんじゃ本番が大変だ」

「だ、だって……」

「あと魔力が乱れてる。少しならいいけど、あまり大きくぶれると惨事だからね」

「わ、分かってる……」

じゃあもう一回、とセシルが言うので、シルヴィアはしおしおと本の該当箇所を目を落として息を吸った。書かれているのは詞だけなので、旋律は暗唱だ。でもそこは、幼い頃から何度も聴かされて憶えているから問題はない。

問題は……。

シルヴィアは一生懸命ことばを辿りながら喉が震えだしそうになるのおさえていた。セシルが伴唱するやや低い旋律を支えに、どうにか魔力を繋ぎとめようとする。

だが今度もまたうまくいかず、ついには息継ぎができなくなつて、苦しさのあまり『環』がぶつりと途切れてしまった。

「……あ、はあっ」

「大丈夫？」

「……ん……」

肩で息をしていると、セシルが背中をさすってくれる。シルヴィアが詠唱に失敗した時点で彼も謳うのをやめ、乱れた魔力の『場』を平衡に戻す魔法をかけていた。その上でシルヴィアの心配もしてくれるのだから、彼はどれだけ余裕なのだろう。

——悔しい。

「……う、つく」

じんわり滲んでくる涙と嗚咽をこらえようとしたら、ただでさえ苦しかった呼吸がもつとままなくなくなる。セシルが気づいてくれなかったら、息を詰まらせてしまったかもしれない。

「よしよし、我慢しなくていいから、ゆっくり深呼吸して」

「う、う……」

彼はいつもそうだ。泣いている自分を、そうやって甘やかして抱いてくれる。

あたたかい腕の中はこれ以上なく心地よくて、そして苦しかった。

「なにがいけないのかな。昔は普通に謳えてたよね」

「……うん……」

そう、昔は。機嫌がよければ口ずさむくらいに謳うことは難しくなかった。それなのに今は、どうしても力が乗らないのだ。旋律と詞に、魔力を添わせる。以前はそれが難しいこととは思うこともなく、呼吸するのと同じに魔力は環をつくり巡らせた。なにを意識せずとも、ごく自然に。シルヴィアのうたは祈り通りの呪いを紡ぎ、光る環を成し、やがては宙にとけて消えていった。それが。

「何か大きな悩みごとでもある？」

「悩みごと？」

「そう。魔力って、感情、もっと深く言えば魂の状態に強く影響を受けてしまうものだからね。シルヴィアが緊張するのは分かるけれど、それだけでこんなにもなるかな」

「……………」

もともと、シルヴィアはなかなか魔力を御せずに術で失敗すること少なからず、生まれつき魔力の状態が不安定だった。でも幼いころならまだしも長年術師としての訓練を受けてきた今では、それを押さえることもできるようになったはず。多少緊張しているくらい、大した問題ではないはずなのに。けれども胸が重くふさいで、うまく力を放てないのも事実だった。いつもならある程度意のままになる魔力が、どうしてかきちんと巡らない。

「シルヴィア、大丈夫？」

セシルの手のひらから伝わる彼の魔力が、シルヴィアの力の流れを整えていく。

伴唱のパートナーとしても、セシルはこれ以上ない相手だ。シルヴィアの魔力と彼の魔力は、親和性がもっとも高いらしい。確かに、幼い頃から御しきれず暴れるシルヴィアの力を、大人たちよりうまく抑えてくれるのがセシルだった。

そのセシル相手にでもこれなら、本番の相手——まだ知らされていない『守護者』との合唱が果たしてうまくいくだろうか。

そう思うといろんな意味で涙がぼろぼろと零れてきて、シルヴィアは抱き寄せられるままセシルの胸に額をつけた。

「……………つ、やだ、よ……………」

「なにが？ シルヴィア？」

髪を梳きながら、セシルが優しく尋ねてくれる。けれどシルヴィアはそれに答えることはできずに、ただいやいやと首を振った。

いやなのは全部だ。

詠唱がうまくいかないことも、とてつもない重い役目を背負った

ことも、——ここから離れなければならないことも。

それが全部わがままだと、分かっているから口には出せない。口にしてもセシルを困らせるだけ。

つよくなりたい、とシルヴィアは思った。感情のすべてを切り捨てることはできない。でも、せめてそれを抑えこんで立つことができるように、つよく。

察したようにセシルが言った。

「……僕は。きみに、すべてを捨てて逃げると言えない。背負ったものを軽くしてやることもできない。まっすぐに立ち向かえと」

さらりと手に取ったシルヴィアの髪に、セシルは口づけを落とす。

「僕はそうとしか言わない。言わないけど……」

ふいにセシルが言葉を切った。シルヴィアが顔を上げると、彼はじつと自分を見下ろしていて、紫の瞳が何を言っているのかは分からない。彼の言葉は励ましとも、同時にシルヴィアを窮地に追いやるものともなりえた。けれどもう、頼ってばかりはいられないのだ。シルヴィアはみずからの力で、この先をあゆんでいかなければならない。たったひとりで、とは思わないが、いままでのように、ただ心地よい鳥籠の中におとなしく丸まっているだけ、そんなことは許されないから。

竦む足はまるで、はじめてくもりない空を見上げた、忘れられないあの日のように。

Section・2

「セシル！」

「あれ？ 先に帰ったんじゃないの？」

「少しドレスの調整してたのよ」

城門のところで、セシルは後ろからアンジェリーナに呼び止められた。彼女はセシルを見つけて駆けてきたのか、風に煽られたらしい栗色の髪が乱れている。けれどもまったく息があがっていないところやさすがというべきか、アンジェリーナはセシルのそばまでたどり着くと澄ました様子で隣に並び、軽く衣服を整えた。それだけで良家の子女といった雰囲気を取り戻してみせるくせに、その呼吸同様伯爵令嬢という肩書きと見た目に似合わず、アンジェリーナは軍籍に身を置く女性なのだ。それもただの王国軍ではなく、親衛隊。つまりは国王アルフレッド直属の部隊にいる。それももうすぐ配置換えらしいという話を聞いて、彼女が自分の部下だか同僚だかになるのだと思えば、セシルは苦笑するしかなかった。

「どうしてこっちから？ 車は使わないの？」

「今日はなんとなく歩きたい気分だったから」

セシルが居るのは、馬車や車——魔法で動く馬のない車体だけのもの——が通るための広い門ではなく、その隣に設けられた人が行き来するための小さな門の手前だった。普段だったらセシルも行き帰り車か馬車かを使うのだが、たまにはゆつくりと歩いて帰ろうかと車を出すのをやめたのだ。馬車だったらわざわざ来てくれた御者を帰すのには気が引けるところだが、車ならそのまま懐の小箱に仕舞ってしまえばそれでいい。セシルがいつも持ち歩いている手のひらより小さな箱は、アンジェリーナが持ち歩く鞆と同様、拡張された内部空間に様々なものが揃えてある、非常に便利なものである。いつか家具一式揃った小屋も丸ごとひとつ仕舞ったので、どこかで遭難しても全く問題ない。

というわけで気分によつて徒歩で帰宅することを選んだのだが、アンジェリーナが居るなら車を出したほうが良いだろうか。そうセシルが懷に手を入れようとした直前に、アンジェリーナは「じゃあ私も歩くわ」と遅しくも言い切った。

「え、その服と靴で？」

セシルは思わず、まじまじとアンジェリーナの頭からつま先までを眺めてしまった。城下にある屋敷はそう遠くないけれども、今日の彼女は動きにくそうなドレスにかかとの高い靴を履いている。普通の令嬢ならまず無理だ。普通のご令嬢なら歩こうとさえ思わないだろうが。

「平気よ、この格好でも動けるようにしているもの。そうじゃないといざというとき役に立たないでしょ」

そう言つてひらりとドレスの襷をつまんでみせるアンジェリーナの、その衣装の下には絶対に何か仕込んでありそうである。刺さりそうなピンヒールも本当に刺さるかもしれない。シルヴィアは彼女に憧れを抱いているようだが、絶対にやめてもらいたいとセシルは思った。

かなうことならあの子には、そういった物騒なものとは、ずっと無縁でいてほしい。

「……。まあ、アンジュがいいならいいんだけど」

「良いつてば。ね、行きましようよ」

ここで普通ならばその手を取つて歩くのだらうけれど、彼女の恋人のことを思うとなんとなくそれはためらわれた。そんなセシルの心情を察したらしいアンジェリーナはひらりと手を振り、先に立つて歩き出す。横に女性を連れていてそれは落ち着かないところがあったものの、セシルは下ろしっぱなしの手のひらを軽く握つて、彼女とともに門をくぐった。

太陽はまだ幾分か高いところにあり、日の入りが遅くなったことを実感する。ほんの数ヶ月前ならば暗くなっていたはずの空も、まだ西の端が薄紫に霞む程度だった。夏が近い。

「シルフィー、元気なかったわね。調整がうまくいっていないの？」
人の行き交う雑踏に紛れて、アンジェリーナは問うてくる。城の手前の大通りは、いつでも人で溢れかえっている。セシルは話を不用意に聞かれてしまうことのないよう注意しつつ、世間話と変わらない調子で会話に応えた。

「あのあとも会ったの？」

「さつき。帰り際に顔出しておこうと思って、会いに行ったらずいぶん沈んでいたわ」

「そうか……」

アンジェリーナの言うとおり、今日もシルヴィアは上手く『謳え』なかった。歌詞も旋律も覚えているのに、どうやらどうしても魔力が邪魔をするらしい。泣きそうになりながら、それでも唇をきゅつと結んで謳おうとするシルヴィアに、「もういいよ」とどれほど言っただけだったことだろう。

「難しいよなあ」

思い出してセシルはぼやく。単に技術的なものというより、精神的なところに依るものが大きいからだ。そこに詠唱が成功しないことも相俟って、もはや泥沼と化していた。出口がどこにあるのかは、セシルにもシルヴィアにも分からない。なにか、きっかけがあれば、そればかり思いながら、セシルはここ数日を過ごしている。

「ねえ、どうしてアルフレッド様は、シルフィーに光臨式の謳い手なんて任せられたの？ どうしたって負担になるのは分かりきっているじゃない」

「それは……たぶん、シルヴィアの血筋を証明するためだよ。シルヴィアはあの通り、王族としての外見は受け継いでいないうえ、普通では考えられないくらい完璧に存在を隠されてきた。陛下が妹だと紹介しても、受け入れられるかどうか……。けれど、式で使う光の煌珠は、王族の血筋——魔力にしか反応しない。だからシルヴィアが式を成功させれば少なくとも、濃い血を引く姫だということは疑いようがなくなるんだ」

そして現状、王家に国王アルフレッドを除いてそこまでの血を引くものがないということは、シルヴィアを第一王女として扱うことに誰も異議を唱えないということだ。たとえ王の実妹だということまで証明できなくとも、実質はそれだけで十分である。

「でもだからって……」

「光臨式は十年に一度しか行われぬ。今度のを逃したら、たとえ公の場に出たってシルヴィアには疑いが付きまとう。陛下はそれを避けたいんだよ」

光臨式の歌い手――。

十年に一度、世界に満ちる魔力、その循環が安らかであるように願って執り行われる光臨式は、数々ある国の祭事のなかでも最も重要なもの。式の中心は王族、すなわち光の煌珠を守る一族が歌を捧げる儀式で、そこでは詠唱に反応して煌珠がまばゆく輝くから光臨式と名付けられたとも言われている。

魔力の循環をまもることは、世界を護ることと同義だ。力が正常に巡らなくなれば、人も、なにもかも生きてはゆけない。

だからこそ謳う。代々の王族がその守護者とともに、安寧を祈り、かわらない日々が続いていくことを願って。

シルヴィアがアルフレッドから任されたのは、まさにその歌い手だった。国王は、今までアルフレッド自身が守護者であるエルヴィス公とともに負っていた役目を、今度の光臨式ではおまえがやりなさいと、はじめて外に出る妹に託した。シルヴィアが戸惑い、緊張するのも無理はない。まして彼女は、いまだ名も顔も知らぬ守護者とともに、心を添わせて謳わなければならない。

そう、『守護者』。

「守護者、まだ決まっていけないの？」

アンジェリーナも同じことを考えたのだろう。誰にともなく、咎めるような口調で尋ねるのは、彼女自身の苛立ちを表しているようだ。

だが、セシルは答えを見つけられず、曖昧に言葉を濁すしかない。

「……。さあ……」

「さあつて何よさあつて。だいたい、守護者なんて光臨式するとき以外は半分以上ただの象徴みたいなものでしょう。四六時中ひっついてるわけでもなし、それなのにあの子を必要以上に不安な気持ちにさせるなんて腹立つわ」

「それはそうだけど」

と、セシルは歩いていっているうちにだいぶん橙色に染まってきた空を見上げて苦笑した。風が涼しくて心地いい。けれどもアンジェリーナはそんなことなどお構いなしに、本気で憤慨して頬を上気させている。冷たい風が撫ぜても、彼女の怒りはおさまりそうにないようだ。そうして同じ風はまた、セシルの心からもわだかまりを吹き飛ばしてはくれなかった。

「……守護者のことは」

セシルは半分は隣のアンジェリーナに、もう半分は、今しがた去ってきた城の小さな姫君を思いながら、息の混じる言葉を吐いた。

「なによ」

「……いや」

何かを言いかけてとめたセシルを、アンジェリーナは軽く睨み上げる。そう怖い顔しないで、とセシルはいつもどおり穏やかに笑ってみせながら、内心ではもう一つ、軽いため息をついていた。

たったひとつですべてのことが滞ってしまつて、なにもかもうまくゆかない。在るべき答えに手が届かない気がして、それがひどくもどかしかった。

「まったく。せっかくエメリアさんが来て多少安心できるかと思つたのに」

しばらく歩くうちに、住宅街に入ってきた。人通りは少なく、どちらかといえば馬車や車の行き交うことのほうが多い。ここにはかつての七王家、現在では王家を除く貴族の屋敷と、城に勤める大臣ら上位の政務官たちの住まう家が集まっていた。エルヴィス公爵家の屋敷も、アンジェリーナの、ローゼル伯爵家の屋敷もここにある。

「エマのことも、僕は心配だよ」

雑音が減ったことで、セシルは少し声を潜めた。

「どうしてよ」

「シルヴィアが、母君が亡くなったときのことを思いだすんじゃないかと」

あの状況をアンジェリーナが直接知るわけではないけれど、聞き知っているそれに彼女は眉間に皺を寄せた。嘆くようなため息がその艶やかな唇から零れ出る。

「ああ……」

「彼女はあのとき、シルヴィアを除いて唯一生き残ったひとだ。シルヴィアはショックからか状況なんかをほとんど忘れてしまっているけれど、もしもエマが引き金になったらと思えば……。エマはシルヴィアが懐いているひとだし、扱い方も心得ているから安心だけど、その点だけは、ね」

奇しくもそのとき、真っ先に異常を感知したのはセシルだった。当時まだ幼かったセシルは、シルヴィアに会うため登城したところで胸騒ぎを覚え、彼女の部屋へ行く前に衛兵を呼んだのだ。あれは確信に近い感覚だった。シルヴィアの身に危険が迫っていると、理屈抜きに第六感が告げていた。

結果的にシルヴィアはかろうじて助け出されたものの、彼女を守って母であった王妃は亡くなった。そのときのことを、シルヴィアはほとんど憶えていない。けれどセシルは、涙を零すことも忘れ、あのきれいな青い瞳を見開いて震える、小さな身体を憶えている。駆け寄って抱きしめたとき、自分を見てふっと気を失った、その柔らかな重さも。血の気を失って青ざめた頬と翳を落とす睫毛に、セシルはもう二度と、二度と彼女がこんな目に合うことのないようと、噛み締めた唇から血が滲むほど願ったのだ。

「セシル」

呼ばれて、セシルの意識は過去から夕暮れの街へと戻る。声がしたほうに目をやると、アンジェリーナが歩みを止めぬまま、厳しい

眼差しで真っ直ぐに前を見つめていた。本当はその視線の先がどこに向けられているのか。セシルに、それが分からないはずはない。「守ってやりなさいよ」

アンジェリーナは言った。力強い、きっぱりとした声だった。

「あの子が、一番頼りにしているのはあなた。だれより信じているのもあなた。あなたの以上に、あの子を支えてやれるひとはいないわ」

「……うん」

「そうありたいと願ったのもあなたでしょう？」

「……そうだね」

薄闇に変わり始めた空へと視線をやりながら、分かってる、とセシルは小さく呟いた。

セシルが帰宅すると、家の中はどことなく慌しかった。不思議に思いながら使用人に帰宅を告げ、自室へ戻ろうとしていたところで、上階から下りてきたエルヴィス公爵——父、ジュリアンと鉢合わせる。

「ただいま、父さま」

「おや、ちょうど良かった。すれ違ったら面倒だと思っていたんだ」「何が？」

「探さなきゃならないだろう」

しれっとジュリアンは言ったが、彼がセシルを探すことなど指先一本でできることだ。たとえ街の雑踏に紛れていてもあやまたず使い魔を飛ばしてくる彼である、そうだったとして、労力などほとん

どないに等しい。

怪訝な顔をするセシルに、いつまでも若々しい父はにやつと少年めいて悪戯に笑った。

「喜べ。城から晩餐の招待が来ている」

要するに、これを告げるのを引き伸ばしていただけらしい。城からの招待、つまりはアルフレッドが夕食の席に公爵一家を招いたのだ。セシルがまだ幼かった頃の先王の時代にもたびたびあったことで、もはや珍しくはないのだが、城に引き止められなかったのには疑問を感じた。そういうとき、大抵セシルは帰宅せず、そのまま残って空いた時間をシルヴィアと過ごすのが常だったのに。

「伝令とすれ違ってしまったのかな」

「そうでなく単に間に合わなかったらしい。おまえが城を出た直後に、アルがシルヴィアに会って決めたそうだよ。それにしても遅かったな」

「アンジュと歩いて帰ったんだ」

「歩く？ 珍しいね」

「少し、考えごとがしたくて」

このとき父の背後から階段を下りてきた兄がアンジュという名に反応して目を瞠ったのだが、セシルはさっぱりそれを無視した。一瞬目が合ったのをふいと逸らして、手すりに置いた腕を見おろす。ジュリアンも気配で気づいたらしく、こちらはまたもにやつと笑った。息子たちをからかうのが好きな父親である。

もしここでシリルが何か声をあげたら、一言ふたことはからかわれるのだろうな、と思いながら、セシルは父の横を抜けて階段を上った。

「着替えてくる」

「ああ。――セシル」

自室に向かおうと隣をすり抜けた息子を、ジュリアンはふと呼び止めた。セシルが半身を捻って振り返ると、父は先ほどのふざけた雰囲気をごこへやったのか、普段どおりのなかに真剣さを潜ま

せた眼をしてセシルを射抜いた。

「なに？」

「おまえ、まだ迷っているのか」

何のことを言われたのか——示唆するものがなにもなくとも、セシルは何を問われたのか正確に理解した。ただ父からそう尋ねられたことが少し意外で目を丸くしてひとつ瞬き、そして、ゆっくりと首を振る。

「いいや。もう決めたよ」

それだけ告げると彼はもう振り返ることなく階段を上がり、自室に入って上着を脱いだ。ワードローブを開いて仕舞うと、代わりに少だけ上等なものを取り出して袖を通す。釦を留める前に机へと歩み寄り、鍵のかかった引き出しを開けて手のひらに乗るくらいの小さな箱を取り出した。青く光沢のある天鰐絨張りの箱はそれだけでも高価なものだったが、これはもともとセシルの用意したものである。中身だけ手にしていたら、見かねたらしい父の使い魔二人がどこからか持ってきたものだ。

セシルは小箱を開けないまま手のひらに乗せてしばし見つめ、それから大切そうに上着の懷に仕舞いこんだ。

Section . 3

お城の食堂はとても広くて、びっくりするほど天井が高い。はじめて足を踏み入れた城はどこもかしこも珍しいものばかりで、シルヴィアは迎えにきたアルフレッドについて歩くあいだじゅうもずっときよろきよろしてばかりだった。おかげで道順などほとんど頭に入っていない。今も天上を見上げてばかんと口が半開きになりそうなのを、どうにか我慢している最中である。それでも目のほうはしっかりと天井に釘付けされ、描かれたきらびやかな天井画を、うつとりするより圧倒されながら眺めていた。

誰が、なんのためにあんなところに絵を描いたんだろう？ 最初はそう思っ、でもすぐに、いや違う、と思いなおした。装飾とは王城とはそういうものだ。シルヴィアの居た離宮がそうでなかったのは、たぶん、あそこが客人を大勢呼んでもてなすような場ではないからだろう。

「シルヴィア、こちらにおいで」

上を向いて固まっているシルヴィアを、見かねたようにアルフレッドが呼ぶ。シルヴィア。二度目でようやく、シルヴィアはのろのろと顔を向けた。

「お兄さま、眩しい」

目がちかちかする。まん丸に見開いていた目を思い出したようにきゅうと眇めてしばしば瞬き、それでもやつぱり目がくらむ。太陽の光とはまた違った眩しさ。眩しいことに種類があるなんて、思ってもみなかった。

「一番大きな食堂だったら、シルヴィアは目を回すかもしれないね」「もつとすごいのか？」

「広い分すごいというか、まああそこはシャンデリアが大きくて、物理的にも眩しいんだけれどね」

「シャンデリアは大きくなくていいです」

ほんとうに目を回すかもしれないシルヴィアがしょんぼり呟くと、アルフレッドはそのうち慣れるよと言ってくすくす笑った。それから彼がふと時計に目をやったので、シルヴィアの心はとたんにそろわしはじめる。意味もなくドレスの布地を引っ張ってみたり、華奢な靴先を眺めたり。アンジェリーナが仕立てたばかりのドレスはきれいな群青の、しつとりとした、昼と夜の境目みたいな色。動く一番上に重ねられた透けるほどに薄いシフォンが空気をはらんでとても優雅にふうわりと踊る。

鏡がなくて顔は確かめることができないから、本当に熱が引いているか目元を何度も触って確かめた。それでも満足できなくて、シルヴィアは苦笑しているアルフレッドを振り返る。

「お兄さま、もう目は赤くありません？」

「シルヴィ、それもう何度目だと思う？」

「だって……」

夕方にこの兄が部屋を訪れてきたとき、シルヴィアはセシルと、その後にアンジェリーナを見送ったばかりだった。彼らの前で泣くまいと唇をかみしめてこらえた涙はすっかりシルヴィアの目元を腫らして、それを見たアルフレッドが目丸くした。おやまあ、そう呟いて事情を聞いたアルフレッドは、妹の髪をいたわるように撫でながら、今日は久しぶりにみんなでご飯を食べようか、と部屋の外で待機していた侍従を呼んだ。

慌てたのは城の料理長と、それからシルヴィアである。アルフレッドの言った『みんな』とはいちばん近い親戚、つまりはエルヴィス一家も交えてのことと、すでに日暮れにさしかかりつつあったその時刻、知らせを受けた厨房でたいへんな騒ぎになったという。シルヴィアのほうはみつともなく腫れぼったくなった目とにかく大急ぎで冷やして、あとはひたすら治りますようにと念じていた。治癒術を使えば良かったなと気がついたのは、ドレスを着せられて髪を梳いてもらうために座らせられた鏡台で、鏡の中の自分と見つめあったときだった。そのときには、まだ多少目が充血して

いたものの、目元の赤みはおおよそのところ引いていた。

「お兄さま。だいじょうぶ？ わたし、どこも変じゃない？」

「変じゃない、大丈夫。ちゃんと可愛い」

「ほんと？」

シルヴィアがそわそわしているのは、ドレスが新しいせいと夕食会が久しぶりなためだ。いつもより少しの背伸びをする、ちよつとした、けれどシルヴィアには一番特別な行事。いい加減落ち着きなさいとアルフレッドにたしなめられ、シルヴィアはようやく椅子に座った。と、思ったら、侍従がちりんとベルを鳴らして、お客さまの到着を告げる。

「あー！」

いらつしゃい、叔父上。それから二人とも。アルフレッドが苦笑いしながらシルヴィアを横目に彼らへあいさつをしているのを、シルヴィアはその半歩後ろで少し面映ゆく聞いている。ユーリおじさま、とシルヴィアが呼ぶエルヴィス公爵はアルフレッドに挨拶を返して、それから、ふつとシルヴィアに視線を移す。何度見ても三人も息子を持つとは思えない、ほとんどアルフレッドと同じくらい、下手したらもつと年少にさえ見えるその人は、シルヴィアを優しい目で見下ろした。

「おじさまこんばんは」

「こんばんは、姫。少し見ない間に綺麗になったね」

ジュリアンはセシルとそっくりの顔立ちをしている。セシルがもうあといくらか歳を取ったら、双子のように見えたとしてもちつともおかしくないくらい。セシルとは髪と瞳の色が違って、ジュリアンは青灰色の真っ直ぐな髪と淡いすみれの瞳を持つ。声もセシルより少し低い。でも言葉遣いはそっくりで、以前は一人称も同じだったのに、あまりにも息子と似ているからと『私』に変えたのだということをシルヴィアは彼の悪戯好きな使い魔たちから聞いていた。「様子はセシルから聞いているよ。なかなか大変そうだね」

「はい……」

「おっと、あまり姫を独り占めしていると後ろから刺されてしまいそうだ。続きはまた後で、晚餐がはじまってからにしよう」

まさにその一言で彼の後ろの息子たちがおかしな顔をしたのだけれど、ジュリアンは茶目つ気たつぷりに片目を瞑ると澄ました顔で用意された席へと歩いていった。ジュリアンという壁がなくなつたおかげで、シルヴィアは少し気まずい。伏し目がちに視線を逸らしながらこんばんは、と挨拶をしたら、ふっと頭上でセシルのほほ笑む、ささやかな吐息の気配がした。

「こんばんは。よかった、少し元気になつたみたい」

つと、セシルの繊細な、それでも男のひとのかたちをした指先が、シルヴィアの白い目じりに触れる。シルヴィアは「あ」とため息のような音をこぼして、それから何も言えなくなつた。ついさっき泣きつきそうになつたばかりのひとに、今度はほんの微かだけれど、どこか近寄りがたいものを感じて。

「そのドレス、新しいもの？」

「え、あ、うん、そうなの。アンジュが今日くれたばかりで」

「そう」

セシルが濃紫の瞳を優しく細めてシルヴィアを見る。目尻から頬のラインをひと撫でして、彼はシルヴィアから指をはなした。

「似合つてる。綺麗だよ、とても」

シルヴィアには、ありがとう、とそれだけ返すので精一杯だった。いつも穏やかな空気をまとうばかりの幼馴染は、ときどきこうして不意にシルヴィアの胸を突く。それが時に苦しい。

「おいこら、陛下の目の前で妹姫を口説くとは、いい度胸だなセシル」

息が詰まりそうで言葉の出ないシルヴィアに助け船を出してくれたのは、セシルの隣に立っていた、彼の双子の兄だった。こんばんはシルフィー、とアンジェリーナと同じ愛称でシルヴィアを呼んで快活に笑う彼はシリル、双子だけれど顔立ちも目や髪の色も、セシルとはあまり似ていない。シリルは母親に、セシルは父親に似たか

らだそうだ。

「こんばんはシリル。久しぶり」

「いや、俺とはこのあいだ会ったろ」

「あつ、そうだった。お菓子をありがとう、とてもおいしかった」

どういたしまして、とシリルはぐいぐいシルヴィアの頭を撫でる。髪を乱さないように気を遣ってくれてはいるが、彼の、男のひとらしい節のある手からどうしたらあれほど繊細な菓子や料理が出来るのか、シルヴィアにはいつも不思議だった。

「忘れるなんてひどいな」

「わ、忘れたわけじゃないよ。あの時はほんのちよつとだったから……。けれど、サラには本当にずっと会えてない、な……」

「ああ、あいつな……」

双子、と言ったがただしくは三つ子で、彼らの間にはもうひとり、顔立ちはセシルに、色合いはシリルに似た青年がいる。三人は上から順に母親似から父親似へと変わっていつているのだそうで、だから並べるととてもおもしろい。

でも、その真ん中の一人は、残念ながらここにいない。

「サラは今日もまだお仕事なのね」

「ちよつと遠くに行ってるからな。まだしばらくは戻って来られないらしい」

「もつずいぶん長いよね……。いつごろ帰ってくるのかな」

シルヴィアがことりと首を傾げれば、セシルとシリルは互いに目を見交わして、揃って困ったような顔をした。

サラ、本当はサイラスという名の彼と最後に会ったのは、もうシルヴィアに十年の空白ができるより前のことだ。どこへ、と尋ねても曖昧にはぐらかされてしまうから、シルヴィアはよほど危険なところだろうかと心配でたまらない。

もう一度訊いてみようかとシルヴィアが口を開きかけたとき、けれど、三人とも早くおいで、とアルフレッドの呼ばう声がしたためになかなかなかった。残念に思いながらちらりとセシルを見上げたら、

彼は申し訳なさそうな、不安そうな、それでいてどこかほっとしたような、複雑な表情をしていた。

「シルヴィア、いちごあげる」

宝石のような果実がたくさん乗ったフルーツタルト。そのてっぺんに飾られていたルビーみたいに真っ赤ないちごを、セシルがひよいと摘んでシルヴィアの前に差し出した。お行儀が悪いと言われてしまいそうなことだけれど、それもここでは咎められない。子どもたちに礼儀作法を厳しく躾けるかたわら、普通の家庭にあるようなあたたかさを、といつの時代にか時の王さまが言ったから、家族で集うところに堅苦しい作法はなくていい、らしい。

「あ、ありがとう……」

昔ならそのまま口に放り込んでもらっていたいちごを、シルヴィアは手のひらに受け取った。さすがにもう、セシルに手ずから食べさせてもらうなんてことは恥ずかしくてできない。透明なゼリーにつつまれたきれいないちごには、熟れた甘さの中に時季外れの果物に独特の、しびれるような酸っぱさが混じっていた。

「小さい頃から変わらないね、姫のいちごが好きなのは」

「あ、はい、まあ……」

「して、詠唱がうまく行かないって聞いたけど」

「……っ」

ジュリアンの切り出し方は突然で、シルヴィアは思わず飲み込みかけた苺の欠片を喉に詰まらせそうになる。顔が強張ったのを見て取って、ジュリアンはそんなに緊張しなくていいんだよ、と眼差し

をやさしげに和らげた。

「どんなふうにもうまくできないのか分かる？」

テーブルの向こうがわから、ジュリアンはうながすように首をかしげる。セシルそっくりの容貌に、けれど彼とは異なる表情が浮かぶ。さながら、子どもを見守る父親か、あるいは先生のような。

シルヴィアはこっくりと顎を引き、ただたどしくも、身振りも交えて抱いたイメージを彼に伝えようとした。

「あの、なんか、うまく環が繋がらないというか、魔力を、ちゃんと引き出せない、というか……」

力が、うまく巡らないんです。

魔力が環を成して巡るイメージは、魔法を使うものならだれもが抱くだろうものだ。その最初の段階でつまづいてしまっている、それが今までにはなかったことだから余計に、シルヴィアを不安な気持ちにさせていた。

肩を落とすシルヴィアに、ジュリアンはすみれ色の双眸をすっと細める。なるほどね、と小さく呟き、思案するように唇の下に手を当てた。シルヴィアは半ば絶えるような思いだった。魔法や魔力に関することなら、ジュリアン以上にものを知っているひとはいない。

「そうだね……」

ジュリアンはやや言いよどんだのち、シルヴィアのことをまっすぐに見つめた。

「自分のなかにある魔力を、まずはしっかりと感じてごらん。いつもより深く。深呼吸しながら、意識をしっかりと集中させて」

今じゃなく練習の前にね、と彼は付け足し、それからシルヴィアの隣に視線を移す。

「あとはそのセシルが一番、指導役としては適しているはずだよ。同じことで苦労したからね。この子は昔、魔法など一切使えないくらいだった」

「えっ？」

「おや、初めて聞いた？」

「はい……」

隣に座るセシルを見上げると、彼はめずらしく、羞恥を混ぜた苦い笑いをそのきれいなおもてに浮べていた。どうして教えてくれなかったの。シルヴィアがちよつとがった口調で訴えたら、セシルは「まあ、ちよつと」とかなんとか言葉を濁した。

「わざわざ言うことでもないでしょう。そんな機会もなかったし」「でも、わたし、全然知らなかった。セシルは魔法が得意だと思っていたから」

「今は、ね」

含みを持たせるようにセシルは言う。

今はって、いつから得意になったのだろう。シルヴィアの知るセシルは、魔法ならほとんどなんでも使えて、学校の成績もよくて、いろんなことを知っていて、そういう、とても優等生的なひとだった。だからまさか、最初は魔法が使えないくらい魔力を扱うのが苦手だったなんて、思ってもみなかったのだ。

「昔、セシルは体調にも影響して倒れるくらい、その魔力を持て余していた。訓練するのも辛いから嫌いだといって、あまり熱心ではなかったね。……ま、だけどもあることをきっかけに猛特訓して、きちんと制御できるようになった。——何だか知りたい？」

「父さま！」

なぜだかにやりと悪戯っぽく目を輝かせるジュリアンに、セシルは滅多にないほど慌てたような声を上げた。咎める響きをもったそれに、ジュリアンではなく、シルヴィアのほうがびっくりしてしまふ。

「セシル、どうしたの？」

「え、あ、いや……」

シルヴィアの気遣わしげな声ではつと我に返ったらしいセシルは、あからさまにうるたえたような顔をしている。えつと、と何かを言いかけて口ごもり、シルヴィアを弱ったような目で見下ろす。彼のそんな様子もはじめてで、シルヴィアはますます目を丸くした。

「なんなの……？」

「折角だから教えてあげよう。セシルはね、昔、姫がまだ赤ちゃんだった頃に」

「ちよつと……」

「はいはい、うるさいよセシル。……姫が赤ちゃんだった頃に、ひとつの部屋から出られないということを知ってね。私が『狙われて危ないからだ』って教えたなら、この子何て言っただろう？」

隣ではセシルが頬を染めるという見たこともない反応をしているが、シルヴィアはそれとともにジュリアンの話の続きが気になって仕方がない。なんとか父親を止めようとしていたセシルのことは、いつの間にかシリルが抑えてしまっていた。アルフレッドは知っているらしく、面白そうにこの次第を見守っている。

セシルとジュリアンを交互に見遣りながら、シルヴィアは「何て言っただんですか？」とジュリアンに尋ねた。彼はいつそう笑みを深くして、とっておきのように打ち明けた。

「『だったら僕が強くなって守ってあげる。そうしたらシルヴィアは部屋を出ることができるよう？』だって。かわいいよねえ」

「……え」

ジュリアンは父親としての顔に懐かしげな色を浮かべながら、同時に愉快そうな表情をして息子を見遣る。おずおずとシルヴィアが隣を見上げると、シリルからやっとな解放された——というよりシリルを放り出したセシルが、それは居た堪れなさそうな顔をして肌をほんのり紅色に染めていた。

つられて、シルヴィアの顔も火照ったようにじわじわ熱をあげていく。

そのあとに食べた残りのタルトの味なんて、これっぽっちも分かんなかった。

Section . 4

ひんやりした枕に頬をうずめて、シルヴィアは熱い息をシーツに逃がした。

鎖骨に冷たく硬質なものが触れ、逸らしていた意識は否応なしにひきよせられる。ころりと寝返りを打った拍子に肌のうえで弾んだそれは、美しく透ける青い石。水晶の外環に細い銀の鎖を通されてシルヴィアの首に掛けられた、『守護者』に贈られた魔法石。

首から続く銀の鎖に指をかけ手繰り寄せると、爪先がこつりと石にぶつかる。

『きみの瞳とおなじ色』

耳にひらりとよみがえる彼の声。ぎゅっと目をつぶっても、頭に浮かんだひとは消えない。

「今日、眠れないかも……」

石を手のひらに握れば、体温が移ってだんだんぬるくなっていく。枕やシーツも同様で、もうすっかり熱を冷ますには役にたたなくなっていた。

シルヴィアは胸元のそれを両手で包み、とくとくと高鳴り続ける心臓にはおさまらない火照りを持て余す。

「セシルのばか……」

何度か寝返りを打ちながら、もう一刻もベッドの中でそうしている。

疲れているはずの体なのにいつまで経ってもおとずれないまどろみ、それでも思うのは元凶となっているそのひとで。

「ばーか……」

カーテン越しの月明かりを浴びながら、シルヴィアはその夜、しばらくのあいだベッドの上をひたすら転げまわっていた。

「こんなふうに行くのははじめてだね」

そう言って、シルヴィアの半歩先をゆくセルがふわりと笑った。月の光が彼の艶やかな黒髪を縁取って、ほのかに青い影を落としている。満月が近い、とても明るい夜だった。

ひんやり温度を下げた草いきれの立ち上る庭園。シルヴィアは城から離宮へ帰る道を、送ってくれると言うセルと一緒に歩いた。回廊を抜けて庭を横切るだけのさして遠くもない道のりだけれども、彼の言うとおり、こんなふうには手を繋いで、並んで歩くのは初めてだ。いつもは歩くほどの広さなどない、小さな部屋の中だから。

彼の隣に並ぶのは、なんだかすこしくすぐつたい。

「ほら見てシルヴィア、星が綺麗だよ」

くい、と繋がれた手をゆるく引かれる。つられて見上げた先にセル、そしてその向こうには、銀色の小さな光が無数に瞬く満天の星空。シルヴィアは息をのんで目を瞠った。

「すごい……」

「夜に空を見るのははじめて？」

「ううん……。窓からなら見たことがあったの。でも……」

ガラスを通さないだけで、こんなふうに見えるなんて。窓越しでない空は空気を通して手元まで落ちてきていて、そしてどこまでも続いている。

シルヴィアは薄くひらいた唇から感嘆のため息をこぼし、ときどきと鳴る胸に手を当てた。

本当に降ってくるようだ。

ところどころを庭園の木々に隠された夜空は少しばかり狭く、けれどもそのぶんだけどこまでも突き抜けるような遠さを感じる。手

のひらをかざせば指先に隠れてしまう星たち。空は真つ暗なのに、それは美しく透けた闇だった。

この闇が世界を包み込んでいる。このとき、何の疑いもなくそう感じられた。途方もなく大きくて茫漠とした空間、それこそが今見えているうつくしい星空。

「環のかたちをしているらしいよ」

「環？」

「そう。この世界。この空間。正確に言えば球かな」

セルは視線を流して空を指し、シルヴィアはたしかめるように闇の彼方へ目を凝らす。当然ながら環のかたちなど見えるはずがなく、それでも、遙か遠い闇は頭上でゆるやかな弧を描いているような気がした。

一步、シルヴィアが歩みを止めてしまったことで空いた距離を、セルが踏み出して詰める。そうして寄り添うようにすぐ隣に立ちながら同じく空を見上げて、けれど見ている先はちがう。

眼差しに、とても大切でいとおしい秘密を明かそうとするときみたいに柔らかく、それでいてひと差しの真剣さを宿して。

きれいな淡い笑みを浮かべたセルは、シルヴィアを振り返って尋ねた。

「ねえシルヴィア、魔法法則にとって一番特別なかたちが何か知ってる？」

「え？ うん、円環でしょう？」

答えながら、なにをいまさら、とシルヴィアは首を傾げて目を瞬かせる。知識としてのそれはセルから教わったものだけれど、もっと早くから力の巡る感覚というものを肌に感じていたし、きつと魔法を扱うもの、ひいては魔力を持つものならば誰もが教えられずとも自ずと知ることだ。

あらゆる魔法法則にとって基盤となる、魔力の循環とそれを成すかたち。

なぜいま、そんなことを訊いたの？

セシルはいつたい、何を言おうとしているのだろう。

「僕たちの魔法も魔力もみんな、環とその循環を以って基盤として
いる。魔法も魔力も、この世界に深く息づいてる。分かる？」

一度瞼を伏せ瞬くあいだにシルヴィアへと確かめるいとまを置いて、彼が続ける。

「力は巡っているんだ。この大きな世界でも、そして、このきみの、
小さな身体の中でも」

セシルはこれ以上ないくらいに優しく瞳を細めて、繋いでいない
ほうの手のひらをシルヴィアの頭から肩へ、ゆつくりと撫でるように
滑らせた。セシルの大きな手のひらで、シルヴィアの肩はすつぽ
りと包まれてしまう。服越しの肌に、すこし熱い体温が触れている。
「セシル、それはわたしが謳えないことへの……ユーリおじさまが
おっしゃっていたことへの答え？」

「父が？　なんて？」

「自分の中の魔力を感じてって」

「ああ、そうだね……。たぶん、そうすると分かるんだ。ひとが内
に秘める力も、この世界全体を巡っている力も、つまるところは繋
がっている。ひとつの環なんだよシルヴィア。だから世界は球のか
たちをしていて、あらゆるところで元の場所へと還ってくる」

感じて、とセシルは告げた。

「僕らは、もとからあるその環に自分の力を乗せるんだ。逆らわず、
流れに従って」

けれどそれでいて流されることなく。

世界に巡る大きな環は、目に見ることなどできない。でも目を閉
じて深く息を吸えば、巡りゆくものの気配が肌を撫ぜるように、ゆ
るやかに寄りては過ぎてゆくのを感じられる。

そのかすかな感覚をたよりにして、環を手繰り寄せてゆく。

けれども、大地を這い空を通る循環よりさきにシルヴィアは、自
分の体の中に巡るものを強く感じた。それに、触れたところから繋
がっているセシルの気配。

同じ感覚を追っていたのか、セシルを見上げると真っ直ぐに視線が重なっていた。

「こんなふうに、感じるのははじめてかも……」

「意識しなければ、感じ取る前に過ぎていってしまう。僕たちにとってこの環は身近すぎるんだ」

だからいつもは気づかない。

「いちばん大切なもののなにね」

セシルはどこか自嘲めいた笑みを口元に浮かべて言う。でもそれは決して冷たいものでなく、穏やかでやわらかいのだ。

「……シルヴィア」

そのままの瞳で、確かめるように名を呼ばれた。シルヴィア。もう一度、今度は声にしないまま。彼の唇が秘めやかに音のかたちをなぞる。

シルヴィアに触れていた彼の手はそのままずり腕をたどり、指先まで。ちいさく息をつめたシルヴィアに、行き着いた細く華奢な右手をうやうやしく押し戴いて彼は、そっとそこにくちづけた。

「……っ!？」

びく、と驚いたシルヴィアが身をすくませたのに、セシルが唇を離さないまゝくすりと笑う。

「な、なんで……」

「そんなに怯えられると、なんだか悪いことしてる気分になるね」苦笑いを含んだ声音でセシルは囁く。唇をシルヴィアの指先に近づけたままの彼の言葉は、ぜんぶ吐息の触れる位置にある。くすぐったい、でもそれより、熱い。

固まっているシルヴィアを前に、彼はそのまま——シルヴィアの手を捕らえたまま、流れるような動きで湿った芝生へと膝を付いた。セシルの纏う雰囲気戯れのようなそれから一変する。

ときどき、姫君、とシルヴィアを呼ぶ彼がふざけたようにひざまずいてみせることはあったけれど、だけど、こんなのは知らない。なんと表せばいいのだろう、こんな、こんな目をした男のひとを。

「ねえシルヴィア。僕もね、ずっと大事なことを見失っていたんだ。でも、もう見つけたから」

「だいじなこと……？」

それはなに。問う声が揺らぐ。セシルは答えないままふつとほのかな笑みをおもてに浮かべると、戸惑い、揺れているシルヴィアの瞳を捕まえた。

深い、紫のいろ。昼が夜へと変わる瞬間の、それは黄昏に終わりを告げる闇の色。

その瞳が、シルヴィアを真っ直ぐに見つめている。

「シルヴィア。僕の誓約を、きみは受けてくれますか。きみを護るためにこの身を懸けてと、僕が誓うのを」

許してもらえますか。

はじめて聞く声音だった。いつも、どうしようもないくらい甘くて、やさしいばかりのひとなのに。

苦しいほど胸がふるえる。それはたぶん、シルヴィアが幼いころからあこがれた、彼の口からずっと聞きたかった言葉。けれどあまりにとつぜんで、シルヴィアは声をなくしていた。

——答えを。セシルのくれた言葉に、答えを返さなければ。そう思うのにあふれたものはなにひとつ音にならず、シルヴィアにできたのはかすかに顎をひくことだけだった。

それでもセシルは微笑んでくれる。

ふわりと慣れ親しんだやさしい気配のする風が流れて、濃紫の魔法陣がふたりを包み込むように広がった。

「な、なんで……」

「うん？」

光の残滓をきらめかせながら、術式が溶けるように消えていく。それをきれいだなとぼんやり頭の片隅が思っているかたわら、大部分でシルヴィアは呆けていた。

聞いた文言が信じられない。

「なんで、真名、で……」

「でも僕の真名、どうせ知っていたでしょう」

「そうだけど……っ、そういうの、じゃなく、って」

誓約の術式を完成させる最後の言葉。魔法契約の鍵でもあるそれは、術者の名前だ。術者は最後に、自らの名に懸けて誓う。

セシルは最後の最後、そこで普通の名前でなく真名を宣言した。名前に力が宿るといわれるから魔法契約にも鍵とされるものだけだ、真名はさらに特別なもの——魂の名前だといわれているのに、一抹のためらいさえもなく。

「そうしても、僕はこの先後悔なんてしないからだよ」

「そんなの分らないのに」

「しないよ」

シルヴィアをさえぎるようにして断じ、セシルがいつもどおり穏やかに笑む。

シルヴィアは、どうして、と尋ねずにはいらなかった。

どうしてあなたは、真名までかけて誓ったの。

だけどセシルはいつもの笑みを浮かべたまま、そつと人差し指を立ててみせた。秘密、と。そう、つやめいた弧を唇にのせて。

あんまりだ。

頬の熱が一気に上がって、鼓動も一瞬で速度を増す。先のくちづけといいこれといい、シルヴィアの中にある何かの許容範囲を数日分まとめて超えてしまったにちがいない。あまりの熱さにめまいがしそうだった。

そんなシルヴィアの前で、膝についた芝を払いながら立ち上がった

たセシルは、懷から小さな箱を取り出した。

青くつやのあるベルベットが張られた、セシルの手のひらに乗る小箱。シルヴィアはその中に、なにか不思議な魔力を感じた。なんだろう、この感じ。

「それは……？」

「きみに贈るなら、これがいいと思つてた。ずっと」

「ずっと？」

「うん」

聞き返しても微笑みを浮かべて頷かれるだけで、セシルはその意味を教えてくれない。でもとてもやさしい顔をしていて、そうして同じ表情のまま彼は箱の蓋を取った。

「それ……」

「知つてる？ 魔法石の一種なのだけれどね、瞬く光は運命を表すと言われている。“天上石”って言うんだ。ほら」

絹のなめらかな台座に乗っていたのは、深い青色をした珠だった。親指の半分くらいの大きさをした珠のなかで、白い粒のような光がぼんやり浮かび上がっては消えていく。感じていた魔力は、その明滅にあわせて脈打っているようだった。

なにかの鼓動。それは、光が示すという運命の？

箱からそれを取り出すと、セシルはシルヴィアのこめかみあたりにひたりと添わせる。

「きみの瞳とおなじ色」

石を縁取る水晶の外環に通された鎖がひんやり肌に触れて、なのにその冷たさが一瞬で分からなくなるくらい、シルヴィアは笑うセシルに意識を持っていかれていた。

だって、彼はずるい。

さつきから問うことにはなかなか答えてくれないくせに、そんな顔で笑う理由も分からないのに、そんなふうに見つめられたらとてもときどきする。

「少し、じつとして」

セシルの指先が丁寧にシルヴィアの長い髪を持ち上げて、うなじに銀の鎖を通す。首のうしろで留め金をいじる彼の指が肌に触れるのは落ち着かなくて、シルヴィアはつつむき加減になりながら必死に平静をよそおった。

長く感じた時間は本当のところきつと数秒、セシルは器用な指で慣れたふう鎖を留めて、もういいよ、とその声でようやく、目まです瞑っていたことに気がつく。

「うん、やっぱりその石、きみによく似合う」

言って満足そうに目を細めるセシルを、いつまでもは見えていない。彼は分かっている、シルヴィアにそんな顔をしてみせるのだろうか。

だったら、ほんとうに酷いひと。ときどきして、シルヴィアはとても苦しいのに。

「あ、の……ありがとう、セシル」

きゆうと締まるような喉から音をしばらくだして、それだけ言うのが精一杯だった。でも、それだけではどうしても伝えたくて。けれどそれに、こちらこそ、と囁いたセシルがシルヴィアの頬にキスをしたせいで、もともと熱かった肌にさらなる熱が集まってくる。

そつと顔をそむけて吹いてくる風にさらしてみても、なんの意味もなかった。

夜風はぬるくて、頬の熱さもきつと今夜はおさまらない。だって、本当に熱いのはそこでないから。

嬉しかった。セシルが『守護者』になってくれたこと。――そばに居てくれる、シルヴィアがそのひとを繋ぎとめられる、強い理由ができたこと。

ふたたび手を繋いで夜の庭園を歩きながらシルヴィアは思った。

このひとのことが、とても好きだ。

繋いだ手をはなすことなんて、考えられないくらいに。

Epilogue

人々の視線を感じる。懐疑、好奇、値踏みする目。

怖くないのかといわれたら、それはもちろんこわい。人がたくさんいるだけでも冷や汗がにじんでくるのに、かれらの視線がすべて自分を向いているのだ。恐怖心を抱かないわけがなかった。だがそれでもシルヴィアは、耐えて毅然と前を向く。

深呼吸して目の前の祭壇を見上げる。

シルヴィアの目線よりいくらかも上にある壇には、両の手のひらに乗せられるくらいの大きさをした純白の球があった。

光の煌珠。あれこそがフィエル王家の護るこの世界の魔法の鍵、そのうちの一つである。魔法属性に対応して七つあるという煌珠は、それぞれ七王家、つまりフィエル王家と六つの貴族の家系に代々受け継がれ、護られている。

シルヴィアがこの王家の煌珠に対面するのは初めてでなく、幾度かその機会があった。光の煌珠は普段離宮のひとつに厳重な防護魔法のもと安置されている。幼いころからシルヴィアは時折父に連れられて部屋を訪れ、これを守り継いでゆくのが七王家に課せられた最大の使命なのだと言い聞かされてきた。そうして部屋は違えどシルヴィアが生まれてから十年前までを過ごしていたのもまた、その離宮だった。

今、白石の祭壇で水晶の台座に乗せられ衆目にさらされている煌珠は、真白に淡い光を放っている。以前に見たときと同じく、ゆるい明滅にあわせて魔力の波動が感じられた。

幼いころはこの波がおそろしかった。ふと気を抜けばすぐさま呑み込まれてしまいそうだと、そんなふうに感じられたのだ。だから小さかったときもなるべく近くには行きたくなくて、父の背中にへばりついてばかりいた。

でももう、シルヴィアの前に隠れられる背中はない。

挑むように煌珠を見つめ、シルヴィアは祭壇を上る。ふわり、ドレスが揺れる。

アンジェリーナがそれこそ昨日の夜までかけて手を入れてくれた白くけぶるような衣装はためいきが出るほど美しく、作った本人曰く『天使のように』が目指すところだったという、それだけで見惚れるほどのものだった。

シフォン地とチュールレースを重ねてあわく霞むラインは儚げで、対照的に肩の線が出るよう体に添わせられた胸から上の部分では、ボレロに近いかたちをした編みレースがひらりと翻って清らかだ。結われないまま丁寧に櫛を通して流された髪はゆるやかに波打ちながら、ヴェールのように背を覆っている。

あまりに美しいドレスを前にして、シルヴィアは正直気後れした。これに自分が見合うのかと。けれど着付けを終えて所在なさげにしていたシルヴィアへごらんなさいと鏡を指さすアンジェリーナの瞳には、ゆるがない信頼が見えていた。

おずおずとこちらを見返す鏡の中の少女。鏡越しにアンジェリーナがほほ笑む。

見て、あなたは綺麗よ。

本当は、鏡に映る自分を見ても自信などなかったのだけれど、アンジェリーナがあまりにもきっぱり、そしてこともなげな様子で言い切るから。

背筋を伸ばして。胸を張って。瞳と唇には微笑みを。そうしたらあなたは、誰より美しくなるわ。

そんな言葉とともに送り出してくれたアンジェリーナを思い出せば、シルヴィアは応えたいと思った。

(……いいえ、彼女だけじゃない)

背を押し、手を引いてくれるのはアンジェリーナだけでない。数少ない、けれどかけがえのないひとたち。いつも見守ってくれているひとたち。眼裏にうかぶ、かれらが踏み出す力をくれる。

そしてだれより――。

シルヴィアはそつと胸元へ指を添わせ、目当てのものを手に握った。ひんやりしたそれはすぐに人肌のぬくもりを帯びる。伝わる穏やかな魔力の波が、贈ってくれたひとを思い出させた。

（わたしに、多くを懸けてくれたひと）

祭壇に向かつてひざまずく人々の中ただひとり、彼はシルヴィアと同じ場所、少し後ろに添って立つ。

朝に会ったとき、アンジェリーナの作ったドレスを着、生まれて初めて盛装したシルヴィアを見て、とてもきれい、そう、眩しそうにゆるりと濃紫の瞳を細めた。

幾つ言葉をかさねられるより、その眼差しがなによりいちばんうれしくて。

セシル。このひとが、守護者であることを誇れるようにありたい。思いは胸いっぱいひろがって、いまそこに強く在る。

天上石がじんわりと帯びているのはそのセシルの気配だ。守護者が贈る装飾品にはなんらかの魔法を込めることが慣わしであるのだけれども、彼は天上石にいつとう特別な、それでいてシンプルなまじないをかけた。

『きみがさいわいでありますようにと』

言葉が響きをともなつてよみがえる。

『魔法のみなもとは願いであり、祈りだ。そうであるなら、これがいちばん強い僕の思いだから』

それは誓いでもあるのだという。

『きみのことは僕が守るよ。必ず、きみが傷つくことのないように』セシルはいつだって優しい。そのためなら、彼自身を能うるかぎり犠牲にしてしまうくらいに。

いつからかそのことに気づいていながら、シルヴィアはいつも、差し伸べられる手を拒むことも振り払うこともできなかった。できないままここまで来てしまった。

だからセシルのことを思うとき、胸には喜びと等しく苦しさがつきまとう。

（なればこそ、わたしは）

背を伸ばして、胸を張って。虚勢でもかまわない、このひとの隣に、見合うだけの勇氣を持ちたい。

首飾りを離したら、下ろした指先がなにかに掠めた。はっとして顔を上げる。いつの間にそうしたのか手が触れあうくらいの近さで、セシルは隣に立っていた。

重なる眼差し。だいじょうぶ？ 問うような色に、シルヴィアもまた視線だけで返事をした。

だいじょうぶ。——このひととなら、わたしはどこへでも飛んでゆける。

ふかく、ゆつくりと息を吸う。煌珠の脈動と世界の呼吸、すぐ隣に在るセシルの気配と、それから、広間を埋め尽くした人々のざわめき。音にもかたちにもならない、無数の気配を感じた。シルヴィアは目に見えないそれらを感じて捉える。環が廻る、流れの端へ寄り添うように。

魔法の、魔力のみなもととは願いと、祈り。

（わたしの、ねがいは——）

詠唱のはじめの数節はシルヴィア独りだ。でもすでに、セシルの呼吸はシルヴィアのものと同じだった。かすかに触れていた指先を意識してセシルのそれと重ねれば、緩く、だがはっきりした意志をもってそつと絡められる。繋いだところからまた、環が生まれる。

光臨式。

それは詠唱によって魔力の循環をととのえ、巡る環がすこやかであることを祈るもの。けれどシルヴィアは、それだけを謳うのはひどくむずかしいことだと思った。

うたに込めるべき決まりごとのようなそれらのほかに、いまここで、思い浮かぶものがいくつもある。アルフレッドはどうだったのだろう。王族のつとめとして雑念なくこなしたのか、それとも。

ゆるしてもらえるだろうか。ふと、頭の片隅に掠めた考えを、シルヴィアは自ら笑い飛ばした。ゆるされようとゆるされないのではあ

ろつと、この胸いっぱい広がる雑念とやらをなくしてしまうことはきっとできない。

ゆるりと目を閉じ、唇をひらく。高くまで続く空間に声を放ち、はじめの一節、教えられたとおり祈りをこめて言葉をつむぐ。古い言葉で成される呪文。やがてセシルの一段低い旋律が、シルヴィアの主旋律を支えるようにゆったりと重なってきた。

旋律も詞もよどみなくあふれ、宙に響き渡つてとけてゆく。謳うことに集中すればするほど意識は現実と乖離して遠いところをたづなう。現世から放り出されたような感覚のなか、だから余計に、セシルの存在を強く感じる。つとめを果たす義務感は薄れ、代わりに心へ残るのは、シルヴィア自身が抱いた願い。

閉じたまぶたの向こうで真白きひかりが、ひときわまばゆく空間を満たしていた。詠唱はもう終盤で、まだ気は抜けないと思いつつ無事終わりそうな予感に安堵が広がる。ゆづるり、意識が現実のものへと戻ってくる。抱いた想いはそのままに。

（どうかみなのかよくさがさいわいでありますよう）

『——めぐりゆくはるか遠き環と、われらに光の導きを願う——』。

1章 } 翼 } End

Prologue

「そと、暑いのかなあ」

「暑いわよーそりゃもう」

夏、である。

執務机に向かってペンをとっていたシルヴィアは、ふと顔を上げて窓越しに綺麗な青い空を見た。

フィエル王国の、特に王都のある地方は季節がはっきりしている。花が一斉に芽吹く春に、色鮮やかな夏、実りの秋、そして冷たい雪の降る白い冬。今はその二つめ、南のほうほどでないとはいえ、なにかたいへんな季節らしい。出勤してきたシリルがひどく暑いと、それは難儀そうにぼやいていた。

けれどもシルヴィアにしてみればたったいま窓から見たように、季節は目に映るものでしかない。ひとときわ鮮やかな空の青色に、眩しい光を弾いて伸びる木々の瑞々しさ。

悪い季節ではなさそうなのになあ。

シルヴィアがそうこぼすと、近くで封筒を整理していたアンジェリーナがくすくす笑った。

「そうね、素敵な季節よ？　ただちょっと、暑くて過ごしにくいだけ」

「暑いって、あんまり分かんないもん」

窓の外を見つめながら、少しばかり頬をふくらませたシルヴィアはペンをペン立てに戻してお行儀悪くも頬杖をついた。

陽光の差し込む部屋は明るいが、暑くも寒くもない。シルヴィアの部屋はいつでも快適な温度に保たれていて、基本的に暑さや寒さを感じたことがシルヴィアにはなかった。あの早春の日以降、何度かバルコニーまで出てみたり庭を散歩してみたりと外に出ることはあったけれど、ここしばらく、ちょうどシリルが呻きはじめたところからシルヴィアは離宮を出ていない。それでもまだ最近のことだと

思っていたのに、ちよつと目を離していたあいだで季節はあつという間に変わってしまったようである。

「ねえ、いま外ってお布団かぶりすぎちゃったときよりたいへん？」

「そうねえ。セシルどう思う？」

「あとで外に行ってみる？ シルヴィア」

そう言うセシルはといえば、袖の長い服を着ていながらとても涼しい顔で微笑んでいる。うなじにかかる黒髪もさらりと流れ、肌に汗ひとつ滲まない。快適な離宮の中に入って長いから、ではなく朝出勤してきたときにへばっているシリルが隣にいてもそうだったからシルヴィアにはよけい不思議なのだ。

「セシルは暑くないの？」

「かっこつけてんのよ、セシルは。気障な男よね」

「違うから」

きっぱり言い切るアンジェリーナを、セシルが即座に否定する。

これらのこんなやり取りはこのところ毎日だった。まえから二人はこういう感じだったけれども、それがアンジェリーナが訪ねてきたときに時折ではなく、連日見られるのがまるで自分も仲間に入れたもらったみたいで楽しい。みたいで、というより本当に、最後にアンジェリーナが「ねーシルフィー」とにこやかに同意を求めてきて、「本当に違うつて」とセシルが苦笑してシルヴィアを板ばさみにしてくるから、時々感じていた疎外感が消え去っていた。

ふたりからなんとなく感じられる威圧感には、ちよつと困るのだけれども。

「おーいふたりとも、シルフィーいじめるのはその辺にして、お菓子焼けたぞー」

「おや、じゃあ時間もちよつと良いし、お茶にしようか。シルヴィア」

「わたしがいじめられてたの……？」

「そこはいいのよ。っていうか、いじめてないから。シリル」

「こ、ごめんなさい」

シリルとアンジェリーナはとても仲良しだけれど、シリルはアンジェリーナにとても弱い。おまけに本来セルやアンジェリーナと同じくシルヴィアの侍従兼近衛騎士をつとめているはずなのに、もっぱら厨房でお菓子を焼いていることのほうが多くなってしまっている。

だからアンジェリーナにつれなくされたシリルは今日も、どうせ俺は、とぶつぶつしていた。それをアンジェリーナがなんだかんだ言いつつ拾いにいくのもまた日常だ。

「ほらシリル、湿つてるとお茶がまずくなるでしょ！」

「アンジュそれ首、くびしまつて……」

「なかいいいえ」

「シルヴィア、ああいうのがいいの……？」

「？」

一足先にお茶をいただいていたセルが、シルヴィアの隣でなぜか恐々尋ねてくるのは、いったいどうしてなのだろう。

「よくわかんないけれど、仲良しさん、いいなって」

「そ、そう……」

それから、そうこうしているうちに部屋の扉が騒ぎの片隅でそつと開いて、そうして別室で届く手紙の仕分けをしていたニーナが整理を終えたそれらを持ってきて（いつも冷静な彼女にしてはめずらしく）叫ぶのだ。

「みなさま、仕事してくださいっ！」

「まあまあ、よいではありませんかニーナ」

にこやかにだめるのはエメリアで、我関せずと給仕をしてくれるのがクレア、おろおろしているのが年若いマリィ。

そしてかれらのやりとりをすべて無視して、アンジェリーナとシリルはまだテーブルにつかない。

「ふたりとも、お茶が冷めちゃうよー！」

「まあ好きにさせておきなよ、シルヴィア。それよりこっちのお菓子おいしいよ」

「あ、ほんとだ」

離宮の一室にしつらえられたあたらしいシルヴィアの執務室は、いつも賑やかだった。

Section・1

風が、ざわざわとこずえを鳴らす音が聞こえる。それだけならばとても気持ちよさそうだけれど、先ほど見回りに離宮周りの庭園へと出ていたシリルは帰ってきたとき、顔を真つ赤にして辛そうに氷を当てていた。窓から差し込む太陽の光は明るいきりで綺麗に見えるのに、その実、この季節のそれはとても酷いものなのだ。つい先日、シルヴィアも外に出て浴びたから知っている。

シルヴィアがわずか数分で参ってしまったその暑さにシリルは数十分耐えて帰ってきたのだから、いくらアンジェリーナが「だらしない」と冷ややかな目を向けようとすごいと思う。けれど「日よけの魔法を使えばいいのに」とシルヴィアの隣でこっそり呟いたのはセルで、そればかりは教えてあげればいいのに、と思わずにいらなかった。どうやらもうずっと、同じことをわざと言わないままでいるらしい。

「ねえ、セルって、ちょっといじわる？」

当のセルがアルフレッドに呼び出されていまこの部屋にいないからと、シルヴィアは近くで空き封筒をまとめていたアンジェリーナにちいさな声でささやいた。アンジェリーナは一瞬作業の手をとめ、ひよいと肩をすくめる。

「あなた気づくのが遅いと思うわ」

「えっ」

「え、じゃないわよ。ちよつとどころかなりよ」

「そ、そう……？」

「あー、まああなたには分からないかもね。あ、ほらそれ終わったならインクの染みなんか付けちゃう前に寄越しなさいな」

封筒をわきにのけたアンジェリーナはシルヴィアから取り上げた羊皮紙に砂をまき、手際よくインクを乾かしていく。それを横目にシルヴィアはいえ、うずたかく積みあがった手紙の山へ切ない

ため息をこぼした。

手紙はぜんぶ、ついこのあいだ存在が公表されたばかりのフィエル第一王女宛て。つまりシルヴィア宛てのもので、内容はかなりどうでもいいものばかりだった。アルフレッドが王女への謁見を許可しないので代わりに手紙を送ってくるらしいのだが、政治にかかわるようなことをしていないシルヴィアに嘆願書をもって来られても困るだけだし、かといってよく知らない周辺国の王族だか貴族だかのみなさまに雑談めいた手紙を送りつけられてもまた困る。いちおうシルヴィアのもとまで届けられるのは王城の検閲と、それから侍女たちの手で選別されたものに限るのだけれど、それらはつまりそれなりの相手から送られてきた無下にできないものということ、ここ最近シルヴィアを悩ませるもつばらの原因となっていた。

“庭園の花が美しく咲いています”などと、そんなものには「そうですね」 という以外の返信を思いつかないシルヴィアである。唸っていただいていアンジェリーナか、もしくはセシルのどちらかが助けてくれるものの、シルヴィアにしてみればどうしてそうすらすらと当たり障りのない文言が出てくるのかをぜひ聞きたい。

砂を瓶に戻したアンジェリーナにつつかれて、シルヴィアはやつとひとつ片付いたのに、とうんざり盆にできた紙の山から一枚を抜いて引き寄せる。それからすぐにふと眉を寄せ、何の変哲もない羊皮紙の封筒をひっくり返した。差出人の名がない。しかも、封蝋が破られないままだ。

ここにある封筒は中身もふくめ、すべて二度の検閲を経たものばかりだから、封蝋がそのままなどありえないのに。そもそも、差出人の名がないような怪しい封書を、検閲が通過させることなどないはず。不審に思いながらも、けれどふたたび封筒を表に返したシルヴィアは宛名を綴る青いインクのていねいな文字に目をとめて、はつと息をのんだ。

「シルフィー？」

「あつ、ううん、なんでもない！」

この字！ 線が細めでインクの濃淡や太さの抑揚なんてほとんどないシンプルな、ちよつと丸みのある綺麗な字。

とくとくとなんだか速さを増す心臓をなだめながら、そろり、と慎重に慎重に封蝋を破る。破るつもりが、慎重にやりすぎてもとの形を留めたまま紙面からはがれてしまった。

まるでやましいことがあるみたいに、アンジェリーナやほかの誰かがこちらを見ていないかうかがいつつそつと便箋をひらいたら、見慣れた字のならば薄青の紙からほのかなよい香りが漂った。

『親愛なる姫君に。』

ここしばらく暑い日が続いています。このあいだ体験してみた夏の暑さはどうでしたか。暑い暑いとずいぶん楽しそうにしていたが、僕は、きみが日焼けをしないかとても心配したんだよ。

ところで、毎日がんばっているきみにご褒美です。アルフレッド様が城下を見せてあげてもよいとおっしゃったので、暑さがゆるんだころに一緒にお出かけしましょう。いろんなお店を回って、アンジェリーナがおすすめしてくれた喫茶店で一休みしてみたりするの、どう？ ただ遊びにゆくだけではなくて、人々の暮らしを知るよい機会にもなると思う。

日程や護衛のことなどはアルフレッド様とお話をして調整するから、楽しみにしていてね。』

手紙の結びにも署名はなく、ただ見慣れない飾り字らしきサインがあった。たぶんイニシャルだ。そうと予想していれば読める文字。シルヴィアは一字一句のがすまいとするように時間をかけて文を読み、そうして知らないあいだに頬をゆるめて口の端をふんわりとほころばせていた。彼からの手紙——彼がいつの間にかこっそりと盆に紛れ込ませていたのだろう手紙に書かれていたのは、シルヴィアにとつてとてもうれしい『ご褒美』の知らせだった。けれどその内容よりも、手紙をもらったことがただただ嬉しい。こんな他愛のない、ある意味お知らせ以外のなものでもないような手紙で。そう思うものの、顔がゆるむのをとめられない。

思わず便箋を胸に抱いてほうとため息をついていると、アンジェリーナに頬をつつかれた。

「シルフィー、なーにしてるの？　ずいぶん嬉しそうだけど」

「えっ、あっ、あっ、だめ！」

アンジェリーナの指先がついと便箋をとりあげようとするので、シルヴィアはあわてて体をよじって避難する。

「なあに、そんなに隠すようなもの？」

「ちっ、ちがつ、けど……」

「じゃあいいじゃないの。うちのお姫さまがそんなになる手紙だもの、なにか面倒事が起こりそうだったらいへんでしょー？」

「そっ、そんなって……！　そんな手紙だったら絶対見せないもの！」

「でもそれは違うのでしょ？」

なおも伸びてくる手からなんとか便箋を守りつつ、シルヴィアはあわあわと真っ赤になりながら抵抗した。アンジェリーナの手はいたずらで、便箋を奪おうとするふりをしながらシルヴィアをあちこちつついてくる。くすぐったさにもきやあきやあ悲鳴をあげていたシルヴィアもやがて、アンジェリーナがからかっているだけなのだと気づいて目に涙をためながらきつと睨んだ。

「もう、セシルよりアンジュのほうがいじわるよ！」

「あら失礼ねえ」

「ひゃあ！　アンジュ、そこつついちゃだめなのー！」

今度こそ本気の怒りに頬を膨らませて言えば、けらけら笑いながらもアンジェリーナは「はいはい」と両手を上にあげて降参のポーズを見せた。シルヴィアはようやく机に向き直り、さきの手紙に返事を書くべく紙を出す。と、そこでふと、羊皮紙のあまりの素っ気なさに気づいてとても残念に思った。

彼が――セシルが使っていたのは薄青の、花の透かしがはいった綺麗な紙だ。男のひとが使うようなものかな、と思わなくもないが、ともかくそれはとてもかわいらしくて、おまけによいかおり

がした。けれど今、シルヴィアのまわりにはそんな細工をするような香水も、女の子らしい便箋もない。

せつかく、はじめての手紙なのに。

シルヴィアはペンをインクつばに突っ込んだまま落ち込んだ。そういえばインクも、味も素っ気もないただのインクだ。

「ほーら、シルヴィア。これあげるからそんなにしょんぼりしないで仕事なさい。あと、そのお返事はあとでゆっくり書いたほうがいいと思うわ。なにか別の紙に下書きをしてからね」

そんなアンジェリーナの声とともにぱさり、と机の空いたところに置かれたのは淡い紅色をした薄紙の束と、さらにその上に小さな紙の箱。ふたを開けてみると、ふわりと香がかおった。

「それは文香。封筒に入れておくの。薔薇の香りがするでしょう」

「わあほんと……！　ありがとう、アンジュ！」

「うれしそうにしちゃってまあ……」

アンジェリーナは呆れた声でなにごとか小さくつぶやいたが、小声すぎてシルヴィアには聞き取ることができなかった。見上げて首をかしげると「なんでもないわ」と苦笑される。

「そんなことより、ほらお仕事。それ、見つかるまえに仕舞っておいたほうが良いんじゃない？」

「えっ、あっ、そういえばアンジュ知って……！」

「はいはい、ほら早く」

「うう……」

「どうしたの？」

そこへ当の本人が帰ってきてしまったのでシルヴィアはほとんど反射的に、どたんがたんばたん！　と大仰な音をたて机の引き出しへもらった便箋その他を仕舞った。

「シルヴィア？」

「な、なんでもないよ」

さいわいなことに、ほとんど空っぱの引き出しからは紙片がはみだすということもなく、セシルも不思議そうに首をかしげはしたも

の、シルヴィアがふるふる首を振って否定するとそれ以上踏み込んでこなかった。

「そう。ところでシルヴィア、さっき……」

「お喋りならあとになさいませね、セシル様。殿下、こちらが追加のぶんです」

なにか言いかけたセシルを遮るように、きびきびとした動きで部屋にやってきたニーナは盆の上にまた数枚の封筒を重ねて言った。
なかにはあからさまに分厚いものもあって、目にした途端シルヴィアはペンを放り出しそうになる。いったいどのだれだ、あんな手紙を書いたのは。

「うええ……」

「そんなお顔なならない。今日はこれで終わりですから」

「もう書くことないよう」

「なんとか捻り出してください。それからアンジェリーナお嬢さま、その……」

やはりてきぱきと崩れかけた封筒の山を積み直し、弱音を吐くシルヴィアに向かってほとんど意味のない励ましの言葉をかけてからアンジェリーナに視線を移したニーナはめずらしく言葉を濁して言い淀んだ。いつも言動ともにきびきびしているニーナにしてはほんとうに珍しい。いったいなにごとだろうとシルヴィアが手をとめて机から彼女らを見ていると、けれど、アンジェリーナのほうはシルヴィアに向けてほほ笑んでいたときとほとんど表情を変えないまま、心得たように浅く顎を引いた。

「アンジュ？」

「ちょっと外すわね。シルヴィア、あとはセシルに見てもらいなさいな」

「？」

なにがあつたの、とまなざしで尋ねてみたものの、アンジェリーナはそう言ってシルヴィアの頭をひと撫でするとニーナについて部屋を出て行ってしまった。

「どうしたのかなあ。ねえセシル」

「きつとちよつとした相談ごとがあつたんだよ。それよりほら、それ終わらせないとお茶の時間がなくなるよー」

今日のお茶菓子はシリルの作ったラズベリーのムースです。隣に置かれた椅子を引きながら言うセシルの袖を、聞いた瞬間シルヴィアは引いた。

「ねえ、ねえ、これなんてお返事書けばいい？ この方、お庭に杏子が実つたのですって。杏子ってあれよね、黄色くて丸いの」

「黄色くて丸いのは杏子のほかにもいろいろあるけど」

「いいの、ねえそれよりお返事は？」

「僕、男にそういう返事を書く趣味は無かつたはずなんだけど……」
心底いやそうに肩をすくめながらもちゃんと助け船を（というよりこの場合ほとんど代返である）出してくれるのはセシルの優しいところだ。シルヴィアはセシルがすらすらと紡ぐ整った文章を追って真剣にペンを走らせる。

これが終わればお茶の時間。シリルの作る菓子は格段に美味しい。シルヴィアにとってはどのだれか、顔どころか声も知らぬ相手への手紙よりもそちらのほうがずっと重要なことだった。

「できた」

「見せてごらん？」

シルヴィアが書き上げた羊皮紙を、セシルが取り上げて目を通す。

「よくできました」と彼が微笑すれば終わりの合図だ。

「お仕事おしまい？」

「うん、お終い」

「わあい！」

シルヴィアはぱつと顔を輝かせ、羊皮紙やインクつぼを片づけるとふかふかの椅子を飛び下りた。出来上がった封書を手にまとめ持つて、セシルも後を追う。

その夜の泊り番はアンジェリーナだった。近衛騎士のなかでゆい
いつ同じ女性であるアンジェリーナが夜番で離宮に留まる日は寝室
まで一緒にいられるので、シルヴィアは夜更かしをするのが好きだ。
翌日に差し支えることのないようゆきすぎる前に寝かしつけられる
けれども、シルヴィアの、ひとりで使うには広すぎるベッドにふた
り寝転んで、いつもより遅くまでたくさんのお喋りをする。この夜
シルヴィアは、どうせばれてしまったなら、と彼女とともに執務室
ではなく私室にしているほうのテーブルでアンジェリーナと、やつ
ぱりお喋りしながら手紙のお返事を書くことにした。仕事でない、
紛れていたあの手紙への返事だ。彼が帰ったあとに執務室の机から
ひっぱり出してきて、アンジェリーナのくれた便箋に一文字ずつ丁
寧に綴る。

「城下にゆく日がとても楽しみです。街に出たら……、これでいい
?」

「いいと思うわよ。思ったままを書いて大丈夫だって」

「んと、じゃあ街に出たら……出たら……」

「買いたいものとかないの、シルフィー」

「あつ、えつとね、きれいな便箋と香水がほしいな」

「そう書いたら?」

「えっでも、そんなこと……」

「あなたが便箋を買ったら、また手紙をくれるかもよ」

「ほんと?」

「ほんとほんと。ほら、インクが垂れそう」

仕事の手紙の何倍も悩みながら、けれど悩むのも楽しかった。も
らった手紙の嬉しさを思い出しては胸をほこらせて、この胸の

なかを彼に伝えたい、こんなにうれしかったのだもの、と頬を淡く染めながらペンを握る。

「そうだ、街に行ったらペンも買ったらいいわ。仕事のためじゃなくてね、こういう特別なときに使う、かわいいペン。ガラスのペンなんていいと思うわ」

「硝子の？」

「ええ。ペン先まで硝子で、透明な中にいろいろ模様が入っているの。見た目にも綺麗よ」

「わあ……」

いいなあ、と想像だけで胸がふくらむ。そんな調子でアンジェリーナといろいろ話していれば輪をかけて進まないのだけれども、シルヴィアはときどき彼女からも隠しながら、ゆっくりゆっくり心を込めて手紙を書いた。最後に砂をまいてインクを吸うのも自分でやって、ようやく出来上がった便箋をこれまた丁寧に封筒に入れる。

ときどきしながら宛名を綴り、うらの重ね目へと慎重に慎重に蠟燭を垂らしてシールで留めて、ようやく完成。

「できた……」

「はいいお疲れさま。ほら、もう良い時間だから、そろそろ寝ましょ？」

「うん。あ、これ……。ねえアンジュ、手紙ってどうやって出せばいいの？」

「明日の朝出しといてあげるわよ」

「やだ、自分でやる」

シルヴィアが眉を寄せてとても大事そうに出来上がったばかりの封書を胸に抱くので、アンジェリーナはやさしい苦笑いで手を引かざるをえなかった。

「あのね、普通は郵便屋さんに預けるの。でも、王族や貴族なんていうそうそう郵便屋さんに会えないひとは、専属の郵便係に任せるか、侍女や小間使いあたりに渡して届けてもらうのよ。もちろん信用のおける相手じゃなければだめだけど。だから私が預かって間

違いではないけれど、どうせなら明日マリーあたりに頼むといいわ
それがいちばん本格的ね。っていうか、私用の手紙ならマリーかク
レアに頼むのが常道よ」

「ニーナは？」

「いいけど、色々めんどくさそう」

私なら頼まないかも。茶目っ気たっぷりにアンジェリーナが言う
ので、シルヴィアもつられてくすくす笑った。最近はニーナともそ
こそこうまくやっているけれども、そして彼女が悪いひとではない
ことも分かってきたけれど、めんどくさそう、という点には同意
する。

「じゃあ明日マリーに頼もっかな」

「そうしなさい。明日はセシルが来る前にきっちり起こしてあげる」

「ふふ、おねがい、アンジュ」

朝は苦手。でも、明日の朝は楽しみだ。

ベッドサイドのチェストに大事に封書を仕舞って、シルヴィアは
ふかふかのベッドに飛びついた。

それからふと、あることが引っかけたて一度は枕に埋めた頭を持
ち上げる。ちょうどアンジェリーナが、部屋の灯りをチェストの上
のサイドランプだけにして同じベッドに入ってくるところだった。

シルヴィアは彼女が灯りを消してしまうのを待って、もそもそと
体の向きを変えた。

「ねえ、アンジュ」

「なあに？」

「あのね、お手紙のお返事のことなのけど」

「どうしたの？」

暗闇にも次第に目が慣れてくると、向き合うアンジェリーナの瞳
が見える。やがてカーテンの隙間からこぼれるわずかな月明かりで、
部屋はほの青くみえた。

「あのね、あのね。わたしね、セシルからお手紙もらってとても嬉
しくて、お返事を書くのも楽しくて、読んでくれるといいなあ、よ

ろこんでくれるといいなあって、思ったの」

「そうね。きつと喜ぶわ」

「あの、それでね……。いままでお手紙くれたひともしうだったら、ちゃんと心を込めてお返事、しなかったから、悪いことしてるかなあって、思ってた……」

口に出せばはつきりとはしないものの、じわりとした罪悪感が湧いてくる。そうやって目を伏せるシルヴィアの頭を、アンジェリーナは掛布のなかから出した手でやさしく撫でた。

「あのね、シルフィー。あなたには酷なことかもしれないけれど、それからたぶん、きつと分かっていることだと思っけれど。あなたに手紙をくれるひとのほとんどは、そうしてあなたが返事を書かなきゃいけないようなひとのほとんどみんな、セシルと同じようなつもりで手紙をくれたんじゃないわ」

「……うん」

「私はね、そういう奴らってとてもずるいと思うの。分かる？」

「うん。あのひとたちは、わたしと仲良くなることに利益があると思っっているのよね。たぶんだから、わたしはあのひとたちからもらう手紙なんてちつとも嬉しくなかったの。でも、セシルからもらったものはほんとうに嬉しかったの」

シルヴィアが言うと、アンジェリーナはひどく優しい目をして、そつとそれを細めた。それでいいの、と、姉のような口調で紡ぐ。「心を込めてなにかをするって、とてもたいへんなことよ。だからね、シルフィー。あなたはそれを無駄にしては駄目。本当にたいせつなときだけにするの」

いい？ そう、アンジェリーナがささやくので。

シルヴィアはこくりと、ひそやかな衣擦れの音をさせながらうなずいた。

「約束よ」

「うん」

Section・2

Section・2

「シルヴィア」

「なあに？」

「うん」

近くからセシルの声に呼ばれてシルヴィアが読んでいた本から顔をあげると、おもむろに彼の長くてきれいな指から前髪をすくわれて、ちよん、と額の端で留められた。彼の指がはなれたあとに触って確かめると、それは花のクリップだ。最近、セシルがいつも持ち歩いているやつ。

「前髪、伸びてきたよね」

「うん」

「切る？」

「ううん……」

シルヴィアは読書を中断し、本にしおりをはさんで目の前のローテーブルへと置いた。もともとセシルがどこかへ行っていたあいだの暇つぶしとして手に取ってみた本だし、そこまで興味のそそるものではなかったからそれはそれでよいのだけれど、セシルの態度はちよつと、気に入らない。

セシルは何も言わなかったけれども、その表情と眼差しだけでシルヴィアには彼の言いたいこと——思ったことが分かっていた。

年頃の娘に対して、たとえとりあえずのものだとしても子どもが使うような髪留めをつけてかわいい、は、ないと思う。ほほ笑んで瞳を細める彼がお世辞やその場の流れで言っているわけでないことは長年の付き合いで分かるからなおさらだ。

シルヴィアがここのところ前髪を整えず伸ばしっぱなしにしているのにもちゃんと理由がある。やわらかくてくせのつきやすい髪は

厄介なことこの上ない、特に短い前髪などはいつも寝癖に悩まされてしまう。それを伸ばして耳にかけることで目立たなくしたい、というのがシルヴィアの思惑だった。たとえば、セシルの手にかかれればものの数分で直されてしまうものだとしても。

「伸ばしていてもいいけど、目にかかると悪いよ」

気づいているのかいないのか、セシルはそう言ってシルヴィアの髪を梳くように撫でる。大好きな手のひらの感触に目を細めながらもシルヴィアはセシルに答えを返さず、彼を見上げて話題を変えた。「セシル、どこへ行っていたの？」

「アルフレッド様のところ」

「ごめんね、一人にして。」

どう受け取ったのか微苦笑をうかべながらシルヴィアの隣に腰かけたセシルに、シルヴィアは首を横に振りつつ兄の用事とは何だったのだろう、と内心首を傾げる。

今日はシルヴィアに週に二度与えられた休日で、セシルもまた休みの日だ。近衛騎士としてはアンジェリーナが付いている。彼女は見回りに出ていて部屋にはいない。

だから今はただの友人としてここへ来ているセシルに、それでもわざわざ呼びつけるような用事があったということなのだろうか、アルフレッドは。

「……なにかあったの？」

子どものころから変わらない仕草で、けれどもかつてとは違う想いでセシルの肩に頭を預け、シルヴィアは視線を落としたままぼつりと訊いた。

アルフレッドがセシルに対して用事というときは、そのほとんどがシルヴィアがらみだ。存在が公にされて以降身边がなにかと世話しないのにはそろそろ慣れてきたが、とはいってもわずらわしく感じてしまう。避けられない身分であることは、理解しようとしているけれど。

「気になる？」

「それは、だつて……どうせわたしに関わることなのでしょう？」

「まあ、……そうだね……」

分かつちゃうか、とセシルはどこか疲れたようなため息について背もたれに体を預ける。彼のそういう珍しい雰囲気、シルヴィアは心配になってそつと顔をあげた。目があった彼の瞳はそれでもいつもと同じ、穏やかでやさしい光をたたえた濃紫。幼いころから変わらない、シルヴィアのいっとう愛する色。

「来月、アルフレッド様の誕生日にお祝いがあるでしょう」

「うん。わたしも、今度街に行く日には、プレゼントを貰うつもりなの」

前回、お忍びでの市井視察という名目のもと初めて城下の街に連れて行ってもらったときには、その人の多さとはじめて触れる『外』の空気にシルヴィアはわずか一時間経たずに目を回してしまった。そのことはもちろん、随行していたセシルにも知られている。

だから再挑戦の意も込めてシルヴィアが言えば、返ってくるのはやさしい苦笑い。

「今度こそ、なの」

そんなセシルへシルヴィアは少しばかり頬をふくらませ、言葉にされなかった彼の思いに気を強くして言い返した。

「アンジュともいろいろお話してるのよ、どこに行こうとか、お洋服のこととか」

「ああ、前に着ていたやつではもう肌寒いかもしれないね。かわいかったけれど」

街に下りるにあたって、普段着ているドレスでは目立つし動きにくいだろうとシルヴィアはアンジェリーナに用意してもらった町娘ふうの服を着た。膝丈のワンピースなんて初めてで、なんだかいけないことのように感じたものだ。でも年頃の娘らしく、シルヴィアもまた着飾ることにそれなりの興味を持っていたからには、それを着て街を歩くのはとても楽しかった。生成りの柔らかな色味に、ふわりとしたスカートがたしかに可愛い服だった。

「一回しか着られないのはもったいないなあ」

「来年また、着る機会があるよ。それに、そうだね、気候が前回よりも穏やかだから、今度はもう少し長く出ていられるかもしれない」

「楽しみだねとほほ笑みあうふたりのあいだには、いつとき和やかな空気が流れた。だがそれも長くは続かず、ふつりと会話が途切れてもとの話を思い出すころにはまたしてもセシルから、どこかうんざりしたような――厭うような雰囲気がただよってくる。話することにはなく、内容そのものを。」

「……今朝、招待状の返事が来たらしいんだ」

「お兄さまの、お夜会の？」

「そう」

「軽いため息をはさんだセシルは、やっぱりどうしてかその話をひどく煩わしいと感じているようだった。王女の側近という立場上彼が抱える面倒事はたしかにないとはいえないけれど、それにしてもこんな彼を見るのは初めてに近くて、シルヴィアは顔に出さないようにしながらも驚く。」

「でも……お返事が、その、そんなに困ることだったの？」

「嫌な、ではなく困ると言い換えてセシルをうかがうのはなんとなくためらわれたからだ。国王である兄に言いつけられたことならば彼の個人的感情でどうこうできるものではないのだし、また彼自身それをよしとしないだろう。セシルのそういう、ある種の潔さが生来のものなのか、あるいは国に仕え身を捧げるといふ貴族と呼ばれるひとたちの性質から身に着いたものなのかは、シルヴィアの知らないところだけれども。」

「困るというか……そうだね、うん。困るかな、やっぱり。警備のこととか色々……」

「警備？」

「カリダ皇帝陛下自らお越しになるそうだよ」

「えっ……えっ？」

「少しばかりの遠回りをして、問題の一言はやけにざらりと告げら

れた。おかげでシルヴィアはその意味を呑みこむのにまばたきを二回ほど繰り返して、理解したらしたで目を丸くして聞き返さないでいられなかった。

式典や夜会の招待状はたしかに各国代表宛てに送られ、カリダ帝国に対しても皇帝の名で書簡が行ったのには違いないが、よほどのことがない限り本人でなく大使などの代理出席となるはずなのだ。ましてやカリダほどの大国、皇帝がそう易々と国を離れられるわけがない。おまけにかの国はつい近年までフィエルと大陸を二分しかねないほど大きな、そして長きに渡る争いを続けていた——カリダ皇帝の代替わりとともに協約が結ばれ、表面上対立がなくなっただけはいえ、その歴史も傷跡もまだ薄れてはいないのに。国内も両国間の関係だって決して安定しているとはいえないだろう。

それをなぜ。

「皇帝陛下の言い分としては、ようやく国内も落ち着きを取り戻してきたところだし、協約によってもたらされた平穏な関係を確固たるものにしたいとあえてのご出席、だそうだ。まあ皇帝自らが出向くということには、一定の効果もあるだろうね、カリダにも、それからフィエルにも」

「でも、……あまりにも急ではない？」

「急だよ。つまり、今言ったのは表向きの理由。実際は正当な血を継ぐ王女が存在に……いや、きみに、ただならぬ関心を寄せておいでなのだろう、カリダ皇帝は」

それは、半ば予想していたことだった。国王生誕を祝う祝典は、あの光臨式以来はじめての公の行事である。シルヴィアは、光臨式のように式だけでなく、今度は夜会まで王女として出席することになっていた。カリダ皇帝もそう考えたのだろう。要するに、直接シルヴィアにまみえる機会だ、と。

「アルフレッド様も、予想以上に反応が早いとおっしゃっていらしたよ。僕も、そして父もだけれど、まだしばらくは様子見されるかと思っていたのにね」

ほつと息をはいたセシルは、いたわるような表情をシルヴィアに向ける。まったく面倒なことだとぼやくかたわら、また同時に彼は、そう心配しなくてもきみは大丈夫だよ、とひどく優しい笑みをうかべた。

「フィエルが王女の存在を公表したのはきみを守るためだ。隠されたままでは、手出しをされたときに表立って動けないからね……でもそれはこの国が、戦争の混乱を抜け、疲弊した国力を取り戻して国防という観点からも十分な態勢を整えたってことでもあるんだよ。うかつに手出しはされないさ」

「下手なことをしたら大騒ぎ、なのでしょう。この国が強いのはみんな知っているから」

フィエルは豊かな国だ。経済も、軍事も、地の魔力も、大国と呼ばれるにふさわしい力を有している。だから、先の大戦から立ち直るのも早かった。

だから大丈夫、不安はない。そう伝えようとしたシルヴィアを、なぜか制するようにセシルは淡く苦笑する。その意味にシルヴィアが気づくより早く、彼はシルヴィアの肩をそっと抱き寄せ、「忘れないで」とささやくほどの声で言った。

「きみは、僕が守るよ」

目があった、彼の瞳は穏やかな濃紫。けれどその奥底に宿る光は——とても深く、強かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7259h/>

天上の恋歌 光の楔

2011年10月4日01時56分発行